
ロウカス！

結倉芯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウカス！

【Nコード】

N9151U

【作者名】

結倉芯太

【あらすじ】

『世界消滅戦争』から五年。世界は未だ不安定な形で存在していた。そんな中『魔闘士』を目指す少女がいた。少女と仲間達の出会いと軌跡、歯車が今、回り始める……

プロローグ

世界が真っ白になった。

さつきまで私達の生活を規則正しく刻んでいた立派な大時計のあったレンガ仕立ての教会も、活気に満ちて賑わっていた市場の店先も、今は原型を留めておらず、眼前に広がるのは砕けた瓦礫と焼けた看板……。

店から漂っていた食欲を誘う香ばしい川魚の包み焼きや、ブルーベリーパイの甘い匂いも消し飛んでしまっていて、代わりに漂ってきたのは鼻をつくような焦げ付いた腐臭だった。

私は両親と買い物に来ていただけなのに、どうしてこのようなことになったのだろうか……。

人ごみの多い市場の中、私は父様や母様とはぐれないように二人の両手をしっかりと握っていた。父様の手はゴツゴツして大きくて暖かくて、母様の手は柔らかくて綺麗で優しく、人ごみは嫌いだっただけで、二人と手を繋いでいる時間は嬉しくてたまらなかった。

しかしそんな幸せな時間は長くは続かなかった。

賑やかな市場からいきなり街中に響き渡るかのような大きな爆発音が起こる。耳を塞ぎたくなるような轟音と共に、武器を携帯した全身黒一色の軍服を着た男達が瞬く間に現れ、次々と買い物に来た民衆に襲いかかってきた。狼のように獰猛(どうもう)に、見かけた者から手当たり次第、頭に一刺し。人がまるで家畜であるかのようになんの抵抗も許されずに、一方的に軍服達に虐殺されていた。地獄のような光景に動揺する私を、父様は近くに置かれていた酒樽に押し込んだ。母様は酒樽の蓋を閉める際、周囲の音や気配が消えるまで絶対に出てはいけないと私に言って聞かせた。二人とも恐怖に涙を浮かべ、唇も明らかに引きつっていたのに、その口からは私を安心させようと「大丈夫」という言葉を何度も呪文のように唱えていた。

私は母様の言われたとおり、酒樽の中に隠れて、あのおぞましい出来事がとおりすぎるのを恐怖に震えながら待った。外から聞こえる阿鼻叫喚の声は、両手で耳を塞いでも指の隙間から水がこぼれるように漏れ聞こえ、狭く光の無い暗闇の世界が心を凍らせる。

怖い、辛い、怖い、寂しい、怖い、暗い、怖い、恐い、こわい、コワイ。

もうおかしくなりそうだった。精神の維持が困難になりかけた時、物凄い衝撃と共に私は何かに吹き飛ばされ意識を失った。

気がつくと、私は真つ暗闇の中にいた。しかし直ぐにあの忌まわしい記憶と共に自分の置かれている状況を理解していく。

脳内から溢れ出てくる恐怖に耐えられなくなり、樽から転げるように飛び出る。これ以上、あの狭くて暗い世界にいるのは嫌だった。

しかし、飛び込んだ世界もまた酷い情景を私に見せつける。

市場の通りには炭化した果物や装飾品が散乱しており、目の前にある店は支柱が折れて、屋根が傾き、煙が細々と寂しげにたっていた。漂う臭いは鼻のまがるような、今まで嗅いだことのない刺激の強いものだった。

異臭の正体はすぐに判断できた。

それは木片や果実と同じように転がっていた人の焼けた臭い……。私は零れ落ちる涙を拭いてもせずに近くにあつた死体にすり寄った。眼前に広がる無数の死体。その中に両親がいないか確認する為だった。しかし、その中に二人は確認できなかった……。違う、確認しようが無いほど私が見た死体達は損傷が激しかった。どれもが黒焦げになっており、辛うじて性別は判断できるものの、最早その死体が両親であるとはとても断定できなかつた。中には頭が割れ、腹は裂けて内臓物が飛び出しているものも幾つかあつた。我に返った私に言いようのない猛烈な吐き気が襲いかかる。それに堪えられるほ

ど私は気丈ではなかった。身体が示す反応に従って嗚咽を漏らしながら吐瀉を撒き散らす。

吐き気が治まり上体を起こすが身体は鉛のように重たかった。精神的苦痛はもちろんだったが肉体的にもかなり疲弊ひへいしていたようだ。目の前に移る灰色の世界は涙で滲み、もう何もかもなくなってしまう**え**ばいいと思った。

だって私にはもう何も無いのだから、失うものも頼れるものも……そして大切な人達も……。

それは理解の出来ない範疇はんちゆう（はんちゆう）にあつた。今まで当たり前のように存在していた物が、人が、あまりにも無残な風景の一部として私の瞳に映っていたのだから。

それから私は何時間、何日歩いたのだろう。もう時間の経過も、昼か夜かも分からない。お腹は空いているはずなのに何も食べたいとも思わない。それなのに歩くことは止められない。なぜだろう、止まってしまえばきつと楽になれるはずなのに……。私の足が私の言う事をきかなくなるまで、私は灰色の世界を歩き続けた。

この色の無い世界は、何処まで歩いても荒れた町並みと散らばった死体ばかりで、変化は無かった。とつくに疲れきっていた私は気がつくくと、教会の前にいた。休日になるといつも通っていた。立派な大時計と虹色のステンドグラスが素敵な教会だった……。

教会を見上げる。七色で彩られていた綺麗なステンドグラスは無残に割れ、焦げ付いた窓枠だけが灰色の煙をもくもくと蛇のように立ち上らせる。大時計は当然の事ながら動いておらず、長針の針はどこかへ飛んでいってしまった。

私は短針だけになった大時計を見つめる。短針をクルクルと見守るように廻っていた長針は既に無く、その長針の助けがなくなり進むことが出来なくなつた短針は今の私のようだった。

「なんなのよ……。どうして……？」

理由わけ（わけ）わかんない。

「どうなつたっていうのよ……」

久しぶりに発声した声はまるで自分の声じゃなかった。いつものように明るい可愛らしい声ではなくて、喉から出たそれはしゃがれて低く、私よりもずっと年上の男の子が言ったような声だった。その声に反応するかのように、私の瞼からまた大粒の涙が落ちてきた。それは私が歩みを止めなかった理由がわかったから。そう、まるで私は存在していないみたいじゃない。そんな馬鹿な事があるもんか、私はここにいるの。世界に存在しているの。だから

私を独りにしないでよ！

誰か私を救ってよ！

何でもするから！

言う事聞くから！

だからお願い！私を助けてよ！

私は教会として機能していないその建物の前で願い、顔を両手で覆うと力無く座り込んだ。

もう何かをする気力なんてなかった。そんな人生を諦めかけた私の頭上から声が聞こえた。

「大丈夫か？」、と。

私はその声の方向に向かって顔を上げようとしたがもう気力の限界だった。

眠るように声の主にもたれかかると意識を失った。

私が経験した『世界消滅戦争』、その名前の通り世界の大半が消滅した戦争が終わって五年が経った。

この戦争で世界の国と呼ばれるモノの殆どが消滅してしまった。長引く戦争で各国は国力を維持できず、国が疲弊すると当然ながら民の生活は困窮を極めた。連鎖的に各地で反乱が起き国は潰れていった。

ある国は多大なる魔法使用によって、人の住めない地へと変貌してしまった。

魔法は使用する際に土地の養分の根源となっている『精^{せい}』を吸い上げてしまう為、過度の魔法の使用はその土地の木々や草花、水資源の枯渇を意味した。人の争いとはなんと醜いもので、それが分かっていても力を行使し続けた。

そして『世界消滅戦争』で使用された魔法による影響から、人の住める土地はもはや僅かな場所だけとなってしまった。この戦争に参加した国は例外なく先ほどあげた二例のどちらかによって滅亡している。

そして五年経った今、生き残った僅かな人々は新たに権力者を擁立して新しく国を興し、生き残った僅かな資源を頼りに生活していた。

今現在、世界にある国で先進国的立場にあるのが国王による立憲君主制により統治されている『イングリド』、国民議会主導のもと民主主義を貫く『スーペル』、ローム神への信仰心から結託した法国家『ロマリエ』、そして最後に5年前唯一中立を保ち続け国を維持してきた独立都市国家『バーゼル』である。

この四力国を中心に世界は新しく生まれ変わった。

しかし新しく生まれ変わった世界でも争いは絶えなかった。国同士の思想の違いの為か、一部の強欲な主導者の所為か、利権と欲にまみれた争いが頻繁に発生していて、とても平和になったとはいえる状況ではなかった。

私の生きている世界は未だ不安定な状況で存在していた。

1 魔闘士試験

「いつてきまゝす」

「おつ、今日は試験だったな」

「そそ、パティと一緒に試験場。帰りは多分夕方になると思つよ」
丸太仕立ての自宅を出たアリエルは、家先の丘で洗濯物を干していた兄に言う。

「あんまり遅くなるなよ。スーペルとの平和条約が結ばれたっていつてもまだ治安は安定してないからな」

兄は視線を洗濯籠に落としたまま忠告をする。

「これから魔闘士試験を受けに行くのに、そんな事言われてもなあ……」

今日の試験は実技試験なのだ。試験内容に近接格闘や銃撃戦だつてある危ない試験に赴くのに、あの兄はさも平然な面で「あんまり遅くなるな」だ。そんな試験を可愛い妹が受験するというのに、少しは心配した表情の一つくらい見せてくれてもいいではないかと思つてしまう。

団栗を頼どんぐりに詰めこんだ小リスのような顔をしながらアリエルは家を後にする。丘を下り、麦畑の広がる畦道を通り市街地へ入ると幾重にもある裏道を縫つて大通りへと出る。

大通りは通称「市場通り」と町の人々から言われており、装飾店や飲食店が道の両端にズラリと軒を連ね、店では店主らが商品の陳列をしたり、店の看板を掲げたりと忙しそうに準備をしている。もう少し経てばこの市場には新鮮な果物や魚、店頭に上品に飾られた雑貨を求め、多くの御婦人達がやってくる。そうなると十数人が余裕で往来出来る程の広い通りがたちまち人で埋まり身動きがとれなくなつてしまう。アリエルは賑やかで活気のある風景は好きだったが、人ごみの中は息苦しくてちょっぴり苦手だった。

なので、市場が賑やかになり、人ごみに巻き込まれる前にこの大

通りを抜きたいと感じ、またパティとの待ち合わせの時間に遅れていることもあって足早に合流場所である教会を目指す。教会は市場を北に抜けた町の中心部にあり、巨大な尖塔は町のどこからでも見つけられるし待ち合わせの場所として多くの民衆が利用している。

「パティ、待ったあ？」

「遅いわよ、三十分の遅刻」

パティと呼ばれた女性は腕組したまま刺々しい視線を浴びせかけてくる。教会のシスターに間違われそうな真っ白なコートとロングスカート。唯一、太もも近くまでスリットの入ったスカートは淑女が着衣するものとは思えない。教会のシスターはあんなに過激なスカートは絶対に穿かないだろう。

それだけでも十分に魅惑的なのに、獅子の鬣のような色をしたブルンドの長い髪、切れ長の美しい瞳まで持ち合わせているのだから同じ女としてはやっていられない、とアリエルは思う。

そんな美人な友人は約束の時間をオーバーした事にご立腹のようだ。

「ごめんごめん、お昼は私が奢るからさ、それでなんとか……」

アリエルは両手を顔の前で合わせて申し訳なさそうに謝るついでに、語尾を少しずつ小さくすることで反省の意を強調させる。

「しょうがないわね」

するとパティは肩をすくめ、やれやれといった感じで承諾する。

パティがそこまで腹を立てていなかったので自然と顔が綻ぶ。もう四年の付き合いになる親友は怒りっぽい一面もあるが、基本積み重ねなければ、このような小さいことで彼女は怒らない。

「そいじゃあ早く行こうよ。このままじゃ試験受けられなくなっちゃうよー」

アリエルは遠くに見える立派なレンガ屋敷を指差して歩を進める。パティは「全く調子良いんだから」と諦めにも見える盛大なため息を漏らしていたが、アリエルは気にしないことにした。

『魔闘士試験場』、文字通り魔闘士の資格試験を主催する為に建

てられた試験場である。入り口には大きな鉄門があり、その奥から横長いレンガ屋敷が出迎えてくれている。その背後には巨大な円形の闘技場があり試験はそこで行われる。

とうとうこの時が来たのだ、と長年待ちわびてきた躍る心をアリエルは抑制するように胸に手を当てて、深呼吸を一つすると門をくぐる。

満十六歳以上になった男女は魔闘士の資格を取得できる権利を貰える。また試験場はこの独立都市国家『バーゼル』にしかない。周囲を見渡すと肌や髪の色が違う人も多く見受けられる。皆この資格を目当てにこの国へやってくる。幼い頃は思わなかったが、そんな人達を見ると旅程からくる疲労や旅費の工面などで大変だろうと、今では感じてしまう。魔闘士の資格は世界共通の資格となっており、魔法の使用が認められる他、市街での武器の携帯も許可される。ここ数年で行われた治安維持の強化の成果もあつて比較的大きな街は治安が良くなっている。その結果、一般人による街中での武器携帯は禁止されており、国の認可を受けた者にしか武器の携帯は許されなくなっている。

『世界消滅戦争』からの教訓により、魔闘士の定義は大きく変わった。

魔法は魔石という特殊な石を媒介にして発動する。五年前までは魔石さえあれば魔法の才能のある者なら誰でも使用できたし、一般的には魔法の使える人が『魔闘士』と呼ばれた。

しかし魔石を独立都市国家『バーゼル』が管理することで魔法の濫用や悪用を防ぐことにした。その後、魔石が管理されるようになって魔闘士の資格取得法が世界的に成立し、魔闘士を志す者達がこの独立都市国家に集まってくるようになった。

ここで魔闘士の資格を取得した者は結構な待遇で各国に迎えらる。警察や傭兵、才のある者は重要人物の警護に迎えらる等、需要は高い。リスクもあるがそれに見合う荣誉と報酬が付いてくる。魔闘士は今、世間の憧れの的となっていた。

「ふえ〜、思ったより人多いね〜」

受付を終えたアリエルは辺りをキョロキョロと見渡しながら試験会場へと向かう。

試験会場である闘技場は収容人数三千人規模の大きな施設だ。試験の無い日はその名の通り闘技場として運用され開催のある日は多いに賑わう。時にはスポーツ大会など庶民のレクリエーションの場としても使われるバーゼルでも有数の娯楽スポットの内の一つだ。アリエルも兄と一緒に何度か足を運んでいる為、この会場は見慣れていた。その中心の壇上では試験官長が試験内容の説明を言っているようだったが、アリエルはそんな大事な説明をまるで聞かずに自分とは外見の違う異国の人々を興味深そうにジロジロと見ていた。きちんと聞かなくてはいけないのはわかっているが異国の人間は珍しい為、ついつい眼が泳いでしまう。

「コラっ、きちんと聞きなさいよ」

そんな散漫な状態していると横に立っているパーティに頭を小突かれる。背が高く聖職者にも見える彼女の服装から、傍からみると完全にパーティがアリエルの保護者のように見えてしまうだろう。

「あいたっ」

あまり痛くないが、反射的に出た言葉と同時に渋々と視線を壇上へ移す。確かにパーティの言う通り、この説明は自分の未来を左右するわけなのだからしつかりと聞いて把握しておくべきだろう。人の話を根気よく聞けるタイプではないが、此処は頑張って話を聞いておく。それにこれ以上よそ見をしていたら、先ほどの遅刻の件と合わさってパーティが本気で切れそうだからというのもあった。

壇上では初老の長く伸ばした白い髭が特徴的な官長が、ゆっくりとだがはつきりと耳に通る声で説明を続けていた。

試験内容は属性の調査と身体検査をはさんでから二対二のタッグ戦らしい。ペアは誰でもいいのでその場で決めてしまっていていいようだ。それからタッグ戦で使用する武器の選択となる。試験の審査は勝敗よりも武器と魔法の使い方、戦術方法に重点を置く為、武器の

選択は合否を分ける結果に十分になりえる。試験内容の説明が終わると、会場内での注意事項やら飲食、休憩所の場所の案内やら施設利用による説明へと話が切り替わる。すると途端に試験官長のゆっくりとした口調が、催眠術のようにアリエルの眠気を冗長させてくる。度々会場に訪れているアリエルはそういった共有施設の場所には既に分かっているので、今更そんな話に真剣に耳を傾ける程の理由はない。つまりは興味の無い話を聞くのは退屈以外何物でもないということだった。欠伸は隣にパティがいるのでしなかったが、最早それも時間の問題になりそうだ。

「もうそろそろ終わるわよ。それにこれから属性検査だから楽しみじゃない？」

さてどうしようかと困っていると、パティがアリエルの気持ちを看透かしたかのように言う。さすが親友といったところか。パティが発した言葉に眠気があつという間に飛びさつていく。

「だね！ 私は何属性かなあ。パティは何がいい？」

「何がいいって言われてもねえ。こればかりは生まれもったものだから、どうしようもないわね。でも属性がなんであれ私が選ぶ得物は変わらないわよ」

パティは壇上に目を向けたまま自信に満ちた表情でそう断言する。

「私も！ 属性がなんなのかは気になるけど、私が使うのも変わらないよ。兄様の部屋にあるアレしかないもん」

「あんたも好きよねえ、まあどうでもいいけど」

今までアリエルが『アレ』に対する憧れ話を散々パティに言ってきた所為か、パティはゲンナリとした顔をする。

そんなやりとりをしていると、試験内容の説明が終わったのでアリエル達は属性の調査を行う為に、一度通路へと出る。闘技場の控え室が検査室になっており、各自定められた検査室へと移動するのだ。受験番号ごとに各々指示された部屋へ行き検査を受けることになっている、とたしか試験官のおじいちゃんがそう言っていた気がする。

「アリー、あんた何号室？」

「Dかな。パティは？」

「私はB」

「じゃあ終わったら受付会場の中にある休憩所で待ち合わせさせてください」

「そうね」

お互いに合流場所の確認をして別々の検査室へ向かう。

パティと別れると、控え室へと繋がる階段を降り、指定の列に並んで数分が経過する。そろそろ順番が回ってきてそうな頃、前方からどよめきのような歓声があがった。

「おいおい、『光』属性だってよ」

「ホントに？」

喧騒に耳を傾けながら、何が起こったのか確認する為に前にいた男の背中をトントンと人差し指で軽く小突き、尋ねる。

「何かあったの？」

「なにもかも、『光』属性の奴が現れたってよ！」

男はアリエルを振り返り興奮した口調で話す。

「そののなにが凄いのさ？」

「お前っ！ 知らないのかよ？ 光の属性つてのは世界でも未だ2人しかいなかったんだぜ。ここ5年間ではたったの一人だ！ これはある意味歴史的な瞬間だぜ！ 他にも様々な希少属性つてのがあがるが、『光』だけは飛びぬけて珍しい！ 『光』属性つてえだけで将来を約束されたようなもんだろうな」

まるで自分の事のように話す男は、興奮の為にアリエルに上体をやや寄せて、時々口から唾を飛ばしてくる。アリエルは回避の為に少し後退りしながら、両手をかざしそれをブロックする。

そもそも、アンタはその歴史的瞬間に立ち会うためにわざわざ試験を受けに来たのか、と突っ込みたくなる。そう言えそうなほど、男は自らの目的を忘れたかのように興奮していた。喧騒の理由も分かり、これ以上この男と話すと気分が悪くなりそうだった。

アリエルがそう思っていると、列が動き出したので、すかさず男に告げる。

「わかった、凄いのには十分わかりましたあ。あつ、そろそろ順番ですよ」

精一杯の愛想笑いをしてから男の後方を指差す。男はアリエルに言われ、我に返る。少し恥ずかしそうな表情を見せると、検査室へ入っていった。

男が検査室へ入ったのを確認して、アリエルは膝丈ズボンのポケットからハンカチを取り出し、手を念入りに拭く。

全くデリカシーの無い人だったなあ。女の子に対してあんな事を気付かずやるなんて、紳士じゃないよ。ありや絶対彼女いないねと心の中で腹を立てていると、検査室の前にいた女性に呼ばれる。

検査室に入ると、白衣を着た検査官が透明色の丸い石を持っていた。

「え、アリエルさん？」

検査官は手に持っている名簿に目を通しながら尋ねてくる。

「はい、番号D 15です」

返事をする、検査官は持っていた小さな石をアリエルの前にある台の上に置く。

なんでもない、ただの透きとおった小さな石ころ。

これが魔石なのだろうかと首を傾げているアリエルに、白衣を着た検査官が説明する。

「じゃあ今から属性調査を行います。今ここにある魔石にあなた自身の血液を垂らして頂ければ結構です。魔石は血液に反応して色を変えますので、その色であなたの属性を調べます」

前の人からずっと同じ事を言ってきたのだろう、検査官は機械的に口を動かしながら、助手の女性が持ってきた果物ナイフの一つを取る。緊張のせいか、体が少し固くなり鼓動が大きくなっていくのが分かる。

「石が赤に変われば火属性、青は水、黄は土、紫は雷、緑が風属性

です。まあ例外はありますが殆どの方が今挙げた五つの属性のいずれかに変化します。さあ、それではやりましょうか、手を出してください」

これまた感情の無い機械的な言い方に不思議と緊張感が増す、それをやわらげる為に大きく深呼吸をした後、右手を前に出す。そして検査官がアリエルの親指の腹を少し切ると、血液を石に垂らした。すると、石は少し光った後、緑色へと変化した。

それはあまりにもあっけなく一瞬で変わってしまった為、アリエルは口を開いたままポカンとした表情でそれを見ていた。そんなアリエルを尻目に検査官はアリエルの親指に包帯を巻きながら説明する。

「おめでとうございます。あなたには『風』の属性魔法の才能があるようです。それではこの石に紐を通し、首に下げてから身体検査室へ移動してください」

アリエルは石を受け取ると、彼等に一礼して隣の身体検査室へと移動した。

自分が期待していた程の感動は無く、あまりにも淡々とした事務的な作業に呆気にとられたまま検査は終了した。

2 試験開始

受付会場の中にある休憩室。

元々娯楽施設としての運用も兼ねているので、ここでは食堂としての機能も備わっており、これを利用して試験者も多くいた。彼らはこれから始まる実技試験に向けての作戦を立てたり、食事や休息を取ることで、十分な体力と鋭気を養っていた。

そんな多数の利用者がいる中で、紅茶を飲みながら読書に興じるパーティを見つけるのは難しくなかった。すぐに駆け寄って声をかける。

「待った」

「別に、私も終わったばっかだし」

呼ばれたパーティはアリエルに気付き視線を上げる。休憩室の一番奥のテーブルで、お茶を嗜みながら読書に興じていた彼女はとても優雅で知的に見える。まさに絵になる美しさ、といったところか。

その美しい外見は、遠目から見てもかなり目立つのだ。しかしパーティにそんな事を言っても興味無さ気に笑っただけなので、言わずに端的に結果を聞く。

「で、どうだった？」

「結構あつけないもんだったわね。思ってたより事務的すぎて少し興ざめ」

「そうそう、もう少し感慨深い感じがあってもいいのにねえ。なんか拍子抜けしちゃったよ」

アリエルはパーティの向かいの椅子に腰を下ろし、テーブルに頬杖をつきながら愚痴る。

「で、属性何だった？」

「火」

パーティは開いていた本を閉じ、胸元から赤い魔石をちらりと見せ

て短く答える。

「へえ、私は風。お互い属性があつて良かったねえ」

検査で魔石が変化せず、属性が無いと判断されるものも少なくない。そういつた者は例え試験に合格しても魔法を使うことは出来ないのだ。使おうとしても使えないのだから仕方がないが……。そう考えると、属性はやはり無いよりもあつた方が良いのは当然だとアリエルは思っている。

「そうね。後は実技試験をクリアするだけね」

「だね。ペアは勿論私と組んでくれんでしょ？」

お願いされたパティはアリエルと同じように頬杖をついて言う。

「私以外にアンタのパートナーになれる人なんてこの会場にはいないでしょ？」

小さく微笑むこの友人は同年代の女の子より落ち着いた性格のせいか、時々年齢より大人びて見える。長くスラリとのびたブロンドの髪、切れ長の瞳がそれに拍車をかける。背も高いし、スタイルも抜群なので、アリエルとしては羨ましい限りだ。

「じゃあご飯食べたら武器選びに行こうよ」

楽しそうな表情で語るアリエルをパティは一瞥してから呆れ顔になる。

「アンタはもう決まつてるでしょ」

「パティだつてそうじゃん」

お互い意地の悪そうな笑みで微笑み合った後、お昼の注文をする為、側を通過した店員を呼び止める。

「あ、そういえばお昼はアンタのおごりだったわよね？」

アリエルはからかう様な軽口を言い放つ親友を睨み、懐からガマガチを取り出して中身の確認をする。

くそう、おぼえていやがったか……。

昼食後、受付でペアの登録を済ませると、武器庫へと移動する。武器庫内は埃っぽくカビ臭い臭いが充満していた。格子から日が差してはいるが、中は薄暗く足元に気をつけないと、段差やぞんざいに置かれた武具につまずいてしまいそうになる。

武器庫内には様々な武器が置かれていた。弓や剣、槍等種類や形も様々で、選ぶのも一苦労しそうな広さと量だ。だが倉庫に入った二人は、入り口付近に立っていた管理者に一言尋ねると、スタスタと獲物を取りに行つて数十分後にはまた休憩所に戻つてきていた。

「やっぱりこれだよ〜」

アリエルはリボルバーを回転させながら、うっとりとした目で呟く。アリエルの選んだ武器は銃だった。リボルバー式の短銃。威力は銃の中でもさほど高くなく、どちらかという威力より連射を重視したタイプだ。

「アンタはソーザさんの影響から絶対にそれだつて分かつてたけどね」

そう言うパーティの背後には大きなバスタードソードが立掛けられている。アリエルの身長程ある剣は、パーティのような女性が扱えるような得物には見えない。アリエル達の傍を通過する人達が、必ずと言っていいほど驚きの表情をしていた。

「パーティこそそんな女らしさの欠片もない武器じゃんかあ〜。自立つてんよ」

「でもあんたは知ってるでしょ？」

「まあね〜、なんでそんな大剣が振れるのか今でも不思議」

彼女の家は有名な騎士の家柄で、彼女は幼い頃から大の大人でも逃げ出すような厳しい鍛錬を積んできた。その頃からの積み重ねがあるからこそ、アリエルは彼女がこのような大剣を容易く扱えることがわかっている。けれどもスタイル良し、頭良し、ルックス良しの三拍子が揃っている女である。まさか気品や上品といった麗しい

言葉で出来ているような彼女が、このような女性らしくない勇ましい獲物を持つことなど、誰が想像できようか。

「さて下準備、下準備」

そんな周囲の視線を他所にアリエルは腰にぶら下げたバッグから弾を取り出すと、弾に魔力を込める作業を始める。傍から見ると、弾丸に魔法を込める事で魔砲弾として使用する魂胆が丸分かりになっている。

「アリー、いいの？　こんな大勢の前で自分の武器の種を明かしちゃってさ」

見かねたパーティが呆れた顔で一応の忠告をする。

「いいのいいの、どうせ一発撃っちゃったら分かっちゃうんだし、一撃必殺の攻撃でもないからさ。それよりもパーティも五、六発込めといてよ」

そう言い放ちながら、バッグに手を突っ込んで弾を数発パーティの目の前に転がすとパーティは軽いため息を一つ放ち、テーブルに転がった弾を手取る。

「はいはい、ペアですからね。でもアレは隠しておきなさい。いざって時の切り札にできる可能性もあるから」

「うんありがと、だからパーティって頼りになるのよね」

「私もあんたの事、頼りにしてるからね」

二人がそんな会話をしていると、館内にパン、パン、と手を叩く音が響き渡った。音の聞こえたほうを見ると、試験官が受付から出てくる。

ゆったりとした動きで館内中央に来た試験官はゴホンと大層な咳払いを一つして説明を開始する。

「え、ただいまから実技試験を開始致します。呼ばれた番号の方は控え室のほうまで移動をお願いいたします」

試験官の声と同時に館内がどよめく。

いよいよ始まる。アリエルは作業の手を休めずに、緊張感と高揚感を同時に感じていた。

試験開始から一時間程時間が経ち、とうとうアリエル達の番号が試験官の口から呼ばれた。試験官に連れられて控え室に移動し、最終的なルールと武器の確認をする。

試験時間は十五分、二対二のタッグ戦。タッグ内での役割としてまずリーダーを決める。リーダーは証であるプロテクターを胸に装着し、そのプロテクターに嵌め込まれた赤いガラスを砕いた方が勝者となる。手段は問わず、リーダーのガラスを割る為なら相手を殺しても構わない。魔闘士になった場合の待遇は素晴らしいのだが、魔闘士になる為のリスクもそれ相応に伴う。

フィールドは無属性の闘技場なので、属性による魔法の強弱は発生しない。単純に戦術と個々の能力がモノをいう戦いとなる。

最後に対戦相手の名前を試験官から伝えられる。

「リオ」メツシエルダーとフラン「バレッジ」かあ」

控え室の椅子に座ったアリエルは頭の後ろに両手を回し相手の名前を復唱する。その横でパティが深刻そうな顔をしている。形のいい眉が中央に寄って眉間に皺を作っている。

「どうしたの？ 皺、できちゃってるよ」

アリエルは彼女の眉間を人差し指で弾く。

「リオって人、属性調査で話題になっていたあの光属性よ」

「光属性だからってなんなのさ」

ああ、そういえば属性検査の時の男の人も同じことを言ってたなあ。

しかしそれを聞いてもアリエルにはパティが深刻な表情をしている理由がわからない。そんなアリエルに突き刺すような視線を向けながら、パティは口を開く。

「いい？ 光つてのは攻撃特性に富んだ希少属性なの。光速による一撃必殺の強力な攻撃、武器が何であれ、光の速さの攻撃を避けることは不可能に近いのよ。私達はその攻撃をかいくぐってガラスを砕かなきゃいけないのよ。よりにもよって世界で三人しかいない内の一人と戦う羽目になるなんて……」

おそらく私のお気楽さ加減が原因なのだろう。うなだれながらもパーティは能力の説明をしてくれる。険しい表情のパーティを尻目に、アリエルは太ももに巻かれたホルダーから銃を引き抜くと、引き金に人差し指を突っ込み、そこを基点に銃をクルクルと回転させる。自信満々の顔で目は不敵に笑って見せる。

「でも無理じゃないよね。私とパーティならどんな奴でも敵じゃないよ、今までもそうだったようにこれからも、ね」

その台詞にパーティは瞳をきよとんとさせて首をもたげる。

「そうね、この程度の壁、私達に超えられないわけではないじゃない。じゃあ役割を決めるわよ」

「今までどおりっしょ。パーティが考えて私が動く、これが一番なのさ」

「アンタもたまには考えなさいよ。それに私だってちゃんと行動するわよ……」

そう言うってから顔を上げる彼女は、男ならば必ず固まるであろう妖艶な笑みを決める。こういう時のパーティは本当に頼りになる。

「私はあんたの眼にかけるわ。リーダーはアンタ、とにかく光属性の子には常に注意して。視線は外さないように、距離をとるの。その点に限っては近接武器の私よりあんたの方が適役だわ。相方のフランって子は私が相手するからアンタは常にリオを視界に入れておくこと。私が狙われた時は攻撃の妨害をして。多分相手のリーダーはリオ、なんてったって光属性の有利性を相手が利用しない手は無いわ。恐らくアリーと一緒に銃とか弓みたいな飛び道具系の武器を使用してくると思うの。近距離よりも安全に、しかも強烈な一撃を相手のレンジ外から叩きこめるからね。だからまずはフランを先に片付ける。とにかく光属性の子は2対1の状況にしてからじゃないと勝ち目はないと思うの。それまでアンタは私の援護と光属性の注意を引きつけておくのよ」

パーティの説明にコクコクと頷く。攻撃力に富んだパーティがアタッカーになるのは当然だし、自分の武器は中距離で援護に適している。

異論はない。

「じゃあ一丁がんばりますか」

「よろしく頼むわよ」

お互い腕を交差させ、気合を入れる。二人は控え室を出ると、歓声が響いてくる通路を抜け闘技場へと向かった。

3 タッグマッチ

闘技場に入ると、既に対戦相手の二人がいた。

小柄でみすばらしい服装をした銀髪の少女と、青い鎧を纏った端正な顔立ちに桃色の髪をなびかせた女騎士だった。共に無口そうなタイプであることは、彼女達の外見と漂ってくる空気でわかる。少女の背には銃口の長いスナイパーライフルがあり、リーダーの証であるプロテクターも確認できる。先ほどパーティが言っていた通りだ。女騎士の方は両手に丸い鍋の蓋のような物が握られている。あれは一体何なのだろう。

「ねえ、あの女騎士の人が持っているのって何かな？」

気になって思わずパーティに尋ねる。

「チャクラム、かしらね。多分飛び道具だね。二人揃って中、遠距離タイプとはね。これはチャンスだわ。懐に潜れば勝機があるわよ」

「はいはい、じゃあお互い頑張りましょう」

試験官が点呼を始めた。リオ「メツシエルダーと呼ばれ、銀髪の少女が小さい声で返事をする。大体検討がついていたが、やはり彼女が例の光属性か。瞳も髪の毛も銀髪、服はみすばらしいが、人形のようなたたずまいは美しくて神秘的な魅力があった。アリエルはそんな彼女をジッと見つめる。

石造りの円台を囲んだ観客席からの視線が自分達に集まるのを感じる。

「いよいよだ。これはわずかな油断が命に関わる危険な試験だ。今までにないほどの不安がアリエルの心を侵食する。しかしそれは相手も同じなのだ、それに私には頼りになる相棒がいるのだから、絶対に負けるわけがないのだ。そう言い聞かせ、アリエルは集中を高めていく。

張り詰めた空気の中、試験官による点呼が終わり、いよいよ戦闘

開始の合図である鐘が鳴る。

開始と同時にリオの銃口が素早くアリエルを捕らえにかかる。まずは私か！

アリエルはそれに気付くと同時に地を蹴り、小刻みに身体を揺すりながら、動きを不規則にして標準を外しにかかる。

『ピュシュッ！』

空気を裂くような音と共にアリエルの頬の直ぐ横を光る何かが通過した。背後でおこった大きな衝突音から威力の大きさが理解できた。

「確かにありゃ一撃必殺だね」

少し熱さの残る頬に冷たい汗が伝う。

「ぼさつとしない！ 次くるわよ！」

パティの声で外れかけた視線を銀髪の少女に戻す。

とにかく直線的な攻撃だ。まずは銃口、これに注意して後は指。少しでも動作があれば回避行動に出ればいい。武器はスナイパーだから連射はできないようだ、リオはこちらを見据え弾込め作業にかかる隙を伺っている。ならば手数で勝負する！

「まずは攻撃させないことっ！」

アリエルは銃を太ももに巻いてあるホルダーから素早く取り出すと、魔弾を円を描くように連射する。中身はアリエルが魔力を注入した風弾だ。トルネードのような荒風がリオに向かって吹き荒れる。リオはライフルを盾にして踏ん張り、それを堪える構えだ。

あの様子だと私の銃に殺傷能力が無いことを見抜かれている。思っていたとおり、リオはライフルを盾にして自らも腰を落とし風圧をやり過ごす。でも私の役目はあの子の足止めだ。今はこれで十分としよう。

パティは合図と同時にフランに向かって突進、それを迎え撃つ形でフランはチャクラムを投げつけてくる。チャクラムは水を纏い高速回転でパティへ襲い掛かる。向かってくるチャクラムをバスタードソードで切り払うとそのままダッシュし、フランに斬りかかる。しかしフランも片割れの水のチャクラムで斬撃を受け止める。

「あら、私の攻撃を受け止めるなんてあなた相当な馬鹿力ね」

素直な賛辞だった。アリエルの身の丈ほどあるこの剣の重量と剣圧をなんなく受け止めた。この蒼い鎧を纏った女騎士はかなりの鍛錬を積んでいると見て間違いなさそうだ。そうでなければここにはいない、か。

「いえ貴女こそ、その身のこなしといい、そのような大剣を容易に振るう技術といい、相当な腕と見受けられますが」

お互い体勢が固まったまま笑い合う。きつと相手も同じことを考えていたのだろう。

初対面がこういう形でなければきっと仲良くなれただろう。なんとなくだが、これほど思考が一致する人間と巡り合うのは初めてだ。フランの顔立ちは桃色の長い髪がなければ中性的に見えるほどに華麗に整っていた。しかし間近で見ると綺麗な長いまつげや小さな桜色の唇はこの騎士が女性であるということを確認に告げてくれる。あのような格好をせずにもう少し女性らしい服装をすれば、多くの男性の気を引くこと間違いないだろう。

美人な上に実力者なんて、本当に似てるじゃない

競り合いの最中、そんなことを思っていると背後から先ほど弾いたチャクラムが襲ってくる。しかしそれがパティに当たる前にアリエルの風弾がきつちりとフォローしてくれる。

チャクラムに追尾式の操作が出来る事は全くの想定外だったが『しまった！』、とは思わない。こんな時、騒がしい相棒は頼りになる。

アリエルはそわそわした落ち着きの無い性格だが、パティの気付

かない事によく気付く。市場通りに買い物に行つたときや祭典の時に知人を見つける割合がアリエルの方が異様に高かつた。最初は気のせいかとも思ったが、あるときにアリエルの視野の広さが驚愕のものだということが分かつた。それ以来パティはアリエルの視力には一目置いている。

チャクラムが全てフランの両手に戻つてきたタイミングでパティは一度フランから離れアリエルと合流する。

「思ったより厄介だわ」

「こつちは全く気が抜けないよ」

お互いに愚痴がこぼれる。

そんな嘆きなど関係なく、フランは水のチャクラムを二人とは見当違いのところへと投げ、更にもう一投をアリエルに向けて投げてきた。

なぜあんな方向に？ と考えるよりも、チャクラムを手放したフランを叩ける好機だとパティは思った。

「ッ！！」

しかしその一步を踏み出そうとした瞬間、飛来する閃光と共に身体に強烈な熱さと痛みが走る。

それは光線がパティの脇腹をかすつて通過していた証拠だつた。その場で膝をつくが、どうやって狙撃されたのかは直ぐに理解できた。自分に向かうことのなかつた水のチャクラム、そしてあさつての方向を向いたまま、煙を上げているリオの銃口が全てをものごとつていた。

かすつただけなので傷は大した事はないが、これは非常にやつかいだ。自分ではまずかわせない。そう感じる類の攻撃だつた。辛うじて直撃を避けられたのは考えるよりも先に行動しようとしたおかげだろう。あのまま上体を動かしていなければ、今頃腹にぽっかりと穴が空いていたはずだ。

アリエルが飛来してくるチャクラムを撃ち落して、パティの元へ駆け寄る。

「上手くやられちゃったわね。まさかチャクラムに光線を反射させちゃうだなんて」

「だね、片方の円盤で私の援護を封じてから、もう片方も手放すことでワザと隙を作り、パティを畏にはめて攻撃する機会を作ったってわけだ。立てる？」

アリエルに手を貸してもらいながら、パティは立ち上がり苦々しく呟く。

「私が動いていなければ、さっきので決着してたわね……」

「おかげで助かったよ」

リオは私がフランにアタックを仕掛ける動作を見逃さずに標的に私に固定した筈だ。しかし相手の動きを見てから飛んでいるチャクラムに反射させ当てるなど神技に等しい。

それに即席のペアにしては計算された作戦だ。光は水に反射するといった現象、お互いの長所を上手く生かしている。

手強い……。

「私達もお互いの長所を生かした作戦ないかしら？」

さてどうしたものか、と相方に相談してみる。

「うーん、どうだろう。風と…、火かあ、なんか反目しそうな組み合わせだね」

どうやらアリエルも最大限の集中力を持って対応しているようだ。所々に息の切れたような言葉が返ってきた。

相談の合間にも水のチャクラムと光線が二人を襲う。再度パティは突入の素振りを見せ、反射してくる光線を辛うじて避けるが、再び同じ状況となる。

どうやらあちらもまだ反射角度や投てきのタイミングなどが合っていないようだ。もし二人の連携が完璧ならば……、そう考えると背筋が冷たくなる。

「アンタちよつと二人の相手を頼むわよ、その間に対抗策を考えるから」

「えっ…？ マジでえ！？」

アリエルは啞然とした表情で聞き返してくる。無理も無い。私は結構無茶を言っている。

でも、

「アンタなら出来るって思うから頼んでるのよ」

「褒めても何もでませんよ。まあ、一応頑張ってはみるけどね。代わりに今度おごりなよ」

返事を聞いたアリエルは猫のような舌なめずりをする。こんな場面でそれが出来るとは全くたいした度胸だ。パティは苦笑しながら思考を奥へ落とす。

どうする？

このままではいつかやられてしまう。その前に何とかする術はないものか……。彼女達の光と水の組み合わせのように、火と風でなにか連携はできないだろうか。

「火…、水、風に光」

独り言、この場にいる人間の属性を並べてみる。

火と水、風と光、火と光、風と水、この組み合わせに何か有利に働くものはないだろうか。最適な何か……。

時間は少しずつだが確かに流れていく、その間にもアリエルの気力と体力は何倍ものスピードで消耗している。早くしなければ…！しかしこの中で相乗効果が生まれそうなのは無いし、相性が良いものも無い。そう思っていると先ほどのアリエルの言葉が不意に頭をよぎる。

そうかつ！

パティは閃くのと同時に、脳内の思考ギアを上げて考えをまとめる。頭の中で素早く工程を組み立てる。

「アリーっ！」

頭の構想計画がたつとアリエルを呼ぶ。

彼女はあの二人の連携を崩そうと間断なく風弾の連射していた。

恐らくアリエルの残弾も体力もそろそろ限界に近くなっているだろう。考え込んでいた僅かな時間とはいえ、彼女の負担はこの数分で

相当なものになっている筈だ。

「アンタ、さつき良い事言ったわ。作戦、決まったわよ」

「よかったあ…。弾も無くなってきたし、このままだとマジで駄目だと思ってたよ。で、どうなのさ？」

天の救いと言わんばかりにアリエルの顔が少しだけ緩む。

「詳しいことは言ってる暇ないでしょ。私がいまずフランに接触できるように援護して。その後、合図するからリオに突っ込むの。で、

『奥の手』使ってガラスを砕きなさい」

「了解っ！」

短く用件を話し終えると、アリエルは満足げな笑みを浮かべ、サムズアップで同意する。

その笑みが信頼の度合いを示しているようで、少し嬉しくもある。よくもまあこれだけの説明で命を預けられるもんだと感心してしまふ。

でもそれは私も同じか

「じゃあ頼んだわよ。最初と最後が肝心なんだから、しっかりね」

そして二人は次の攻撃が来るのを待った。

4 試験終了

「貴女の作戦、上手く嵌ったな」

「……もう少し慣れれば、直撃させられる」

フランは相手を牽制しながら、弾込めの作業をしているリオに話しかける。

この少女は無口で無愛想だが、素晴らしい属性と思考能力を持ち合わせている。自分には投げたチャクラムを水の鏡とし、それに攻撃を反射させて敵に当てるなどという離れ業は、不可能だと断言できさる。

それをなんなく成功させたりオを鼻^{ひこめ}肩^{かた}なしで凄^{すご}いと思った。自分はこの銀髪の美少女がパートナーで運が良かった。逆に目の前の美しい女性剣士と身軽な銃士にとっては気の毒だな。そう思いながら、相方の弾込めの終了を確認する。

「じゃあ、いきましよう」

隣で少女がライフルを構える。準備が出来たようだ。

フランは先ほどと同じように投てきを開始する。一方は銃士へ、もう一方は二人が何処にいても光線を反射して当てられる上空、高い位置へと。それに反応した女剣士は再びフランへの斬りこみを試みてくる。

銃士は片方のチャクラムを撃ち落とし作業にかかりながらもリオを凝視、動向を伺っているように見えた。

何か対応策でもあるのか？

フランの脳裏に不安がよぎったが、己の主観がそれを否定する。このコンビネーションを打開できることなど、まず無理だろう。急増のペアであれば尚更だ。予想出来ない角度からの攻撃は今度こそ確実に女剣士を捕らえるはずだ。

そして銃士がチャクラムを撃ち落そうと狙いを定めた、その瞬間

「左っ！」

銃士がいきなり叫んだ。それを聞くなり、女剣士は左へ一步ステップする。銃士の掛け声とほぼ同時にリオの銃口から発射された光線は女剣士の右足をかすめ地面へと着弾した。

まさかつ！

これで決着と思って気を緩めていた所為か、女剣士への反応が遅れる。女剣士はそのままフランに斬りかかってきたが、銃士が撃ち落したチャクラムが少しだけ早く手元に戻ってきてきたので、それでなんとか凌ぐ。

「惜しかったな」

正直危なかったが、防御姿勢のまま、虚勢を張る。舐められてはいけない。

「まだまだこれからよ」

そう言うと、女剣士はソードに魔力を注入する。魔力が注入されたバスタードソードはあつという間に紅く染まると、水の盾を蒸発させていく。この女剣士の属性はクールな外見とは裏腹に、燃えるような熱い属性だった。

「くっ！」

フランも火傷を回避する為、光線の反射用に使用したチャクラムも加えると、魔力を注入して水と強度を切らさないよう対応した。すると女剣士の炎剣がチャクラムの水を蒸発させ、たちまち闘技場内に濃い水蒸気が発生した。一面が見通しの悪い霧もやに覆われ、隣にいたリオの姿すら見えなくなってしまった。

これはヤバイ。

視界がさえぎられては、長距離武器のリオは圧倒的に不利になる。「ふふふ」

神経がイカれたかのように、女剣士が不気味に笑い出す。

「何が可ましい！」

「だってここまで予想通りにいくなんで、思わなかったんですもの」

彼女の艶やかな笑みが、余計に不安を増長させる。自分達はほぼ確実に相手の思惑に嵌っている。これは不味い！

「リオ！ 早くここから離れるんだっ！相手の狙いは貴女だ！」

「アリー！ 今よ！」

フランは反射的に叫ぶ。

しかし目の前の女剣士も、ほぼ同時にペアに合図を送る。

その声と同時に銃声が聞こえ、全方から猛烈な勢いで誰かが突入してくる。その影は瞬く間にフランの脇を通過していく。

水蒸気のせいで確認は出来なかったが、銃士が突っ込んだと見てまず間違いない。

発砲は魔弾の反動を利用して突入速度を上げるためか！

そうでなければあのスピードの説明がつかない。

「リオっ！」

乾いた銃声の音が場内に響き渡る。

どっちだ！？

音の方向を見やる。

突入した銃士はリオの懐に入り、風弾をライフル目掛けて放ったらしく、ライフルはリオの手を離れはるか後方へ吹っ飛んでしまっていた。

だが、この風の弾によって辺りの水蒸気も同時に吹き飛んで、視界が明るくなる。

まだだ！ まだ諦めない！ この女剣士の剣はチャクラム一つで凌げばいい！

すかさずフランはリエルに向けて右手のチャクラムを放つ。アリエルの銃はリオの方へと向いており対応が出来るはずがない。

フランは直撃を確信した。この距離では私のチャクラムを回避など出来ない、と。

しかし、チャクラムは銃士に当たることはなかった。

再び銃声が聞こえると、チャクラムは儚くも空高く舞い上がっていた。

何が起きた？

銃士は確かに無防備だったはずだ。あの瞬間で何かが出来るとは思えない！

しかし銃士を見てフランは驚き入ってしまった。

なんと銃士の手にはもう一つ銃が握られており、それでチャクラムを跳ね返していたのだ。

「いったいだきいっ！」

銃士はリオに向けた拳銃を殴りつけるようにして、リオのプロテクターに嵌め込まれた赤いガラスを割る。「きゃっ」、という小さな悲鳴と共にリオは地面に叩きつけられた。

それは一瞬の事で、だが空に漂う雲のようにゆっくりと流れた。

「それまで！」

試験官が告げる試験終了の合図。

終わつたのか？

そして私は負けたの？

状況を理解できず、何をしていいのかわからずにただ呆然と立ち尽くす。

しかしそう思つたのも束の間、

『わあああああああ！！！！』

その大音声に驚き何事かと顔を上げると、場内から割れんばかりの喝采と声援が雪崩の如くフランの身を包みこんだ。

木偶の坊みたいに突っ立った私に会場の人々が惜しみない拍手をしてくれている。

私達の試合が素晴らしかったのだろうか。

お祭りの様な歓声が私の思考をポジティブなものへと変えてくれるようだった。ならば下を向いてはられない。試合は負けたが、試験に落ちたわけではない。確かに試合に負けたのは辛い、悔やむのはまだ早い筈だ。それは結果を見てからでも遅くない。

フランはうな垂れるリオを立ち上がらせてから、歓声に応える女剣士と銃士に近寄り声をかける。

「参ったよ。私達の完敗だ」

「いえ、運が良かったのは私達の方だね。あなたと私の属性の相性が作戦に噛み合ったから」

長く淀みのなく流れる金髪を、耳元から撫でるように抑えながらいう女剣士は、やはり美しかった。その上、頭脳明晰とくれば劣等感しか抱けない。

「水蒸気を煙幕のように使用するのは……、目眩ましにもなるし、光の銃弾の威力も抑えることが出来る……。しかしそれだけではないだろう。リオの銃弾をかくぐり、私の懐に入るのは至難の業と思っていたのだが……」

「私にはあの攻撃を回避するのは不可能だね。だからこの子に任せなわけ。アリーはああ見えてかなり眼がいいのよ。私はあの子の指示に従って回避行動をとるだけでよかったの」

女剣士に頭を撫でられた銃士が二へらつとした笑顔を見せる。その笑顔は風のように爽やかで見ている心地の良いものだった。悔しい気持ちがあるにも関わらず、思わずこちらの頬も緩んでしまう。

「でも、ほとんど勘だったよ。ホントに一回きりの指示でした。発射のタイミングと反射するチャクラムの位置を同時に追うなんてもう絶対無理！」

それを聞いたフランの表情は一転、驚愕に染まる。

「貴女はあの状況下でそんな事をやってのけたのか！」

なんとという視野の広さと動体視力。私達二人の拳動と飛来するチャクラム。いくらなんでもこれらを一度に見通せるなど、人の所業ではないだろう。この妖精のように可愛らしく笑う銃士はとんでもない化物だった。

「いや感服した。どうやら私達のような即席コンビに倒せるような方達ではなかったようだ。お互いを信頼した連携と相性を考えた作戦、そして最後は二丁拳銃という隠し武器。全てが上手に噛み合っていた」

「私は元々最初から二丁拳銃でやるつもりだったんだよ。でもさ、

切り札は隠しておきなさいよってパティがね」

やはりか、

「なるほど参謀はやはり貴女か、パトリシア^{バティスタ}」

フランは微笑むと共にパティの顔を窺う。それに対してこちらも微笑で対応する。

「ええ、私が考えたわ。でもアリーがいなければ絶対にあなた達には勝てなかったわ」

「私大活躍！」

子供のように元気よく胸を張る銃士にフランは可笑しく思わず笑ってしまった。まさに童話に出てくるような、おちゃめな妖精^{フェアリー}。

「貴女的能力には驚かされたよ、アリエル^{ペジエグリーニ}」

笑顔で手を差し出し妖精に握手を求める。

「アリーでいいよ。でもフランさんも凄かった。まるで自分の手足みたいにチャクラムを操るんだから」

アリエルは握手に応じ、フランの腰に下げているチャクラムに視線を落とす。

「ああ、チャクラムのことか。あれは私のお家芸みたいなものだ。

貴女の拳銃のように、な。それと私のことも呼び捨てで構わない」

フランがそう言っていると、アリエルは銃の鍛錬を長年やってきたことを見抜かれたことにあまり驚いた様子は見せず、逆に少し残念そうな訝しい視線を投げかけてくる。

どうしたのだろうか？

「パティと馬があいそうだね……」

そう思っていたら、アリエルがボソリとそう呟く。

「そうね、あんたと話すよりも楽しい会話になりそうだね」

美しい金髪美女の発言から視線の理由が分かり、思わず笑ってしまいそうになる。ならば自分も乗っかっておくか。

「同感だ」

すっかりジト目になったアリエルを他所にフランはパティと笑い合う。本当に気持ちのいいコンビだとフランは思った。

そんな空気の中、リオがこちらへ歩いてくるのが見えた。やはり表情は芳しくない。アリエルが彼女に歩み寄り手を差し出す。

「いい闘いだっただね」

しかしリオは表情も変えず、無言のままアリエルの手をすり抜けて通路へと消えていった。

「すまない。悪い方ではないと思うのだが」

フランは代わりに謝罪する。

彼女とは作戦の打ち合わせ以外では殆ど会話がなかった。お互い試験に合格すればそれまでと思っていたし、この二人のように打ち解ける必要性を感じなかったからだ。今思うと、もう少しコミュニケーションをとっていれば、結果は違っていたかもしれないと後悔する。

「いや、気にしないよ。事情は色々あるだろうしさ」

「そうね、これは魔闘士の資格が入手できるかどうかの重要な試験だったから」

「残念ながら私達は貴女方よりも合格する確立が低い。おそらくリオの機嫌が良くないのはそれが原因かもしれない。私とペアになったばかりに彼女には悪いことをした」

「あら、そんなに悲観することないわよ。あなた達の作戦は私から見ても素晴らしかったわ。属性の相性と武器の弱点を補いあっていた。十分に合格できる可能性はあると思うけど」

俯きがちに言う私に、パーティが「それは違う」というように人差し指を左右に振りつつ励ましてくれる。

「そうそう、審査は戦術と武器の扱い方に重点を置くって言ったし、フラン達もきつと合格できるよ!」

アリエルもパーティの言葉に勢いよく頷く。まるで自分に言い聞かせているような言い草だ。少しだけだが気持ちがお楽になる。

「ふふっ。ありがとう、貴女達はとても気持ちのいい人達だな。良ければ友人となって頂きたいくらいだ」

「全然OK!」

「私はそのつもりだったわよ」
私は笑顔で二人と握手を交わす。
もう友達だね　と。

5 発表

受付会場にある休憩所ではパーティとアリエルに加え、フランとリオも同席していた。リオは以前無愛想で無口だが、試合の後フランに促され、渋々同席している。後、数刻もすれば試験の結果が受付会場の掲示板に貼り出される。その間の時間を使って、親交を深めようという事で集まったのだ。

「そっかあ、フランはトラヴァーリ出身なんだ。バーゼルからも近いよね」

「あ、確か鉱石の産地で有名な」

「うむ、ロマリエの影に隠れた小国ではあるが、いい国だ。暇ができたなら、是非遊びに来るといい。歓迎するよ」

後ろで束ねられたピンクの長い髪、整った目鼻と、生真面目そうな口から発する言葉からは高貴なオーラを感じる。生まれはやはりパーティと同じで良い家柄なのだろう。

固い口調だが、全く嫌な感じはしなかった。さっきの試合後の会話でリオの事を気にしていたことから、むしろ彼女が誠実で優しい人であることが良くわかる。

「うん、絶対行くよ」

そんな女騎士からの招待をアリエルは期待の笑みで受ける。そしてそのままリオへ話題をふる。

「リオはどこ出身なの？」

「……スーペル」

アリエルに聞かれたリオは、無表情を崩さずに小さな声で答える。無口ではあるが、嫌々とまではいかないようだ。先ほどから突っ込んだ質問以外は、小さいが答えてはくれている。アリエルとしてはもう少し表情を崩して欲しいのだけれど。でもこれ以上聞くのは

かなり嫌味な奴と思われるかもしれない。

そもそも自分はリオ達に勝ったからこんなに落ち着いていられるが、逆の立場ならどうだろう？ フランのように毅然に振舞えるだろうか、リオのように黙ってこの輪に加わる事が出来ただろうか、それは無理だ。きつと落ち込んで、悔しくて堪らない。それこそ幼子のように喚き散らすかもしれない。そう考えるとフランやリオは私より大人で立派に見える。

「でも、フランの国の情勢はまだ安定してはいないわよね……」

まるでアリエルの心を映すかのように、気まずそうな表情で口を開いたのはパティだった。先ほどの話の続きらしかった。それに反応したフランは、眉を沈めて答える。

「そうだな。私の国は未だ内乱が続いていて、正直とても人を招待できる状況ではないな。だが私が魔闘士になれば、国の内乱を治める事に少しでも協力できるようになる。だから、もしそうなつて内乱が治まったら、貴女達には是非来て欲しい」

拳をつくりながら言う彼女の言葉が、今までと違って少し弱々しく感じられた。その理由はアリエルにも分かっていた。

世界消滅戦争から五年経った今でも戦争は続いている。バーゼル、ロマリエ、イングリド、スーペルといったビッグ4と呼ばれる先進国の治安は安定しているものの、その周りを取り囲む小さな国々では国力が足りないせいで、盗賊等の不当な輩から国民を守れていない国も多い。食料は奪われ、家を失い、民は路頭に迷う。その所為か、国は防衛の為に他国から有能な魔闘士を招いたり、魔闘士資格を持った傭兵を雇うなどして、そういつた事態に対処している。

しかし魔闘士を雇うことで金が流出し、ますます国力が低下してしまい、いずれ国は滅んでいく。ここ二、三年で国ができては直ぐに潰れていくという事が多い。フランの国はそういつた小国家の一つだった。だからフランのような自国の、しかも高貴な家柄から魔闘士ができれば国としては人材の確保ができ、経済的にも大いに助かるのだ。パティは勿論その情勢が分かっている。その証拠に彼女は

肩を落とし伏し目がち、明らかに気落ちしている。

しかしアリエルにとってはそんな事は関係なかった。

友達から家に遊びに来てくれと誘われたのなら、私は笑顔で遊びに行くのみだ。フランの手をとり、笑顔で応える。

「その時は御馳走用意してね。約束だあ」

その台詞にフランは驚きながらも明言する。

「ああ、必ず」

「ったく、底抜けに陽気なんだから」

パティはホトホト呆れるような表情で独りごち、こちらを見やる。貸しだからね、と舌を出して返事をしてやると、パティは「はいはい」とため息混じりに首肯する。

そんな態度をとってはいるが、彼女は心の中で私に感謝しているだろう。でも奴は絶対にそれを口には出さない、なぜなら私が調子に乗るから。

そんなことを考えながら、アリエルがテーブルに置いてある紅茶に手をのばそうとした時、受付事務所から大きな紙を抱えた二人の試験官が出てきた。

会場の視線が一齐に彼等に釘付けになる。試験官は人ごみを掻き分けながら、受付会場の中央にある掲示板へむかい、手にした紙を掲示板へと貼り付ける。既に掲示板の周りには人だかりができていて、近寄ることも困難な状況になっている。

「っ！」

メンバーの中で一番に興味を示したのは、意外にもリオだった。

今までの無表情が崩れ去り、目は大きく見開き、掲示板の前で合格発表の紙を広げる試験官を凝視している。腕を真直ぐ机につき、腰が椅子から少し浮いたようになっており、今にも飛んでいきそうな姿勢だった。

「リオ？」

アリエルの呼びかけに応える気配は無く、リオは椅子から立ち上がると、猛烈な勢いで人だかりに突っ込んでいく。一瞬呆けていた

が、直ぐにリオを追うためにアリエル達も席を立った。

人波を押しどけ、中央掲示板前まで辿り着く。人の多さによる熱気で発生した汗の臭いと息苦しい空気が漂う。途中、リオを探すといつてアリエルは姿を消してしまった。

アリエルがリオ合流して、この人だかりの中、私達と合流できる保証はない。仕方が無いのでフランとパティは掲示板の前に行き、自分の番号を探す事にした。

「とにかく自分の合否を確認しなきゃね」

「私は貴女が合格している場合にしよう。貴女が受かっていなければ、私が受かっているはずはないからな」

横でフランが腕組みしつつ、相槌をうつ。

「あら、プレッシャーをかけるのが上手いわね」

掲示板で番号を追いながら、フランからの世辞にパティは口元を緩ませる。暫く掲示板と見詰め合う。

B 7、B 7、掲示板の右から順に目を配る。すると、掲示板の中央付近にパティの番号がしっかりと記載されていた。

よしっ！

パティは心の中で手を叩いた。飛び上がるほど嬉しいが、隣の友人の結果がまだだ。今は表に出して喜んではいけない。

パティは「あつたわよ」と一言小さく呟くと、フランに番号を探すようにウィンクして促す。フランはそれに頷くと、自分の番号を確認を開始する。パティは腕を組んでその様子を見守る。

左から右、上から下へと忙しく動かしていたフランの眼が途中、ピタリと止まりたちまち表情がぱあつと明るくなる。

「よかつたっ！合格だつたよお！」

フランから飛び出た少女のような声色と底抜けの笑顔向けられ、パティは目を丸くして驚いた。

一瞬時間が止まったような、そんな錯覚を受けた。

彼女からそのような表情を向けられるとは思っていなかったし、その顔はとてつもなく可愛らしかったからだ。整った目鼻や、生真面目なへの字の口は喜色に満ち、完全に崩れてしまっていて、彼女の女性らしさを十分に表現してくれている。

「……そんな顔もできるのね。……驚いたわ。でもまあ、おめでとう」

「い、いや、これは違うんだ！ つい嬉しくて我を忘れてしまったようだ。見苦しいものを見せてしまつてすまない……」

パティから少し遠慮がちな引いた声でそう言われ、フランは顔を真っ赤にして弁解する。

「御馳走様、とても女の子らしくて可愛かったわ。いつもそんな顔していれば、絶対にモテると思うわよ」

「……勘弁、してくれ」

パティにからかわれて、顔も上げること出来なくなったフランは短く許しを請う。これで遠慮なく喜べる、そう思ったがまだ早い。

「アリー達は受かったのかな」

思わず口にしていた。

アリエルはリオを探す為、人ごみの中をかき分けながら、掲示板付近をうろついていた。右も左も前も後ろも人、人、人、ウンザリするほど人をチェックしているが、彼女は一向に見つからない。いい加減諦めて自分の合否だけでも先に確認しようかと、掲示板へ視線をやる。すると前方の人だかりの隙間から、銀色の長い髪が馬の尻尾のように揺れているのが見えた。

みつけたあつ！

また見失っては厄介なので、急ぎ人を押しのけながら、目的の場所を目指す。人ごみを掻き分け、リオの傍に行く。すると、リオは

真剣な眼差しで掲示板を凝視している。

「やっと見つけたよ。どうだった？ 受かったか？」

リオの背中を軽く叩きながら横に立つ。リオはチラリとアリエルを見ると、直ぐに掲示板に目を戻す。

どうやら邪魔をしてはいけならしい。仕方が無いので、アリエルも自分の番号を探すことにして掲示板の番号を追う。前に立っている大柄の男のせいで、下の方の番号が確認し辛い。

「E 15、E 15」

E欄の番号を上から確認していくと、自分の受験番号と同じ番号が記載されていた。もう感情が爆発しそうで狂喜乱舞しそうだ。

「やったあっ！ あった！ あったよ！ 合格だあ〜！」

抑えきれずに近くにいたリオに跳びつく。

しかし、直ぐに我に返る。

そうだった、リオの合否はまだ判明していない。ぎこちない動作で首を動かし、抱きついた彼女を見やる。なんと、彼女はポロポロと大粒の涙を流しているではないか！ 慌てて巻きつけていた腕を離す。

勢いに任せて飛びついてしまったけれど、リオはもしかすると試験に落ちているのかもしれない。だとしたら私はとんでもなくデリカシーのない馬鹿女かもしれない。違う、合否問わずこんな事をやらかすのは馬鹿のやる事だ。しかしやってしまったものは仕方ない、彼女の泣き顔の理由は、試験の結果によるものに間違いないので、思い切って聞くしかない。

「ゴメンっ！ あの……、リオの気持ちも考えずに抱きついちゃって……。その、駄目だったの？」

自分に出来るありったけの謝罪の気持ちと、勇気を出して尋ねてみる。リオは涙を拭いながら、首を振る。そして少し口の端を上げて答えてくれた。

「違う。合格、してた」

その返事を聞き、再びリオを抱き締める。きつと神様が私の心境

を見ていたのなら「こらこら、先ほどまであんなにデリカシーがないことに懊惱あうのうしていたのではないですか？」と注意するような変貌振りだろう。しかし、そんな神様からの忠告も通じない。私の気持ちは山の天気よりはるかにうつろいやすいのだ。私はその忠告を蹴り飛ばして心の内で反論する。

『今なら大丈夫、デリカシーなんて知るもんか』と。

「よかったあ〜！一緒に合格だ！」

全身で喜びを爆発させる。

それに対して、リオから「苦しい」と小さく返事が返ってきたのだが、アリエルは全く気にしなかった。

6 帰宅

リオは極度の緊張と人と話すのが極端に苦手な性格のせいか、今までアリエル達の会話に上手に入っていけなかったらしい。今、その試験という呪縛から逃れ、かつ合格という嬉しい報告を貰い、安心して涙が出たとの事だ。まだ少し緊張していたのか、オドオドしながらも、そういつた経緯をリオはアリエルに説明してくれた。

その後、休憩所に戻ったアリエル達はテーブルに向かい合せて座り、お茶を啜っている。

「ゴメンね、リオ。つい嬉しくて……」

アリエルが顔の前で両手を合わせお得意のポーズをとると、リオは睨むような視線を送ってくる。

「……もう、いい。気にしてない」

視線はともかく、言葉のうえでは許しをもらえたことで気持ちは楽になった。それならば、とアリエルは話を切り出す。

「でも意外、リオって無口で無表情だったから、てっきり喜怒哀楽ってあんまり表に出ないと思ってた」

またデリカシー無しの問いかけしまったらどうか。脳内の神様がひよっこりと小さく顔を出す。

「違う。さっきも言ったけど、人と話すのが苦手なだけ。嬉しい時は笑うし悲しい時は泣く」

そんなアリエルの無礼な質問にリオは小さく首を振って答える。そう答えるが、今のリオも十分無愛想で無口のイメージが払拭出来ない。遠慮がちで、時々途切れがちになる言い回し。よく観察してみると、人とのコミュニケーションを苦手としていたのが、会話と態度から容易に想像できた。きつと誤解されやすい女の子なんだ。「わたしの家、裕福じゃないから。試験のお金だってやっと工面して、それで合格できなかったら、弟に顔向けできなかったから」

その言葉を聞いて、アリエルは理解する。

魔闘士という職業の給金はどこで働いていても、大抵高額になる。雇う側からの待遇次第では一攫千金の可能性も秘めた夢の職業でもあるのだ。だから貧困層の人々は質素な生活を送りながらも、試験代を僅かながらに地道に貯め、一度きりの挑戦をするという者もけっして少なくない。リオはもちろん、アリエルだって裕福な生活とはかけ離れた層の人種だ。そう何度も試験を受けられる身分ではないのだ。リオにとっては正に人生を賭けた挑戦だったわけだ。極度の緊張と敗戦のショックで近寄りがたい空気を出してしまったのは当然といえる。

「そっか、ホント良かったね。これからは弟さんに少しは楽をさせてあげられるね」

アリエルも同じような境遇なので、思ったことがつい口から漏れてしまった。先ほどのデリカシーの神様が頬を膨らませて抗議の準備にとりかかるだろう。しかしリオは小さく微笑みながら頷き「うん」と一言返してくれた。

アリエルは「これで私達友達だね」と心の中で独りごちた。ついでに無礼を再度忠告してきた神様も蹴っ飛ばしておく。

パティは仲良さそうに微笑み合っていた二人を、珍獣を見る様な目つきで凝視していた。

「どうしたのさ？」

アリエルが何事も無かったかのような口調で言うので、啞然としたままで聞き返す。

「あんた達こそどうしたっていうの？ そんなに仲良しだったっけ？」

想像できなかった光景を目の当たりにして、体が固まってしまっ

た。あれだけ皆と距離を置いていた銀髪の少女が素敵な表情で笑っている。

なにをやったらこうなるの？

「あゝ、面倒くさいから話すの省略。これがいつものリオだよ。少し人と話すのが苦手だけど弟思いの可愛い女の子っ！」

アリエルは両手を派手にリオのほうに突き出して彼女の紹介をする。

こいつの紹介の仕方は、まるで店頭でやる特売の叩き売りのように見えてしまう。

そんな阿呆なことを思っていると、アリエルから大袈裟に紹介されたリオが椅子から立ち上がりパーティに向かって深々と頭を垂れる。「ゴメンなさい」

出た言葉は謝罪の台詞。それは試験でパーティを傷つけてしまった事に対してだとすぐに分かった。

「試験ですもの、かすり傷だし気にすることはないわ」
笑顔でリオの謝罪をつける。

それに、今日はとても良いものが二つも観賞できた。

「まさか一日でこつも面白い顔が見られるとはね」

「えっ？ どゆこと？」

疑問顔のアリエルがなにかあったのか聞こうとすると、その一言は過剰に反応したフランによって遮られてしまった。

「ぎやあゝつと奇声を張り上げて「それは言わないでくれ」と顔真っ赤に詰め寄ってくる。あれは彼女自身、余程はずかしかったのだろう。残されたアリエル達はフランがおかしくなった理由が掴めずに、ただ首を傾げる。

「とにかく試験には合格できたし、良き友にも巡り合えた。今日は素晴らしい日だった」

パーティの話に興味をもたれるのを避ける為かフランが締めを言葉と言う。

少し寂しい気はするが、窓越しで外を見ると日は傾いていて辺り

の煙突からは夕飯の支度からかモクモクと煙が立っている。そろそろ御開きの時間である。

「じゃあ、帰りましようか。アリー、今日いいわよね？」

今日はソーザに魔闘士試験合格の報告をする為、パーティはアリエルの家に立ち寄る予定になっていた。

「うん、そうだね。泊まってくの？」

「勿論よ」

そう切り出すと、アリエルはカップを持ち上げ、飲みかけのお茶を一気に飲み干してから答える。それはいつも一緒にいる幼馴染の二人にとっては毎度のやりとりだった。

「あなた達は今日どうするの？ 宿はとってあるのかしら？」

そういえば、遠方から訪れた二人はどうするつもりなのだろうかと思ひ、とりあえず訊ねてみる。

「私はこれから宿を探そうかと思っているが……」

「……雨露がしのげればいいから」

それを聞いたパーティとアリエルは「はあっ？」とハモリながら、疑惑の視線を容赦なく浴びせかける。

こいつらはなんて呑気な事を言っているのかしら。

当の二人はなぜそのような視線を受けなければいけないのか、全く分かっていない。リオにいたってはアリエルを軽く睨み返している。

「あなた、状況分かってるの？ 今は世界各国からこの試験のために大勢の人達が集まってきているのよ。そんな中で飛び込みの宿なんかとれるわけじゃないじゃない」

「女の子なのに野宿でもするつもりなの？ 危ないってば！」

アリエルの発言から、彼女も状況は分かっているようだ。まあ何年もこの街に住んでいれば当然のことだ。

毎年この時期は魔闘士試験に伴って、多くの人々が訪れる。だから、着いてすぐにやらなければいけないのは、まず宿の手配である。夕刻になろうかというこの時間帯では、最早どこの宿にも空きはな

いだろつ。

二人にまくし立てられたフランとリオは肩をすくめ、驚きと不安が入り混じったような奇妙な表情をしている。

しかしそれくらい表情をさせるくらい勢いがパティ達にはあった。今言い訳をしようものなら、倍の説教を喰らわさなければいけなくなりそうなほどに。フランは苦笑しながら両手で牽制、リオは目を丸くしてただ驚くばかり。

「ったく、今日は二人ともアリーの家に泊まればいいわ」

パティはそんな無計画な彼女達に、やれやれといった感じで提案する。話を振られたアリエルは二パつとした猫のような人懐こい笑い顔をむける。どんとこい、と言わんばかりである。

「私としては助かるのだが。いいのだろうか？」

「勿論！ リオもいいでしょ？」

すまなさそうに聞いてくるフランに対し、アリエルは誇らしげに胸を張り答える。リオも小さく頷く。これで問題は解決した。

アリエルの家はバーゼルの南端にある。独立都市国家バーゼルの中心部には国政所と大きな教会があり、休日には信仰厚い人々が朝早くから祈りを捧げる為に集まってくる。

そこを囲むように商業区があり、信仰深い人々のお腹を日々満たす為、市場通りを中心にここもまた朝早くから活気に満ちたやりとりが繰り広げられている。闘技場は都市の北側にある為、家に帰るには中心部と市場通りを通る必要がある。

「うう……」

市場通りに入った途端、アリエルがお腹を押さえ餓え始める。

「アリエル……？」

その拳動を不思議に思ったフランが声を掛ける。

「いいのよどうせ、この子がこうなるのはいつものことだから」

「いつもじゃないよ！ 今日はず……、たくさん動いたからいつもより早くお腹が空いてきたのだよ。それに加えてこの旨そうな匂いとお祭りのように賑わった雰囲気、この状況じゃあ買い食いをした

くなるというのが人の本能というものじゃない！」

食欲旺盛な少女にとって、この家路を無傷で帰るのにはかなりの気合が必要な御様子だ。時間帯もあって、商業区のいたるところで食べ物の美味しそうな香りが彼女の言うとおり、鼻をくすぐってくる。

「確かにアリエルの言うことはわかるな。ここまで活気のあるといろいろと目移りしそうになる」

「でしょー？」

フランもパーティの後ろを歩きながらも店頭には飾られている商品を横目で見やる。

そんな事を言うと、アリーは調子に乗って無駄遣いするわよ。とパーティは心の内で独りごちる。

「しかし、それ以上に私はアリエルの家が楽しみだな。友達の家に泊まりなんて、初めてだ」

少女のような笑顔でフランは言う。その表情を見たアリエルは目を丸めていた。

やっぱりそうなるわよね。あの仕草を計算ではなく天然でやるのだから、あの女は恐ろしい……。

「……なにあれ？」

アリエルが顔を寄せ、小さな声で聞いてくる。

「凄く可愛いでしょ？」

「可愛いなんてもんじゃないよ、あれは反則。女として反則」

「私だって最初は驚いたわよ」

しかも今回は前のように指摘をしていない所為か、フランは屈託無い可憐な笑みをしたままだ。耐性がある私はともかく、初めて見たアリエルはかなり動揺したようだ。

「んっ？ 二人ともどうかしたのか？」

フランが首を傾げてくる。

「いやっ！なんでもないよ」

「アリーが買い食いしないように注意してただけよ」

「そう、そうそう！」

そういうと二人は足早にアリエルの家を目指す。拍子にもう一人、銀髪の少女の存在を思い出す。

すっかり着いてきているか確認する為、彼女を見やる。すると、リオの大きな銀の瞳はキラキラと輝いているではないか。

こちらは宝物でも見つけたかのような視線を桃色の髪をした騎士に向けている。

「いいもの見れたでしょ？」

「うん、ご馳走様……」

リオも可愛いものが大好きらしい。帰路の間もリオはちらりちらりとフランを鑑賞していた。

家は南端の外れにある為、町の中心部のように隣に家がギッシリ連なっている訳ではなく、なにもない小さな丘の上に、これまた小さな小屋のような建物が二つ、ポツリと建っていた。

「あそこが私ん家！ ちょっと狭いかもしれないけど、居心地は抜群だから」

アリエルは小屋を指差しながら、丘を駆け上がる。ソーザが炊事の準備をしているのだらう、窓から煙が立っていて香しい匂いが漂ってくる。パーティもお腹はぺこぺこだ、早くご飯にありつきたくてアリエルの後を駆け足気味で追う。

7 夕食

家に入ると花柄のエプロン姿の優しい瞳の男が、愛想の良い笑顔で出迎えてくれた。

「やあ、いらっしやい」

「すみません、ソーザさん」

出迎えた男にパティは軽く御辞儀して照れ臭そうに笑う。それが少女のように柔らかな笑みだったのに、フランは驚いた。そして彼女がソーザとも古くからの馴染みだという事が、パティがソーザの手伝いを、さも当然のように始めたところから窺えた。

フランは家の中を拝見する。

五人程度がなんとか食事できるくらいの丸いテーブル、必要最低限の調味料が置かれた地味なキッチン、後は小さな食器棚と衣料タンスがある、飾りつ気のない質素な家だった。

そんな感想を心中で思っていると、

「私も何か手伝えることない、ですか？」

意外にも隣から遠慮がちな声で、リオが口を開いた。

その申し出にソーザはにこやかな笑みで応対する。

「じゃあ、頼もつかな。今からアリーが向こうの納屋で、折りたたみ式のベッドを取りにいくはずだから、お嬢さんはそれを手伝って貰えないかな？」

「リオが手伝ってくれるなら、私も助かるよ」

兄妹からの依頼にリオは「うん」と一言発すると、アリエルと一緒に納屋へ向かう。

一人取り残されたフランは頬を指で掻きながら、申し訳なさそうに「私にも何か手伝えることは？」と聞いたが、ソーザからは「いいからそこに座ってゆっくり休んでいいよ」と言われ、もう何も

言えずに一人気まずい雰囲気を出しながら、椅子に座って夕飯が出来るのを待つ羽目になった。

夕飯はトマトときのこのパスタと、付け合せにサラダが用意されていた。小さなテーブルを皆で囲み、和やかに食事が始まる。

アリエルは口をモゴモゴさせ、今日あった出来事を身振り手振りを織り交ぜながら、ソーザに話していた。時折リオにも同意を求め、強引に会話に引っ張り込んで話す光景は、酒場で他の客に絡んでいる酔っ払いを見ているのと同じように見えるのは、気のせいではないだろう。

リオが時々ウンザリするような目をしているのは確認できたし、ソーザもアリエルに合わせて笑ってはいるが、聞き流すような素振りが伺える。

「で、その円盤使いの騎士さんがフラン、銀髪のちっちゃ可愛い子がリオだよ」

フランは話の流れでいきなり自己紹介を始めたアリエルに戸惑いながらも、フォークを置き、軽く会釈する。

「フラン・バレッジです。今日は泊めていただくうえに、このような美味しい食事まで用意して頂いて本当に感謝します」

フランは上品に口を拭ってきりだす。自分だけが何にもしていない所為か、ここできちんと礼をしておかなければ気がすまない。リオもぺこりと頭を下げ感謝を示す。

「そうでしょ、そうでしょ。美味しいでしょ。味付けはなんと私がしたんだよ。兄様は味音痴だから、料理の仕上げは絶対に私が担当するんだ」

アリエルがエヘンと鼻を鳴らす。実際にパスタはアリエルが胸を張れるに十分な美味さだった。

「そんな、困った時はお互い様じゃないか。なあ」

自己紹介を聞いたソーザは、食べる手を止めて、頭を振る。

「そうそう、パティなんて金持ちでなんにも困ってないのに、何度うちに泊まってタダ飯食べたことか……」

「あんだねえ……、そっちだって料理の仕上げだけじゃない。ほとんどはソーザさんが料理して、あんたは最後の味見担当大臣じゃないの」

「味見担当大臣上等。じゃあ兄様の地獄の調味配分無視の料理を召し上がりたいの？」

「うぐう……それはちよつと……」

意外にもパティがアリエルに言いくるめられている。こういう逆転パターンもありえるのか。

「それにしても散々な言われようだな、俺は」

「えっ！……そんな事はないですよ」

「そうそう、少し斬新な味というか、その、ね」

肩をすくめ、冗談交じりに自嘲するソーザを、アリエルとパティは慌ててフォローする。

そんなやりとりを見てクスッと笑ったのはリオだった。

小柄で銀髪、銀眼の少女は笑うととても可愛らしいのだが、すぐに表情を戻すので見られるのは一瞬だけだった。花火のようにキレイでパツと消える、そんな微笑だった。

アリエルが屈託無い笑顔で「可笑しかった？」と聞くと、リオはまた少し口元を崩して答えた。

「こつという食事。……いいな、と思う」

皆でわいわいと会話を楽しんで、食後のお茶を嗜む。リオの言うとおり、素晴らしい一時である。リオは口の周りにパスタソースを付けながらも、それを気にせず皆の話に耳を傾け笑っている。その様子からも、彼女が食事と会話を十二分に満喫しているのが見てとれる。

一時間ほど話しただろうか、すっかり日も落ちて小さな窓越しに見える外は真っ暗になっていた。

「そろそろお開きにしましょうか」

私の視線に気付いたのか、パティがそう告げる。確かに食事による満腹感も落ち着いてきたし、頃合はちょうどいい。リオも小さく

欠伸をしているし、そろそろ寝る準備をしたほうが良さそうだ。

するとソーザが立ち上がり、タオルをタンスから出して、アリエルに放り投げる。

「食事の前に沸騰させたお湯が納屋に用意してあるから、皆で湯浴みしておきな。今日は汗かいただろ、ちゃんと汚れ落としとけよな。まあ予想以上のおしゃべりで、お湯はぬるくなっているかもしれないが、そこは我慢してくれよ」

準備のいい兄である。いつも気が利いているのだろうなと思った。夕刻フランは暇を持て余していた為、暇つぶしにソーザの料理の手際を見ていたが、これも家政婦顔負けの腕前だった。そんなソーザからタオルを受け取り、フラン達は納屋へと移動を開始した。

外は風が心地よく、向かいの小屋までのわずかな距離ではあるが食後で温まった体がいい具合に冷やされる。

先頭を歩くアリエルは後ろ向きに歩きながら、リオと談笑している。リオの表情も彼女の笑顔に釣られているかのように柔らかい。アリエルの少し後ろを歩くパティは「転んでも知らないわよ」と嘆息気味に注意を促していた。

その忠告に「大丈夫、だいじょ」と言葉を紡げずに丘に転がるアリエルを見てフランは腹を抱える。

本当に良い一時である。

アリエル達を見送った後、ソーザは自分の部屋に飾ってある二丁の拳銃を手取る。そのまま窓際まで歩く。どことなく懐かしげな気持ちになり、その想いを月夜に投げかける。

とつとつ取ってしまったのか……

「血は争えないな、ミシエル。それにバレッジ家のお嬢さんか、なにか運命めいたものを感じるよな」

拳銃を机に置いて、それを愛でる様に優しく撫でる。その手の上

にポタリと小さな雫が落ちた。
夜が小屋を静かに包んでいた。

8 枕投げ対決？

湯浴みを終えたアリエル達は、アリエルの部屋に集まって、ある「おしゃべり」に没頭していた。事の発端は、フランが湯浴みの際に鎧を外した瞬間に起こった。

「なにそれ〜！ パティなみい！」

納屋中にアリエルの色のある声が響き渡る。

アリエルが人差し指で指した先は、フランの豊かな胸だった。今まで鎧の下に隠れていて分からなかったが、鎧を外した私はアリエルから見て魅力的に映ったらしい。確かに人よりも少し主張の激しい胸であることは自覚していたが、それほど驚かれるとは思っていなかった。アリエルとリオは眼をぱちくりさせて、私を凝視していた。

その所為か、湯浴みを終わってもアリエルからの視線が痛い。

「べ、別にいいじゃないか。そ、そんなに見るんじゃない！」

注目されるのが嫌になつて自分の胸を両腕で隠すようにして視線から逃れようとする。今は上下共にミルク色の寝巻きを着ているので、誤魔化しが全く効かない。

「いいなあ。私は未だにぺったんこ。パティやフランみたいになるのは、もう無理かなあ」

「あんただって標準くらいはあるわよ。だから悲観しないの」

「だってあんなに凜々しくてかつこよかったフランが、鎧を脱いだらこんなにも女らしいなんて反則じゃん！ さらにあの天然スマイル発生装置も搭載されてるんだよ？ こりゃあ、もう立派な詐欺の一つだね。リオは普通に可愛いし、なんか女としての私は最下級に置かれてる感じがするよ……」

口を尖がらせ、枕を憎憎しいようにぎゅっと掴み、ギリギリと締

め付ける様から本当に悔しいのだろう。そのうち齒軋りも追加され
そうなほどの勢いだ。

「大丈夫よ、胸なんか無くても、ソーザさんは気にしないから」

「え？ だってソーザさんはアリーの兄上ではないのか？」

からかうような軽口を言うパーティに、思わず乗っかってしまった。

「だってアリーとソーザさん、血は繋がってないのよ。だからぜん
ぜん」

言葉はそこで途切れた。言葉はパーティの顔面にめり込んだ枕によ
つてかき消されたからだ。

「兄様は尊敬してるだけだよ。パーティの方こそ、いつつも、デレデ
レしてるじゃん」

フランもそれには同意する。この家に入った瞬間に確認した。

「……相変わらずいい度胸じゃない」

冷たく、そしてドスの効いた低い声が返ってくる。アリエルはか
かってきなさいとばかりに鼻息荒く、枕を持って戦闘態勢を整えて
いる。

フランはその狐と狸の睨みあいを「あははあ」と苦笑いで傍観し
ながら、片手を左右に振って不参加を表明する。

部屋の中には枕が三つ。手数を増やす為にアリエルは腕を伸ばし
て、残り一つの確保を試みたようだが、それを容易く許すパーティで
はない。アリエルの視界から自分が外れるのを確認するや、すかさ
ず枕を投げつける。

それは鋭く、まるで弓矢の如くアリエルを襲う。しかし勝手知っ
たる親友である。当然それを予想していたらしく、半身でベッドに
倒れこむように避ける。そしてアリエルの代わりに、枕は胸に手を
当てて眉を八の字にさせていたりオの眉間に見事に命中した。枕が
落ちた時、リオの眉は逆八の字になっていた。

「これで二対一だよっ、観念しなよ」

「相手は弾切れ、狙い撃ち」

分の悪いパーティはベッドの足元側にいたフランの方へと、ジリジ

りと後退を始める。そしてフランの背後に回りこもうとする。

「ちよつと待て！ 私は関係ないだろうが」

「これは巨乳と貧乳の戦いよ。恵まれた者は恵まれなかった者から常に妬みの標的になるものよ。そう考えると、あんたは必然的にこっち側、いいから私の盾になりなさいよ」

理不尽極まりない言葉を言い放ち、パティはフランの背後に隠れる。それを追い詰めるようにリオとアリエルが悪魔のような笑みでジリジリと迫ってくる。

なんでこうなるのだ？

完全にとばっちりだ、私に罪はないだろう？

パティは私より図体も態度もでかくせに、こんな時は私を盾にして、子悪魔共の相手をさせるのか。今は鎧も纏ってないし、チャクラムも荷袋の中だ。何を持ってこいつ等の攻撃を防げというのだ。

「ま、待て、降伏する。それに私は丸腰だぞ？ 無抵抗の人間を貴女達は攻撃できるのか？」

道理を説く。

「無抵抗？ 丸腰？ 私にはそんな風には見えないがね。なあ、リオ君」

メガネをつけていないくせに、メガネをクイッと上げる仕草をして、アリエルがリオに同意を求めると、傍らでリオが「凶器発見……」などとフランの胸を指して申告する。

それは悪役を気取ったマッドサイエンティストな博士と助手のようだった。

「そうだなあ、それは危ないなあ。こちらがやられる前にお仕置きする必要があるそうだね」

「あんた、はやくどうにかしなさいよ。頼りないわね」

道理は通用しなかった……。そして私を勝手に相棒にした後ろの女にも、恐らく通じないのだろう。どうしよう……。もう考えたって時間もないし、元々どうしようもないので、私は諦める。

五指をわしわしとうねらせて接近してくる敵に対して、顔真っ青

に諦念を抱いていると、

コンツ、コンコン

不意にドアをノックする音が部屋に響く。皆一斉に硬直してしま
った。

「おい、俺は納屋で寝るからな。だから俺の部屋のベッドは好き
に使っても構わないよ。それと戸締りと火の処理はきちんとして、
早く寝るんだぞ」

ソーザの言い方は騒ぐのはほどほどにしるよ、そんな忠告にも思
われ、アリエル達は我に返りいそいそと寝支度を整え始めた。

助かったあ……。

フランは安堵の息をつく。

9 懐古の夜1

夜は更ける。

胸のざわめきが納まらない。まさか、このような場所であんな物を見てしまうなんて。私はそれを手にとってみようと思いたが、畏敬心が邪魔をしてそれを許さない。

でも、幼い頃の私はこの銃に対して、羨望に近いものを抱いていた。布団に潜り、今すぐにでも持ち主に確認をとりに行きたいという衝動を押し止めながら、眠りにつく努力をする。しかし、うつすらとした暗闇のなかで輝く三日月と太陽のシルエットが頭の中から離れてくれない。とりあえず明日になったら速攻で本人に訊ねてみたい。

緊張からくる動悸で、喉がカラカラになりそうだ。自分はなぜこの部屋で寝ることを希望したのだろう。確か、あのやかましい友人達の相手をしていては体がもたないと判断したのだ。これではあちらを 選択していた方がマシだったということ……でもない。

会えて嬉しかった。

そう思うと、胸の高鳴りは一向におさまる気配がない。少し水でも飲んで落ち着く必要があるそうだ。

私は布団をめくり上体を起こす。薄暗い部屋の中にある簡素な机や、くたびれた感の漂う本棚にある難しそうな専門書の背表紙も、暗闇の中に数十分もいると、いいかげん目が慣れて見えてくる。清潔感の漂う小さな部屋。視界がハッキリしてきたといっても、やはり暗いので足元を気にしながら、戸を開ける。居間へ入ると、キッチンに置いてあった木のコップを手に取り、水瓶から水をすくい一気に飲み干す。乾いた喉は気持ちよく水分を吸収していく。

……ああ、うまい。

口元を手の甲で拭いコップをキッチンに置いた時、不意に外で何

かうごめいている気配を感じた。

一度抜けた緊張感をスツと引き上げ、足音を消し慎重にキッチン近く窓の側に歩み寄る。外の何者かに気付かれぬようにそつと顔を上げ、闇に慣れた目で外の確認をする。

そこには黒髪の男が二本の木剣を巧みに操っていた。それは思わす見とれるような剣舞だった。華麗にして力強く、型を創る手足はしなやかに、なびく黒髪は荒々しく、しかし体の中心は崩れず、常に安定している。その剣舞は、私の脳内の疑問を確信へと変えるのに十分過ぎるものだった。

彼は私の視線に気付いたのだろうか。円舞の様な見事な型の鍛錬に区切りをつけた際に、こちらをちらりと見た。そして、そつと右手を上げ、手招き。

気付いている、間違いなく。

キッチンを通過し、入り口の付近にかけられていた黒い外套を借りる。春になり温かくなってきたとはいえ、外はまだ寒い。それに自分が今見につけているのはほぼ下着に近い薄生地 of 寝巻きである。とてもじゃないが、そんな姿を晒すなんて恥ずかしくてできない。

外套を羽織ながら、ドアの施錠を開けて表へと出る。

外は思っていたよりも寒く感じた。アリエルの家の立地が丘の上にあるからだろうか、それとも夜が更け、気温がより下がった為か。遠くに見える麦畑の穂の揺れる音が聞こえてくる。風に飛ばされないうよう、外套の前をキュツと締める。

「眠れないのかい？」

「ええ、少し気になる事がありました」

なびく髪を手でおさえながら、私は答える。

気になる事、それを聞くのは気になるくせに気が引けた。なぜならば、それを聞いてしまう事は彼の人生を左右しかねないほどに重大な気がしたから。しかしそれでも聞きたかった。そうまでして知りたいことだった。

「貴方も魔闘士でしたか、ソーザさん」

「まあね、でも今は薪や炭を街に卸す、ただの木こりさんですよ」
おどけた口調で肩を少し上げる。

「まあ魔法は使えないから魔闘士とはとても呼べないがね」

木剣を腰のベルトに挿す。その動作が美しく流れるようで、思わず目で追ってしまおう。

「貴方は魔法が使えないのではなくて、使わないのではないですか？」

もう分かってしまった。

やっぱり彼はあの畏怖の魔闘士。

この世でただ一人の闇の死神。

そして彼女は私の憧れ。

「あんなに幼かったのに、君は覚えていたのか。俺が何者かって事を。よくわかったね。今は昔と違って顔も老けたし、名前も違うのに」

「偶然です。偶然泊めて頂いた部屋に、小さい頃見覚えがあった銃がありました。それに私はバレッツジ家の人間ですよ？ 貴方も私の名前を聞いたときに気付いたはずではないのですか」

ソーザは恥ずかしそうに頭を掻く。

「なにが恥ずかしいのだろうか。私に正体がばれたことが？ それとも他に理由があるのだろうか。」

「うん、だから俺も寝られなくて、な。久しぶりに俺の過去を知っている人に会ったから。それにしても美人になったな、見違えたよ」
お世辞でも嬉しかった。「私も見違えました」そう言いたかったが、失言ではないかと思いとどまる。

ソーザはその場で腰を下ろして、空を見上げる。そして自分の隣をパンパンと叩き、誘いかけてきた。フランはそれに応じ、ソーザの隣に座る。

「あれから元気だったみたいだな」

「ええ、おかげさまで」

「そうか、それはよかった」

「ミシエルさんはお元気ですか？」

私のその問いに彼は直ぐには答えてくれなかった。以前、顔は天を仰いだままだった。まずいことを聞いてしまったのだろうかと頭を抱えようとした時だった。彼の唇がかすかに動く。

「死んだよ」

本当に抱えたくなくなった。私はなんて馬鹿な質問をしたのだろうか。

そしてなんでそれを考えなかったのだろうか。彼の部屋に彼女の銃があったことに気付いた時、すでに彼女がいない可能性に気付いていただろうが。

そして彼女との思い出が、私の脳内を駆け巡る。

彼女は憧れだった。私を癒してくれた、あの優しい手。心が安らぐような柔らかい微笑み。女神かと思間違うほどに自愛に満ちていた彼女を思い出す。そしてそれを失ったと理解して、悲しみが津波のように激しく私の心を襲ってくる。

「すみませんでした……」

腹の奥から搾り出すように吐く。

涙が止まらない。

彼女を失い、名前を変え、世捨て人のようにひっそりと暮らしてきたわけを知ってしまったから。彼がなんで生きていられるか不思議なほどに……。

ソーザは嗚咽を漏らし泣く、フランの背中を擦る。

「そんなに気に病むことはないさ。確かに哀しい出来事はあったけど、俺は不幸じゃなかったよ。ミシエルは逝ってしまったし、その後だって俺を狙う輩もたくさんいた。でもなんとかあったから」

『なんとかあった』、その一言にどれだけの苦勞が凝縮されているのだろうか。彼の属性も希少中の極みだ。目立つそれを隠蔽し続けるには、一体どのような千思万考を繰り返したのだろうか。

もう彼をこれ以上苦しませてはいけない。

「私は誰にもこの事は漏らしません。でも、せめてミシエルさんに一言『ありがとう』と伝えたかったです……。私はあなた方に救わ

れたのですから……」

涙と鼻水でみっともない顔になりながら、断言する。パーティ達には決して見られたくない泣きっ面、恐らく人前でこんな風になったことは身内以外ではきつとない。

ソーザは哀しそうに頬を緩ませる。

「ありがとう。久しぶりで少し感傷的になったみたいだ。どうせ眠れないのなら、少し話を聞いていってくれないか？」

彼のその言葉は頷くに十分だった。私はこの人の哀しみを、少しだけだがわかるような気がしていた。でも本当に解っていない事も分かっていた。

二人の絆は本当に美しく、

そして、

儂かった

ミシエルといた頃の彼は猛々しく、そして勇ましい印象が残っている。そんな勇み足気味の彼を、ミシエルは隣でいつも優しくなだめていた。そんな二人がとても眩しくて、羨ましかった記憶がある。しかし、世界のあちこちで戦争が起こり始めた。その戦争から身を守る為、地位や金のある者達は傭兵を掻き集めた。当然、自分の身を守ってくれる用心棒は、優秀で信頼のおける者が相応しい。そういった傭兵連中の『優秀』という分野では、魔闘士の存在は際立っていた。彼らはお金さえ払えば、大抵どんな事でもやってのける。護衛は勿論のこと、警備や偵察も無難にこなす、中には暗殺や誘拐などの物騒なジャンルまでこなす輩もいたほどだ。

故に彼らはどんなに優秀でも雇い主には信頼はされない。それが前戦争時代での『魔闘士』というものに対する世間の認識だった。

そんな中、彼らは父が護衛の為に雇った傭兵として、私の目の前に現れた。

戦争は酷かった。争いの起こった地域は土地が枯れ果て、作物は育たなくなり、各国は軍備拡張に躍起になり、度重なる過度の徴税を行ったため、地方の町や村では略奪や強盗などは日常茶飯事だった。

明日をも知れない状況下で、私は誘拐や強盗の可能性に怯え、身体を震わせた。いつそんな家に生まれてこなければ良かったと思っただら思った。

理由はある。私が七歳の頃、母が拉致され殺された。

金目的での犯行だったらしい。母とは子供の私が直視できないような無残な姿で再会した。綺麗だった桃色の髪は乱れ、着衣は無く、体のいたる箇所殴打された後があった。

そんな母を見た私は動揺し、泣き喚いた。……怖かった。

母をこんなにした奴等を憎いと思うよりも、怖いという気持ちで圧倒的に強く私の心を支配した。「こんな風になりたくない」、幼いながらもそう思った私は、母を殺した犯罪者よりも冷徹だったのかも知れない。

しかし、ミシエルは包み込むような穏やかな表情で、幼い私の手を優しく、大切に握ってくれた。栗色の長く綺麗な髪がとても印象的だった。そしてあの手がどんなに心強かっただろうか。

すうっと薄黒い感情が晴れていく、彼女は魔法でも使ったのだろうか。ただ手を握ってくれるだけで、こんなにも安心できるなんて思いもしなかった。その後ろでは唇を尖らせて、無愛想な顔をした彼がいたのもよく覚えている。今思うとヤキモチでも妬いていたのだろうか。

そして悪夢のような日がやってきた。戦争の飛び火による、略奪者の到来。

争いごとにおいて敗者は全てを失い、勝者に奪われる。金銭、名誉、地位、そして人として生きる権利まで。

当たり前で吐き気のしそうな略奪行為を一心不乱に働く敵を目前に、薄情な傭兵達が逃げ出す中、彼らは私達家族を守る為に身体を張って護衛の任を果たしきった。

結果、彼らは一中隊程の魔闘士隊をたった二人だけで退けたのだ。様々な属性を持った攻撃を彼らは受け止め、その全てを弾き返した。狂おしいほどの怒声を吐き捨て、血を流し、憔悴しきった眼を力の限り開き、感情をさらけ出しながら、彼は嵐の中に突貫した。彼の背後では小気味よいダンスを踊っているような、艶やかな振り付けで二丁の銃を振るっている彼女がいた。

二人はまるで死神と天使だった。少なくとも幼かった私はそう納得した。漆黒の外套をなびかせる気高き死神と、純白のサマードレスを血に汚した美しい天使は、敵を殲滅するまで虐殺のダンスを踊り続けた。

そして死神が糸の切れた人形のように倒れる。そんな彼を天使が

抱きかかえ、傷を癒していく。その時、私は彼女の属性の力を初めて見た。私は彼女に駆け寄ると、その不思議な力について尋ねる。

「私の属性はね、『聖』なのさ。傷を癒す力、病を治す力。でも他の人には内緒よ、この力は頻繁に使用できないからね」

彼女は気を失った彼を優しく見つめながら、私の問いに答えてくれた。その声はとても弱々しく、健康な人のそれとはかけ離れていて、集中していないと聞こえないほどに小さな声だった。でも、それを見た私は彼女達を美しいと思い、同時に憧れたのだ。

「俺は『闇の死神』、ミシエルは『聖天使』と呼ばれていたのは知っているだろ？」

知っている、わかっているつもりだ。黙って頷く。

「ここで一つ質問だ。魔力の源ってなんだろうな？」

魔闘士にとってあまりにも常識的な質問を、彼は投げかけてくる。ひよつとしてソーザは新米魔闘士である私の知識を試しているのだろうか。

「大地の中にある『精』でしょう。『精』を吸い上げ、魔石を通して魔法は発動します。そして川や湖の側では水の魔法はより強力になるし、火山の近くでは火の力は上がる。それは大地の中の『精』の属性が場所によって違うからです。逆に『精』の枯渇した場所では魔法は使うことは出来ません」

模範的な回答が出来たと思う。鼻を鳴らしてどうだと胸を張る。「そうだな。魔法は『精』がないと発動できない。でも実は『精』が無くても発動できる属性もある」

背筋に汗が流れる。驚きはあったが意外でもなんでもなかった。私は小さい頃、その答えを知っていたではないか。彼女が口にした

言葉が脳裏をよぎる。

頻繁に使用できない

「それが『聖』属性なのですか？」

フランが一呼吸おいて答えると、ソーザは黙ったまま頷く。表情はどこか辛そうに見える。

「そう、希少属性の中でも特異の属性にして、万病に効く治療魔法。彼女は君に話していたのか」

「はい、あの時貴方達が私を守ってくれた際に」

ソーザは口の端を吊り上げ、軽く喉を鳴らした。それは今から言う話は絶対に秘密にするんだぞ、そういう合図にも思えた。

フランは息を呑み、聞き逃さないよう彼の口に集中する。

「世の中には死にたくない輩が溢れかえっている。彼女は信用の置ける人物にしか自分の属性を話さなかったよ。ホントにごく一部にしかね。君は凄いな、小さいながらに随分ミシエルに気に入られたようだ」

ソーザの言葉にフランは再び息を呑む。

緊張から喉はカラカラで、唾なんてもうでなかった。

「でも『聖』属性には重大な欠点があったんだ。それは『精』を使えないことだった。じゃあ何を源に魔法を発動させていたんだろうな」

ソーザは草をむしると、空中に投げた。

千切れた草は強い風に飛ばされて、あっという間に夜の暗闇に吸い込まれていく。

「何だと思う？」

考える。ミシエルが魔法を使ったときどういう状態だっただろうか。当時幼かった私は彼女の声しか記憶にない。あの消えそうな小さな声。そこから何が考えられるのか。

「疲れていた……」

フランは単純に思いついたことを口にしていった。

「そうだね、疲れちゃうんだよ、魔法を使うと。まあ当たり前のこと

とだけど。傷の治療なんかに使う分は使用しすぎなければ大丈夫なんだ。でもミシエルは使いすぎた。で、俺はそれに気付かなかった」「命、ですか」

最悪の回答。魔法の使用によってすり減っていく命。無償で魔法が使用できるわけがない。通常、過度の魔法使用は一時的な体力不足に陥るだけで、命まで奪われることはない。

「俺は死んだミシエルの最後の約束を果たす為に此処にいる。それだけの為に生きている」

「約束って？」

思わず聞いてしまった。ソーザは頭を掻き申し訳なさそうに頭を振って「ごめん二人だけの秘密の約束なんだ」と断られてしまった。軟らかく目を細め、口の端は少し上向き。でも瞳の奥はちよつと哀しげ。「これは飛びつきり大切な思い出なんだ、他の人には話せないよ」そんな事を表情で語っているように思えた。

「失礼しました」

小さく頭を下げ、フランは非礼を詫びた。ソーザは立ち上がり、自分のズボンをパタパタと叩きながら「気にしてないよ」と付け加えられた、

「それにこの話はアリーもパティも知っているからさ」

そう言いながら立ち上がると、ソーザはフランに背中を向け、右手を肩の上でヒラヒラ振り、それを「おやすみなさい」の挨拶にかえてソーザは納屋へと戻っていった。

私の憧れた人は相変わらず強かった。でも少しだけ哀しい顔をするようになっていた。

そして彼女達も知っている。ソーザの過去を、そして彼女の事を。そして私は彼に彼女達と同等の信用を貰ったものと受け取ることにした。そう思うと、不思議と悪くない。むしろ憧れの人物からの告白に胸の奥が熱く感じた。

さて、自分もそろそろ寝たほうが良いだろうと思い、小屋へ入る。ふと、キツチンに置かれたコップに目を向ける。

コップが「緊張で喉がカラカラだったでしょう？ 一杯いかが？」と語りかけてくる。

折角のお誘いだ、一杯頂こう。

風に押されるドアが心地良いリズムを刻み、喉の渇きが満たされたことで一気に眠気を誘う。

もぐもぐっすり寝むれそうだった。

10 懐古の夜2（後書き）

さてお話も3分の1が終わりました。

これは賞用として考えています。なので、できればご意見、ご感想を頂けると大変助かります。批評も大歓迎です。ぜひご協力をお願いします。

11 モーニング

空は快晴。朝食は大麥パンに目玉焼き、山羊のミルクにチーズと香草を混ぜて煮たスープが出た。昨日の晩御飯もそうだが、久しぶりに贅沢な朝食を食べた気がする。

違う、食べた。

スープにパンを浸して、口に入れた時の濃厚なチーズの味と、鼻をくすぐる焼けたパンとハーブの香りをどう表現したらいいのだろう。昇天しそうなくらい旨かったというべきか。

「ごちそうさまでした……」

この幸せをくれた兄妹に感謝の礼を込めて、言葉にする。

わたしは昨日、魔闘士の資格試験に見事合格した。この世で一番困難と言われた魔闘士試験に、だ。しかもわたしの属性は「光」だという。光属性はこの世界でもわたし以外では二人しかいないという、希少属性の一つらしい。出来るだけ早く家に帰りデイエゴにこの白銀に輝く魔石を見せてあげよう。そして早く職を見つけ、楽をさせるのだ。寝るに困らない家があつて今朝みたいな朝食がきちんと取れる生活ができて、そんな素敵な暮らしをするのだ。

小屋の前にある井戸で歯を磨きながら、将来のビジョンを思い浮かべる。きつと水桶に映る自分の歯以上に輝いているに違いない。

「ぬふ、ふふふ」

「何にやけてんの？」

輝かしい将来を妄想しながら、にやけた顔で歯ブラシを口に突っ込んでいると、横から矢のような勢いでアリエルが顔を出してきた。驚いてむせる。ゴホゴホと咽いて器官に入った磨き粉を吐き出す。

「っ！ んっ！ ……なんでもない」

「でもさ、異様なくらい可笑しな顔してたよ。ものすっごく変な顔だった」

「ちよつと考え事、大したことない」

崩れていたのかな。感情が顔に出ることなど、今まで殆ど無かったのに……。ひよつとして目の前にいる女の子の影響だろうか。試合では敵同士だったのにも関わらず、彼女はわたしに声を掛けてくれた。正直、あの時のわたしは試合に敗北したことで、完全に駄目だと思い、塞ぎ込んでいた。そんなわたしに彼女は合格発表の瞬間まで側にいて、わたしの世話を焼いてくれた。合格した時は一緒に祝福してくれた。

野宿でも構わないと思っていたわたしを案じて、彼女はわたしを家に招待してくれた。貧乏くさいわたしに対して、真つ当な客人のように扱ってくれる。そんな優しさを、わたしは他人から受けたことは今まで殆ど無かったので、凄く戸惑った。歯磨きを継続しながら、思い返す。

わたしは戦災孤児だった。長く続いた戦争のおかげで、わたしの両親は亡くなつたらしい。生まれ故郷すら知らない。物心がついた時、わたしは既に使われる側の人間だったから。一つ下の弟と一緒に大根畑に捨てられていたところを、老夫婦に拾われた。そして奴隷のように働かされてきた。与えられる食料は、カビが生えたパンが一つと汚れた水。部屋はまるで牢獄のように暗くて寒かった。しかしそれでも生きることができたのだ。あの老夫婦の仕打ちは辛かったが、それでも生きていくだけの食料と衣服は恵んでくれた。

それが嫌になつた十二の頃、戦争は終結したが、私の住んでいた街は荒廃してしまつていた。混沌と騒乱に紛れながら、わたしは弟と逃げるように育つてきた街を出た。

そして生きる為に手を汚してきた。盗みもしたし、人も騙した。わたし達は死にたくなかつたから、生きる為ならなんでもしたと思う。そして醜行を繰り返して、根無し草のような生活を送りながら『スーペル』に流れ着いた。

そこでわたしは職についた。生活雑貨の売り子だった。一生懸命頑張つて売つても、賃金は姉弟が食つていくに足りなかつた。食べ

る為にデイエゴも廃材の処理を請け負う業者の小僧として、日が暮れるまで働くことで、なんとか生活が成り立っていた。

そんな中、唯一の希望が魔闘士試験だった。わたし達は必死でお金を貯めた、日々の食費を削り、時間の許す限り労働と勉強に勤しんだ。試験は資格年齢が早いわたしが受ける事にした。

デイエゴが受けるといっても、わたしは許すつもりはなかったけど。

そして今に至る。

「 本当、お世話になった」

歯磨きを終えて、小屋に戻ろうとするアリエルに礼をする。

「ん？ 別にいいって、困った時はお互い様って言ったじゃん」

コップと歯ブラシを掲げながら、快活な笑顔で返事する彼女は、朝日に照らされているせいか、リオから見るととても眩しく見える。

「そっぴやリオは今日帰っちゃう？」

「うん、弟が心配だから」

「そっぴか……、じゃ今度は私が会いに行くね！」

リオはその言葉にどう返事していいのか分からなかった。

目を伏せ、困惑した表情になる。が、最終的には小さく「待ってる」と精一杯の勇気を振り絞って返事をした。

リオも歯磨きを終えたので、コップをキッチンに返す為に、小屋へ戻る。

小屋へ入ると、パーティが大きな欠伸をしながら、アリエルの部屋から出てきた。手も沿えずに遠慮なく開かれた欠伸は、パーティのような品格の漂う乙女がするようにはとも思えなかった。腕や足の部分にフリフリの付いた紺色の寝巻きはあちこち乱れて、彼女の胸や腿ももといった魅惑的な部分を露わにしている。

コップと歯ブラシを両手に呆然と目を丸くしてパーティを見ていると、こっぴちに気付いたパーティは寝ぼけ眼でじつとこっぴちを見返してきた。

「……おはよう」

一呼吸置いてようやく挨拶。どうやら朝に弱いらしい。

パーティは目をゴシゴシさせながら、食器棚からコップを取り、側にあつた飲料用の水瓶から水をすくって飲む。それでも彼女の眠たそうな目は変わらず、着崩れたそのままの格好でのそのそと外へ出て行った。

あのままでいいのだろうかとりオは心配になったが、パーティはパジャマまでこの家に置いていたのだ。きっとソーザやアリエルは十分理解しているのだろう。

「はあ」と一つ嘆息をついてキッチンにコップを返すと、背後でまたドアの開く音。

のっそりとソーザの部屋から出てきたのはフラン。こちらも寝癖が酷く綺麗な桃色の髪がバツバサである。当然目の焦点は定まっていない。薄生地寝巻きのおかげで、胸とお尻のラインをくつきりと露になつており、これまた破壊力抜群である。

「…おお、おはよう……」

引き続き立ち尽くしたりリオにフランは朝の挨拶をする。腹をポリポリと掻きながら、彼女も顔を洗う為、ゆったりとした動作で外套を羽織り、扉を開けて外に出て行く。

リオはこう思うことにする。

巨乳の奴は朝が弱い、と。

アリエルの部屋に入り、身支度を整える。リオの荷物は旅をするのに必要最低限の物だけを持ち歩いている。寝袋は無く、身を包む毛布が一枚、それにナイフと地図、後は砂避けのゴーグル。そんな軽装備なので、身支度は直ぐに終わる。

出立の準備も終わり、ソーザに泊めてもらったお礼を言う為起居間へと移動する。

そこでは寝巻き姿のパーティとフランがもそもそと朝食を摂っていた。

彼女達はこんなに立派な食事をなんと面倒くさそうに食べているのだろう。育ちの違いがあるというのはわかっているが、それでも

軽い憤りを感じる。しかし彼女らに自分の価値観を押し付けるのはいけないと思い、そのまま何も言わずに通過する。これがディエゴなら本気の拳を頭の天辺にお見舞いしてやるところなのだが。

小屋の外に出ると、ソーザは風通しの良い丘の上で洗濯物を干している最中だった。風にあたりながら、ゆっくりと歩み寄ると、ソーザはこちらに気づき、軽く手を挙げてきた。

「やあ、どうしたんだい？」

リオも軽く頭を下げる。

「色々、ありがとございます。その、ご飯も美味しくて、ベッドも快適で……」

上手く言葉に出来ず、それが恥ずかしくて顔が熱くなる。

「いや、こちらこそ久しぶりに賑やかで楽しかったよ。良かったらまたおいで、その時は腕を振るって歓迎するよ」

この兄妹は笑い方がとても似ている。ソーザはアリエルと同じような笑顔でリオにまた来てくれと言ってくれている。少し違うといえば「良かったらまたおいで」と言う彼の言葉から、わたしがそんな機会ないと思っっているという事を、薄々だが感じているところだろう。おそらくソーザはわたしの置かれている立場を、服装や振る舞いで大方理解できている。

「はい、その時はまた宜しくお願いします」

笑顔を作り上手に言えた。後を濁さぬように、いい顔でいられたと思う。

「あーにさまあ〜！」

すると、背後からアリエルの呼びかけが聞こえてきた。振り返ると、アリエルが納屋から木剣を両手に持ち、小走りでこちらへ向かってくる。そして1mほど手前の辺りで片方の木剣をソーザに向かって投げる。彼は洗濯物をカゴに戻し、木剣を手に取る。

「もうそんな時間か、朝は時間が経つのが早いねえ」

リオは二人の行動についていけず、思わず間に入ってしまった。

「……なにをするの？」

言葉は遠慮気味の小さな声だった。

しかしそんな声を聞き逃すこともなく、アリエルは返答してくれる。

「毎朝、私は兄様と武術の鍛錬をしてるのさ。拳銃や剣の使い方もこうやって覚えたの」

木剣を肩でトントンと叩き、そして構える。

「いつもアリーはいきなりだからな。こっちが何かしていようと構いなしだよ」

そういうソーザは構えも取らず、自然体でアリエルから目を外さない。

いつの間にか二人の間に緊迫感のある空気が張り詰める。リオも思わず息を呑む。

この兄妹の手合わせを見る事は、これから魔闘士となって働くわたしにとって、きつと良い経験になるはずだ。

そう思いながら、リオは二人の動向を見つめた。

12 手合わせ

朝食を終えたフランは扉から顔を出し、様子を見守っていた。フランのあごのすぐ下で、パティも同じく顔を外に出してくる。

「いつもこのような稽古をしているのか？」

さっきまで眠気で頭の中が飽和していたのに、今はすっかり吹き飛んでしまっている。それもそのはず、久しぶりにソーザの剣技が拝見できるのだ。

興奮するにきまっている。

「まあね、アリーとソーザさんはほぼ毎日じゃないかしら。私も時々手合わせしてもらってるわよ」

「戦績は？」

フランは剣を持った二人に視線を集中させながら、問う。

「未だ一撃入れたことすらないわよ」

パティは己の腕を嘆くかのように、一つ息を吐く。

「貴方ほどの腕でもか。やはり彼は凄いな」

昨日の試験で彼女の実力はわかっていて、パティも凄腕の剣士だ。彼女なら一人で軍の兵士二十人と渡り合えるだろうが、そんな彼女でもソーザには全く敵わないと言う。

「始まったわよ」

今のソーザの実力は如何ばかりなのか。そう思っていると、パティがバトルの開始を告げる。

先に動いたのはアリエルだった。

ソーザの懐に素早く潜り込むと、突き上げる様に喉元を狙ってくる。

彼女の小柄な体とスピードを生かした見事な突き上げを、ソーザは半身になり、なんなく捌く。

アリエルはそこから横にしなやかに木剣を薙ぐ。ソーザは体格に似合わず俊敏にしゃがみ、これをやり過ごす。アリエルは更にそこ

から振り下ろしを試みるが、またもやソーザに飄々とかわされる。そしてソーザは半身の状態から身体を捻らせると、強烈な払い斬りを繰り返す。

アリエルは剣を両手に持ち替え、その斬撃を受け止めるが、華奢な少女の身体では完全に衝撃を殺すことは出来ずに体がぐらりと揺れる。そこを追撃しようとして、ソーザはすかさず間合いを詰めてくるが、アリエルはそれを察し、後方に飛び間合いをとる。

一瞬の攻防。

それは息をつく暇も無く続けられる。間合いをとったアリエルに、今度はソーザが詰め寄る。闘牛が突進してくるような激しく寄せる。アリエルはそれを払おうと木剣を横に一閃させるが、剣撃は簡単に受け止められてしまった。その勢いのまま、ソーザの体当たりを喰らったアリエルは、芝生の上に叩きつけられた。

「相変わらず反則的な強さね」

パティの声が少し震え、上ずっている。それは尊敬と嫉妬の入り混じったようだった。

「言葉も無いな」

フランは久しぶりに見たソーザの剣に、昔の面影を感じた。受け止めきれないほどの強烈な剣撃と、鬼神の如く襲い掛る激しい突進は、彼の戦闘スタイルだった。それが今でも失われていないことが嬉しかった。

「いたたあ」

勢いよく叩きつけられ涙目になったアリエルが、背中を擦りながらゆっくりと立ち上がる。

そして一緒に飛ばされた木剣をアリエルが探すそぶりを見せるが、その探し物は見つからない。フランも木剣がアリエルと一緒に飛ばされたのだから、付近に転がっていると考えていただけに首を傾げる。

しかし、それはソーザに歩み寄っていく銀髪の少女に目をやることで解決した。

リオは木剣を片手にソーザの前に立つ。

リオには悪いが、くたびれた上着と所々繕つてある皮のズボンを着た少女は、町で物乞いをしていても全く違和感が無い。ソーザと並んでいると、身なりは貧しく可愛い容姿をしているので、売春でもしているのかと思われても仕方のない光景だった。

「どうか、わたしと一手」

短い請願。ソーザは剣を握りなおして「どうぞ」と一言。

それを聞くや、リオはアリエル顔負けの素早さで一氣に間合いを詰める。

それは奇襲と言つても差し支えなかった。

先手必勝と言わんばかりに、小さい身体が跳躍する。

リオは剣を両手持ちとし、体を空中で一回転させながら振り下ろした。ソーザはこれを受け止める。剣と剣がぶつかり合う音が衝撃の強さを語る。そしてリオは弾かれる反動を利用して、後方へ退く。そしてまた素早い動きから間合いを詰め、回転の横薙ぎ。勿論両手持ちである。ソーザはこれを寝そべるように屈みやり過ぎすと、その体勢のまま足払いでリオの下半身を崩しにかかるが、リオもバツクステップで上手くかわす。

「今度はリオか、いいセンいつてるんじゃないか？」

実際、リオの動きは素晴らしかった。

「あら、思っていた以上に身軽ね。あの子」

パティも驚きの表情を見せる。

仕切り直し。

リオはそこから両手持ちによる剣撃を何度も繰り出すが、ソーザはこれを柳のようにしなやかにいなす。三十合くらいの打ち合いが終わったくらいだろうか。

とうとうリオの息が上がり始めた。肩で息をし、顔は汗まみれになつていた。

そして長時間の連撃と緊張感から、リオが呼吸を整えようとした、その一瞬の気の緩み。

その様子は外野で見物していたフランにも理解できた。武芸に通じているものならば、呼吸と間合いを考慮して戦う。接近戦での息継ぎは連撃の合間か、相手との間合いが開いた時のみ行うのが定石だ。

リオはそれが出来ていなかった。

彼女はまだソーザの攻撃範囲であるにも関わらず、大きく息を吸ってしまった。その事で肩が上がり、腕の可動範囲が限られてしまった。

ソーザはそれを見逃さず、狙いすましたかのようにその体軀を走らせ、リオに接近するとリオの剣を払い落とす。

アリエルも理由が分かったのか、胡坐を組み、その上に頬杖をつきながら渋い顔をしていた。「あれでもだめかぁ」と呟くあたりどうやらリオの応援をしていたようだ。

しかしリオはあれだけ見事な剣さばきを見せたのに、どうしてあんな初歩的なミスをしたのだろうか？

「解せないわね」

パティも私と同じことを思ったらしい。

「とりあえず行ってみよう」

リオの真意が分からず、パティとフランは寝巻き姿のまま、ソーザたちの下へ駆け寄ることにした。

フラン達が来ると、落ちた剣を見つめるリオにソーザが歩み寄りて握手を求めらる。

「中々に凄いな、君は」

リオは握手に応じ「ありがとうございます」と礼を言う。

「なぜ両手持ちで？ この剣は一応女の子でも片手で使えるようになってるけど」

ソーザは木剣を指差してリオに尋ねると、リオはその木剣を拾い、「アリーとの手合わせの時、アリーの攻撃が簡単に弾かれていたから」

その一言で、リオの意図が硝子ガラスのように透けて見えてくる。

先ほどのアリエルとの手合わせ。

リオはあの時アリエルがソーザの突進を払おうと剣を振るったが、簡単に弾かれ、そしてやられていた事を指摘したのだ。

「そうか、それで君はパワーを重視したスタイルで俺に挑んだのか。剣を両手で持ち、スピードを落とさず、回転することで遠心力を生させた。それを利用して一撃の重さを増やしたのか。君は聡明だね。アリーは少し見習ったほうがいいんじゃないか？ あいつはこの三年間ずっと同じ戦法、手数と速さにものをいわせた攪乱戦法のみときたもんだ。お前は手数とスピードばかりでパワー不足を補おうとは一切考えなかったんじゃないか」

フランもソーザの言う通りだと思った。

「うう、面目ない」

アリエルは兄に短所を指摘され、うな垂れる。自分が三年間気付きもしなかった事を、リオにたつた一回の手合わせで看破された事による恥ずかしさも入っているのだろうか、顔は耳まで赤かった。

反面パティは意地の悪い笑みを浮かべ「私は分かってたけどあなたの為になんないから言わなかったのよ」と耳打ちしている。昨日の晩の事といい、なんてひどい女だ……。

「しかし、君の攻撃は分かり易い。斬り込みのタイミングなんかは素人同然だった。そう、まるで拳闘で言うテレフォンパンチみたいだったよ。俺に攻撃させないように連撃を繰り返したり、呼吸の取り方といい、ひよつとして君は実戦の経験もしくは武術の心得が全くないんじゃないか？」

リオは黙って頷く。やはりそうだったか、しかし、

「しかしリオの剣技はたいした欠点も無く見事なものでした。とても素人の扱いとは思えません」

そう言ったのは、リオの剣は工夫を凝らした見事な剣技に見えたからだ。

「確かに、試験の時だって普通にライフル扱ってたわねえ」

「どうやら二人の話を聞く限り、君は武器の扱いに関しては天才的

らしいな。まあアリーと俺の手合わせで効率的な闘い方を見出すあたり、洞察力は良いものを持っているね。しかももう少し戦闘経験や鍛錬をしたほうがいいな。正直、今のままでは君は魔闘士としては大成しないだろうな」

「えっ！」

アリエルが驚きの声をあげる。そんな彼女を尻目にパティが冗舌にしゃべくる。

「当たり前じゃない。だって武器の扱いは出来ても、武術経験が全く無いのよ。フェイント技術も間合いのとり方も知らないリオが生き残るのは厳しいわよ。私達みたいなひよつ子相手ならともかく、ソーザさんみたいな腕の立つ魔闘士と鉢合わせした場合、リオの弱点なんか直ぐにばれちゃうわよ」

バツサリと斬る。

「そっかあ、私がリオのライフルをかわせたのは本当に運が良かったって事になるね」

その言葉に驚いたりオが「なぜ？」と問う。

「だってリオの撃つタイミングにさ、もしフェイントが混ざっていたら、私絶対に避けることなんて出来なかった。だからリオがそういう技術を身につけてなくて本当に助かったよ」

「武術の鍛錬は一日の長というものがあるからね。君は洞察力に優れている面がある、こちらは才能による部分も大きいし、どちらかというとフェイントや心理戦に重点をおいて戦う術を見出したほうがよさそうだ」

ソーザの意見は的確だった。補うべき点は長所にするべきだ。洞察力や心理を読み取る能力は経験と才能に頼る部分が大いし、武術に関する技術は一朝一夕で身につくものではない。ならば、可能性のある前者を重点的に鍛えることで、後者の不利を補えばよいというのだ。

「しかし、それでもやはり戦闘経験が足りないのでは」

フランは指摘する。

アリエルは幼い頃からソーザに稽古してもらっているし、パティとフランも家柄から日頃の鍛錬は怠っていないだろう。そう考えると、明らかにリオだけが経験不足だ。

「でも私達との試合でも、兄様との手合わせでも、リオはそこら辺の魔闘士よりよっぽど凄いと思うよ！」

それにアリエルが応戦する。しかしソーザの表情は依然、厳しいままだ。

「確かにそうなんだが、それとこれとは話が違う。彼女はこの中で圧倒的に経験不足だね。だから彼女しかできないやりかたで、これからの戦場を生き残る必要がある。俺はアリーの友達に死んで欲しくないから、こうやって忠告してるんだよ」

ソーザからの死の臭いを含ませた発言に一同は凍りつく。前戦争を魔闘士として経験したからこそ言える言葉であることは十分に理解できた。重い空気が両肩にのしかかってくる。

「……わかりました」

そうポツリと返事をするリオは、少し表情が暗い。魔闘士になっただばかりでいきなり辛辣な言葉を受けたのだから、無理もない。

「まあそう落ち込む事はない。欠点があるのはリオちゃんだけじゃないよ。アリーだって小手先の技が多いから、力押しでこられるとすぐに対応出来なくなるし、パティは逆に力で押し切ろうとする展開が好きな傾向があるからね。それぞれ短所はあるんだよ。俺が言いたいことは一つだけ。己を知れてことだ。自分の良いところと悪いところを冷静に分析すれば、何処を修正すればいいか、自ずと見えてくる。そうすればきっと自分だけの特別な武器が何かも分かってくるはずだよ」

ソーザに欠点を言われ、頬を人差し指でカリカリと搔いて恥ずかしそうな表情をするアリエル。

パティは腕組みをして悠然と構えているが、顔が真っ赤だ。

しかし二人は恥ずかしがりながらも、ソーザの言葉には真剣に耳を傾けていた。

私もそれだけの価値があったと思う。

「フランはないの？ 私達ばかりで卑怯だよ」

するとアリエルは掻いた頬を膨らませながら、ソーザに突っかかる。どうせなら皆欠点を晒せばいいのだと言わんばかりの様子だ。

「フラン嬢ちゃんはないなあ。まだ実際に手合わせしたこともないからなあ……」

ソーザは回答に困る素振りを見せる。

私の闘う姿をソーザは見たこともないのに、短所を言えと言われてもどうしようもないということだろう。そんなアリエルの滅茶苦茶な投げかけを、ソーザは苦笑して流す。

そりゃそうだろう。

「でも皆いい魔闘士だと思うよ。リオちゃんも自分の欠点と長所が分かっていれば、さっきも言ったけど、君にとってはプラスになることだ。己を知ることが凄く大事なことなんだから」

そしてソーザはアリエル達の顔を見渡し言う。

「後、これだけは忘れないでくれ。魔闘士は危険な職業だ。命だつて失うことは珍しくない。だから絶対に死なないでくれ。残された人達が悲しむような事はしないでくれよ」

そう言うソーザの瞳は哀愁を帯びて、どこか遠くを見ていた。その瞳の理由は昨晚の出来事でもう分かっていた。

フランは力強く頷く。絶対にここにいる皆を悲しませる様な事はしないと。

燦々(さんさん)と輝く太陽とは反対に、午後の商業区は閑散と
していた。昨日の夕刻にあれだけ忙しく賑わっていた市場通りも、
今は穏かな時間が流れている。

早朝は各地から入荷してくる、野菜や肉、果物や魚等の生鮮食品
をめぐって、日が昇る前からあちらこちらで商人同士の取引が行わ
れる。荷物持ち要員として主人に付き従っている小僧達は、ここで
交渉術を盗み聞きして学ぶ。主人達はいつ離れるとも知れない丁稚
の為に、自らが極めた話術をわざわざ教える事はしない、とパティ
が言っていたのを思い出す。

その後、商人達が仕入れた食品や花を買い求め、主婦や家政婦が
怒涛の勢いで店先に押し寄せてくるのだ。そういったラッシュの時
間帯は午前十時ほどでピークを過ぎる。

そして朝の忙しい時間帯を終えた商人達が、十二時までには露店
で昼食を済ますので基本的に午後の商業区は暇な時間帯へ突入する
のだ。店によつては午後になると、一時店を閉めて夕刻前に再開す
るといふ店も珍しくないらしい。この街で買い物をするなら、覚え
ておかなければいけない。

「しかしまた闘技場に行くのは面倒くさいなあ」

アリエルが道端の石ころを軽く蹴飛ばしながら愚痴る。石は広い
通りをころりと転がる。

道は空いているので、四人は横一直線に並んで市場通りを歩いて
いた。今の時間帯ならば幅をとって歩いても全く人の邪魔にはなら
ない。

「仕方ないじゃない。資格証、いるんでしょう?」

「うっ、まあそうだけどさあ」

パティがその愚痴を拾い、アリエルにもつともな一言を浴びせかける。大体、昨日の今日で資格証を作ってくれる親切な魔闘士協会に、そんな愚痴をこぼすのはただの我が儘だと彼女は言いたいらしい。パティの一言が正論すぎて何も言えないアリエルは、苦虫を嚙んだ渋い表情になる。

「そうそう、フランに聞きたいことがあるんだけど、いいかなあ〜」
「なんだ？」

話を逸らすように、店先の商品をキョロキョロと見回しながら、アリエルは発言する。

「なんで兄様はフランのことをさー、『フラン嬢ちゃん』って言ったのさ。なんか引つかかるんだよね〜。二人ってなんかあったの？」

「それ、私も気になってたのよね」

アリエルの言葉に便乗したのはパティ。先ほどの手合わせ時に、フランがソーザの事を『やはり彼は凄い』と発言したことが少し気になっていたらと、彼女は話す。そんな些細な台詞をよく覚えているなどフランは感心する。

そのことか、と教会の前を通り過ぎながらフランは続ける。

「そうだな。簡単に言つと、私が小さい頃ソーザさんにお世話になった事があるんだよ。その時、彼は傭兵をやつていて、私は彼の雇い主の娘だったからな。それももう八年程前の話だよ」

「へえ、兄様に傭兵なんて過去があつたんだあ」

アリエルのその発言に疑問を感じてフランは聞き返す。

「アリーはソーザさんの妹だろう？ なぜ知らないのだ？」

リオも相槌をうち、アリエルのほうを見据える。彼女も蚊帳の外は嫌なようだ。

「昨夜も言つたけど、私と兄様は本当の兄妹じゃないんだよね〜。

私、戦争の終わった日に兄様に拾われたの」

アリエルは舌をペロツと出して言う。パティは肩をすくめて「そういうこと」と一言。

「だから私は兄様の事は詳しくは知らないんだ。昔、彼女と一緒に魔闘士やってたって事は知っていたけど、傭兵をしていた事は知らなかったなあ」

「そうか……。すまない」

フランはペコリと頭を下げ、視線を前方へ戻す。

これ以上は深入りすべきではないとフランは判断した。彼女も決して順風満帆の人生を歩んできたわけではない。話したくないことや、聞かれたくないことの二つや二つ持っているのだろう。

すると、アリエルはフランのそんな気持ちを要らぬ遠慮だと言わんばかりの迫力で歩み寄ってきた。やはり私の行動が他人行儀過ぎたのだろうか。少し後退りし、アリエルの言葉を待つ。

「でも、私の知らない兄様を昨日あったばかりのフランが知ってたなんて、なんかずるいよ！是非その頃の兄様の話聞きたい！」

何を言うかと思えば、とても理不尽な言葉だった。

これはあれか、嫉妬か？ それとも只の駄々なのか？

「そうねえ、私も聞きたいわ。ソーザさんの昔話」

しれ〜っと、パティが便乗してくる。飄々としているつもりらしいが、鼻がぶくうと膨らんでいる。かなり興味津々の御様子だ。リオもこくこくと、上下に頭をふってフランを促す。

これは最早断れる状況でない事は、昨晚の枕投げの時に十分理解している。やれやれと肩を落としたフランは口を開く。

彼と会ったのは私が八歳の頃、その時の私の父は結構な有権者だな、まあ今も国では重要なポストについてはいるが、その当時はそれ以上に機密なポジションにいたんだよ。

当然、そんな重要人物が命を狙われないはずがない。毎日のよう

に嚴重な警戒態勢がとられ有能な警護者達に私達は守られていた。

そんな中で一際目立っていたのが彼らだった。

黒一色の服装で、気性の激しそうな眼をした青年と、真っ白なコートを羽織った栗毛の美しい女性。彼らは数多い警護者の中にも目立っていたから、直ぐ見つけることが出来たよ。

そして彼女は度々私の遊び相手にもなってくれた。人形遊びや縄跳び、外に遊びに出る時の警護者はもちろん彼女だった。常に彼女は私の側にいてくれて、私は彼女を本当の姉のように慕っていた。

彼女は「本を読んで」、「一緒に寝て」、「もうお稽古は嫌だ」と駄々をこねる私に対して、いつも優しい笑顔で対応してくれた。当時はなにも感じなかったが、あの時代、殆どの人が自分の事で精一杯なはずなのに、子供の我が儘にあれだけ付き合っていた彼女は、素晴らしくできた女性だった。

ちなみに彼は私には近寄ろうとはしなかったが、常に彼女の傍らで行動していた。というか、当時の私は彼に嫉妬していたんだと思う。彼女を彼にとられるのが嫌で私が逆に彼を避けていたんだ。彼女は彼の前では綺麗に笑うんだよ。本当に女神なんじゃないかと思うほどに。

絶対に私の前では見せない表情だったので、私は彼女を問いたただした。「どうして彼の前ではあんなに綺麗に笑えるの？」って。彼女は淑やかな笑みで答えてくれた。「貴女にもいつかきつと分かるよ」とね。

彼らが来て三ヶ月が経った頃、近隣諸国との情勢が険しくなり、治安も悪化した。最早建て直しが不可能なくらいに国は崩壊し、私達家族は他国へと亡命することになった。

道中の戦闘は苛烈を極めた。父が他国へ行くことによる機密情報の流出を恐れた国の人間が、昼夜問わず私達に向かって牙を向いてきたからだ。

私達は国の内外で狙われる羽目になった。人の血が流れない日はなくて、私は常に恐怖に震えていたよ。安心できるのは彼女が手を

取ってくれていた時だけだった。その時だけは恐怖心も震えも治まった。彼女が私に魔法でもかけてくれたんじゃないかと思うほど、不思議と心が安らいだ。

私が彼女の腕の中にいる間、彼は見張りを続け、時には敵を切り伏せ、私達家族を懸命に守ってくれていた。

しかし、彼の闘い方は恐ろしく無謀だった。敵陣に突っ込み、周囲の人間を消していく……。敵の攻撃を避けるような行動もとらず、ただ闇雲に突進しているような彼の闘い方は今でも信じられない。何であるような無謀な突撃を繰り返していたのか、何故いつも独りで闘っていたのかも分からなかった。

ただ彼の闘う姿はとても恐ろしくて残忍だった。でも、必死に私たちを守ってくれていることだけは痛いほど分かった。彼は敵を仕留めた後、必ずと言っていいほど私達の安否を自分の眼で確認してきたから。そして私達を見つけた時の彼の表情は、彼が死神と呼ばれ恐れられていたということ、忘れさせるものだったよ。

「そうした彼らの活躍で私達は無事亡命でき、今こうして生きてアリーに会えたというわけだ」

話を終え、フランは大きく息を吐き、一息つく。

「あの兄様がねえ、信じられない」

「勇ましいソーザさんなんて想像もできないわ。確かに腕は恐ろしくたつけど、のんきな性格のあの人が敵陣に突っ込むなんて無謀なことやるとは思えないわね。それこそ老いたロバに乗って狼の群れに単騎駆けしていくようなものよ」

今のソーザを見ると、無理はないだろうとフランも思う。

今の彼は昔とは違い、落ち着いて物事を見ている気がする。荒々しさは冷静さに変わり、狂犬のような瞳は羊のように穏やかになっていた。フランも最初にソーザに会った時、全くといっていいほど

気付かなかった。ソーザの変わりようから、彼が変わった何かがあったことは間違いないだろう。そして、その『何か』には間違いないくミシエルが関係しているのだろう。

「しかし兄様の彼女もやっぱり優しい人だったんだね。私憧れちゃうなあ」

「アンタは無理でしょ。落ち着きないし、ガサツだし」
「激しく同意……」

瞳を輝かせ、兄の想い人を想像しているアリエルに対し、両サイドから厳しい突っ込みを受ける。

「まあまあ、憧れるのは自由じゃないか。実際、私にとっても彼女は女性の理想像だったよ」

歯軋りをたてながら、鼻息荒くパティとリオを威嚇するアリエルをなだめながら、フランは言う。さっきまで乙女のようにうっとりとした表情が、今は不機嫌なチンパンジーのような阿呆顔になっている。本当に表情がコロコロ変わる女の子だ。

「彼女はアリーの言う通り、女性の鏡のような人だった。聖女といっても差し支えはなかったと思う。でも気のせいかな、心なしか雰囲気」

「あーっ！ 見て、もう資格証の発行始まってるよ！ 早く行こうよ」

フランはその先を喋ろうとしたが、アリエルの大きな声にかき消されてしまった。

見ると、受付会場前の鉄門で試験官が資格証発行の説明を繰り返していた。

「ほらほらあ、早くー」
アリエルが会場を指差し、皆を急かしにかかる。

フランは「全くお前は子供か」と笑いたくなかったが、アリエルの指を指す方向を見て、その気持ち吹き飛んでしまった。そこには怪しげな目線をした集団がいた。

彼らは鉄門周辺で、自分達を睨むように凝視している。一体彼ら

は何の為にあそこにいるのだろう。そして何故あんなに厳しい視線を向けられなければいけないのか。

「なあ、アレは一体なんなんだ？」

隣を歩くパーティにたずねる。正体不明な彼らが気になって、受付会場に近づけない。あの露骨な視線と態度は一般の人間がやる行動ではない。迂闊に行こうものなら、何をされるかわからない。警戒心ばかりが募る。

「ああ、あれはね、スカウトよ」

「スカウトっ？」

意外な回答に、思わず声が裏返ってしまう。パーティはそれが可笑しかったのか、クスッと小さく笑う。

「そう、スカウト。だって私たちはあの超難関の魔闘士試験に合格したのよ。いくらなりたてのひよっことはいえっても、数少ない貴重な資格取得者なら、スカウトしにくるのは当然でしょ」

パーティはこの街の出身であるから、毎年こういったスカウト連中が来ることを知っていたのだろう。そうフランに言いつつ、淑やかな笑顔で彼らの視線に応える。彼女は頼もしさを通り越して最早図太いようにも思えた。

「なるほど……」

確かにパーティの言うとおり、魔闘士試験の合格人数は多いわけではない。

フランもスカウト達の熱い視線を感じる。不思議なもので正体を知ってしまうと、彼らの視線が「有能な若手の魔闘士を勧誘するチャンスは逃せないのだ」と言っているような、真剣なものに見える。

「昨日の魔闘士試験は勿論観戦してるだろうから、私達の闘いも当然チェック済みだろうね」。さて、あれを見てどれくらいスカウトが声を掛けてくるかなあ」

そう言ったのはアリエル。彼女も当然彼らがどういった生業の者か知っている。その声はとても愉快そうだ。

そうなのか、と耳を傾けつつ受付会場に歩を進める。するとアリエルの予言通り、沢山のスカウト達から、誘いの声が一斉に降りかかってくる。あまりの声音に耳を塞ぎたくなる。

そのせいか、試験官の案内説明が聞き取り辛くなる。スカウト達に囲まれながらも、四人は近くにいた試験官になんとか説明を聞く入り口で記名と本人確認を行い、受付会場へと入った。

会場内は昨日の混雑振りが嘘のようにガラリとしていて、受付に何人かが手続きをしてはいるが、掲示板や休憩室には全く人はおらず、受付横のしおれかけた観葉植物や館内案内表示板の方がかえって目立っているくらいだ。この閑散とした会場が、試験の難関さを示していた。

「ふえ〜、想像してたより合格者って少ないねー」

アリエルの間の抜けた声が会場内に響く。

「……毎年このくらいしか合格しない」

アリエルに対して、口を開いたのはリオ。こちらは控えめに話す。

「まあそれだけ難関なのよ、この試験は。ほら行くわよ」

パティは顎の先で受付を示す。

受付では再度記名を行った後、昨日使用した魔石を正式に頂戴する。

当然だが魔法は魔石を身につけていないと発動しない。だから魔闘士は魔石を指輪に嵌め込んだり、ブレスレットに付けたりして、肌身離さず所持するのが一般的だ。そして協会から渡された魔石は首紐を付けられたタイプだった。最初くらいは首に垂らして持つておけということらしい。

そして魔石と一緒に資格証と手の平サイズの魔闘士手帳を貰い、フランクは意気揚々と闘技場をあとにする。

リオやパティですら正式に魔闘士となったことが嬉しいらしく、手続きの間、終始頬が緩んでいた。無理も無い、それだけ難しい試験に私達は合格したのだ。嬉しくないはずがない。

「さて、帰るか」

フランはその言って、故郷トラヴァーリの方角を見つめた。

アリエルの眼前には香しい紅茶と、頬が落ちそうなくらい甘い匂いのする桃が映っていた。

もう我慢できない……！

それはフランとリオを見送る為、街の外門に行く途中で、パティが「寄つてかない？」とフルーツの蜂蜜漬け店を指して言った事から始まった。

アリエルは『またこんな高級な店を……』と思いましたが、魔闘士試験合格祝いと考えれば、懐が痛くなつたとしてもこのくらい高くてもいい気がした。

しかし、この提案にリオだけが渋い表情を見せる。三人共、彼女が裕福ではないことは彼女の身なりを見れば分かる。するとパティが「言いだしっぺの私が全部ですから」と追加で言うと、リオが返事をするよりも早くアリエルは嬉々として店に飛び込んだ。

「さすが名家のお嬢様　蜂蜜漬けと冷たいお茶のコンビなんて、人生でも数えるくらいしか口にしたことないよお」

アリエルはパティをヨイショしながらも、紙に書かれたメニューからは眼を離さない。価格はどれをとっても庶民の給料一か月分はくだらない。一般市民にとっては二、三年に一度あるかどうかの贅沢だ。真剣に選択しなければいけない。

店内にある各テーブルの中央には、色栄えの良い花が飾ってあった。椅子もテーブルも光沢良く、店のカウンターにある古時計やワインのボトルが並んだ趣のある棚は、店に落ち着いた高級感を漂わせている。

「ホントにいいの……？」

遠慮がちに聞いてくるリオに対して、パティは手を振り「遠慮は

要らないわよ」と返す。

フランは早くも蜂蜜漬けの欄で眼を左右に泳がせている。眉間に皺をよせ悩む表情から、どのフルーツの蜂蜜漬けにするか、相当迷っているようだ。その仕草が少女のように無垢で可愛い。

それを見たりオもフルーツ選びに専念しだす。

彼女は日頃からこういった甘い嗜好品には手を出せなかったらしく、今あるこの絶好の機会を最大限に生かさなければならぬとばかりに前後左右に銀色の瞳を走らせ、時にアリエルにフルーツの味やお茶の香りなどの助言を求めてくる。

結果、パティは林檎の蜂蜜漬けとアップルティー、アリエルとリオは桃の蜂蜜漬けとレモンティー、フランは葡萄の蜂蜜漬けとピーチティーを注文した。飲み物はいずれもアイスティーだ。

「まさかアイスティーがいただけるとは思わなかったな」

「まあ珍しいわね。この店は水属性の魔闘士が経営しているから、提供が可能なのよね」

フランは明るい笑みを見せる。それに対してリオは首を傾げる。だからどうして提供可能なのだ？ と疑問に思ったらしい。パティがその表情に気付き、簡単に理由を説明してくれる。

ここバーゼルに限らず、普段の生活環境で、魔闘士は勝手に魔法を使用してはいけない。魔闘士が魔法を乱用してしまえば、土地が枯れ人の住めない環境になってしまうのだ。

だからバーゼルのような治安の良い都市では、有能な警邏隊が魔闘士による魔法の無断使用が行われていないか、常に監視の目を光らせている。

しかしこの店のように都市から正規に営業用の魔法許可証を発行して貰っていれば、ある程度の魔法の使用を容認してもらえるのだ。冷えた飲み物が飲める店や、大量の湯を沸かす大浴場などは必ずこの許可証を取っている。

『精』は魔法を使用すると消費してしまいが、一方的に無くなってしまうものではない。その土地に『精』がある程度残っている限

り時間が経てば、回復するようになっていく。だから『精』が枯渇しないように、きちんと魔法の使用を管理すれば、土地の『精』が枯れるような事態は起こらない。こうやって都市や国は『精』の量をきちんと管理し、『精』が枯れないように魔法の使用を制限し、できるだけ庶民の生活環境が向上するように努めているのだ。

それは前大戦で学んだ教訓の一つでもあった。

そのおかげでフランは冷たい桃の紅茶が飲めるし、アリエルやパティは都市の大浴場で汗を流せる。

パティの説明が終わるのを見計らったかのように、運ばれてきたお茶と蜂蜜漬けを前にした一同は、眼を輝かせ、フルーツの甘い匂いを嗅ぎ、冷たく心地よいお茶で喉を潤す。

それは甘く楽しい一時になるはずだった。

なぜ彼女の耳に入ってしまったのだろうか。

『トラヴァーリで内乱だそうだ』

聞き間違いかと思った。

しかし、その言葉にフランは持っていたスプーンを床に落とす。

穏やかな空気が一瞬で豹変した。

そしてフランはすぐさま椅子から勢いよく立ち上がると、話していたウエイターを押しつけ、噂の主である口髭を蓄えたふくよかな男に詰め寄る。

「どういうことだっ!? トラヴァーリで内乱なんて!」

フランは丁寧な仕立て上げられた男のジャケットの襟を掴み、叫んだ。

男はかなりの裕福層に属しているのだろう。高価な衣服に身を包み、アヒルのような唇に脂ぎった顔、体型はまるで大粒のドンダリのように丸々としていた。その百キ口はあるつかという大男を、フランは今にも締め上げてしまいそうだった。

「お願いだ! 教えてくれ!」

「フラン、落ち着きなさい！」

パティが我を忘れたフランの手を男から払う。

「……くっ、……これはどういうことですか？」

男は床に倒れ、二、三回咳き込み肩で息をしながらフランを睨む。しかしフランはその目線に臆することなく、アヒル口の男を睨み返す。

「すみません、カネイラさん。連れが御迷惑を」

パティにカネイラと呼ばれた男はパティを見ると、見る見るうちに目元が崩れる。それは見事と呼べるほどの変わりようだ。

「……ん、ああ、バテイスタさんとこのお嬢ちゃんかい？」

パティは上品にコクリと小さく頷く。カネイラは渋い表情でわざとらしく蝶ネクタイを直しながら、椅子に座りなおす。

フランはまだ気が動転しているのか、頭を抱えている。

「こちらはマーク・カネイラさん。ここバーゼルで貿易商を営んでいるの。私の父とも交流があつて私もお世話になつたわ」

パティに紹介されたカネイラは、苦々しい笑顔で軽く会釈をする。確かに初見で胸倉を掴まれてはいい気分はしないことは当然だ。

それでもわざわざ笑顔を作つて挨拶してくれるあたりは商人としてのプライドだろうか、それとも単に人がいいのだろうか。

「フラン、とりあえずこれ飲んで落ち着こうよ」

アリエルは店の人から水を貰うと、フランに差し出す。リオは席でスプーンを口に含んだまま動かない。フランは頬に当てられたコップに気付き、アリエルに一礼して口に含む。青かった顔に少し血の気が戻ってきたようだ。カネイラの前に立ち、無礼を詫びる。

「先ほどは申し訳ありませんでした。カネイラ殿」

「彼女はトラヴァーリの出身なのです。先ほどのカネイラさんの言葉に思わず動転してしまって、よろしければお話を聞かせていただけないでしょうか？」

深々と頭を垂れるフランを、パティがとりなす。

「まあパティお嬢ちゃん頼みとあれば、お話ししないこともないの

ですが……」

カネイラはカップを人差し指でコツ、コツ、と突付き、尖ったアヒルのような唇がモゴモゴと語尾を濁すように喋る。眼は明らかにフランに向いている。

今度のそれは憎しみではなく、哀れみの視線。フランは口元を引き締めると、カネイラに頭を下げる。

「お願いします」

「では、とりあえずそちらの席に移りましょうか。そちらの銀髪のお嬢ちゃんはまだ食事中みたいですし」

そういうと、カネイラは重そうな体をよっこらせと言わんばかりに起こし、テーブルにあつた自分のコーヒーを片手に移動を開始する。そしてアリエル達のテーブルに来ると空いていた椅子にどかりと座る。その際に椅子の軋む音がしたが、高級感の漂う椅子は頑丈さもかねそろえている様だ。椅子はカネイラの重い身体を包み込むようにがちりと受け止めていた。

「それで何から話せばよろしいですかね？」

テーブルの上で両手を合わせ、カネイラが切り出す。

「トラヴァーリの情勢と、なぜ『内乱』という物騒な言葉がカネイラさんの口から出てきたのですか？」

パティはカネイラにまずトラヴァーリの状況を、それから内乱へ至った経緯を説明してもらえないかと、申し訳なさそうに頼む。

一刻も早く母国の内乱の理由を知りたいであろうフランには悪いが、アリエルも多分横で蜂蜜漬けから手を離さないリオも、おそらく順を追って説明してもらえた方が現状理解が早くできて助かる。そこら辺をきっちり把握した上で話を進めるパティは流石だ。

それを聞いたカネイラは低い咳払いを一つして口を開く。

「ではまずはトラヴァーリの状況から分かり易く説明致しましょう。その女騎士様は御存知なのでしょうが、この国は今情勢がとても不安定な状況です。それは二つの勢力が常に権力争いをしているからなのです。女騎士様の御家がどちらの勢力の御味方なのかはひと

まず置いておきますが、一つは正規の手続きの上、各国から統治を認められた正規軍なるものが存在しています。この正規軍がなぜ正規軍として各国に認められたのでしょうか。それには理由が御座います。まあ公の場で世間に公表されていますので、皆さん御存知でしょう。それはビッグ4の一角である法国家『ロマリエ』が背後にいたからなのです。彼らの後ろ盾の元、トラヴァーリは統治を試みました。が、ここで思わぬ落とし穴が」

ここまで言うと、カネイラは自分のテーブルから持ってきたコーヒを一口含む。もったいつけるようにゆっくりと口元へカップを運ぶ。

「レジスタンス勢力の出現ですね」

口を挟んだのはパティだった。

「そうです。この正規軍による統治を快く思わない連中が、トラヴァーリのあちこちで小さなテロ行為を行っておりまして。これがもう一つの勢力、反乱軍になります。彼は反乱軍という名前のわりにあまり大した活動はして無かったのですが。で、ここからが反乱の経緯となります。その反乱軍勢力が先日、大規模な反乱を起こしまして……。これは魔闘士試験が行われたことよって、正規軍が新たに魔闘士を補充する機会を与えなくなかった為に早期決起を行ったのでは、と私は見ております。彼らはこれ以上、正規軍が力をつける事に我慢ならなくなつたのでしよう。後、これは私の筋による情報で確かなものとは言えませんが、反乱軍勢力になんと『イングリド』が資金援助をしているらしいのです。そのせいか、即日鎮圧されるかに思われた反乱軍勢力は、一日たった今も鎮圧されず、都市で正規軍と争っているそうです。今は魔法による戦闘は発生していないようですが、もし発展するようなことになれば……」

土地が枯れ、国が滅ぶ……。

アリエルは無数の針で心臓を突き刺されたかのような痛みを感じた。

あの地獄のような光景が脳裏に蘇る。甘い果物の香りは腐臭へ、

清楚な店内は焼け野原のように……。想像するだけで鮮明にあの頃の記憶が脳内に映し出され、意識が薄くなっていく。

「そ、そんな馬鹿なことがあるわけないだろう……」

フランも完全に血の気を失った表情になっており、茫然自失になっている。カネイラの話が未だ信じられない様子である。

「魔法戦争になったらトラヴァーリという国は荒廃してしまうでしょうね」

パティの冷静で酷く暴力的な言葉が辛い。

「まあ反乱軍も正規軍も馬鹿ではないでしょうから、魔法戦争だけは回避しようとするでしょう」

「反乱軍側が和平に応じる可能性は？」

「残念ながら」

二人の会話で、状況がどんどんと鮮明になっていく。

「魔法戦争に発展する可能性ってどのくらいなのさ？」

「この情勢がそのまま続けば、十分にありえる話ですよ」

戦争回避というアリエルの希望はカネイラの声によってかき消される。

今は起きていない魔法戦争が、このままいけば起きてしまうかもしれない。そうなればトラヴァーリの人々が、路頭に迷うことになるのは間違いないだろう。権力者同士の醜い争い、利権の絡む対立国同士の闘争や、国力の低下による反乱。それらは前大戦が終わったから、絶えず民衆の周囲に漂い、嘲笑うかのように突然発生する。

昔、奴は私に微笑んだ。

そして、今回ターゲットになったのはフランだったのだ。

重い空気。その言葉に皆が俯き押し黙る。

そんな中でも、マイペースでスプーンをせっせと動かしていたりオが手を止める。

「土地の荒廃を防ぎつつ、魔法戦争を行う方法はもう一つだけある

……」

そのリオの言葉に、ハツとした表情を見せたのはパティ。テーブルを叩き、立ち上がる。

「そうよ……。何も魔法戦争に発展する可能性があるだけで、両軍はそうしたいわけじゃないわ。ならリオの言う通り『フラッグ』が行われる可能性が高いって事ね」

確信めいた笑みをリオにやると、彼女はスプーンを顔の横で正解と言わんばかりにフリフリと回すように振る。そしてパティの手元にあつた、まだ殆ど手をつけていない林檎の蜂蜜漬けに匙を向ける。パティはそんな食い意地の張つた少女に感嘆の息を一つ吐くと、蜂蜜漬けの器を滑らせるようにリオの前に持つていく。

「『フラッグ』なら土地を枯らせることなく、白黒つけられるわね」
「でもあれは魔闘士が少なくとも六人は必要……。反乱軍もそうだけど正規軍にそれだけの魔闘士っているの……？」

パティからせしめた蜂蜜漬けを頬張りながら言つりオの問いかけに、フランは目を伏せ気味に答える。

「残念ながら私を含め、戦闘に参加意思のある魔闘士は四人ほどだろう。反乱軍に何人いるか情報は定かではないが、恐らく『フラッグ』をやるつもりであるならば、頭数は当然揃えてくるはずだ」

フランの言葉から、彼女の家は正規軍に賛同しているようだ。そして魔闘士の数においては反乱軍に少し分がありそうである。

「じゃあ、『フラッグ』っていう案を反乱軍が提案してきたら、正規軍は応じられないじゃん！ どうすんのさ？ ていうか『フラッグ』ってそもそもなんなのさ？」

アリエルの発言に一同皆目を丸くする。

一呼吸置いてから、パティがアリエルの頭をパチンと激しく叩く。アリエルの頭部を襲った衝撃音は、店内で会話を楽しむ人々がその音にビクリと反応するほどに大きく響いた。

「いったあ〜！」

「アリーの疑問は最もだけど、その前に言いたいことがあるわ」
そして頭を抑え、涙目を浮かべるアリエルの首をキュツと締め上

げ続ける。

「アンタ、ホントに魔闘士？」

そう言ったパーティの表情は、アリエルの人生において五本の指に入るほどに怖かった……。

「……い、いちおう」

首を絞められて苦しい中、目を逸らし気味で回答する。パーティは首から手を離すと、もう一度ポカリとアリエルの頭を叩く。

「『フラッグ』っていうのは、魔闘士条約文九項に書かれている、魔闘士達による六対六の旗取り戦の事よ。前大戦のようにありつたけの魔闘士たちを投入して戦争しても、精が枯れきつた不毛の大地が残るだけでしょ。だから皆は考えたわけ。魔闘士たちが戦闘を行う場合において、大地を枯渇させずに決着をつける方法。それが『フラッグ』よ」

そこからフランがりレーのバトンを受けたかのように喋り始める。「この『フラッグ』に勝利した側の言い分を各国は認め、支援することを条文において誓うことになっている。勿論このゲームは双方合意の上で行われることが前提だがな。主に国家間の戦争の際に用いられるケースが多い」

そして説明をしながらも、フランは手荷物をまとめだす。

「ちよつとフランはどうするつもりなのさ？」

それをみたアリエルが問いかける。

「決まっている。一刻も早く国へ帰り、魔闘士として国を守る。今から行けばまだ間に合う」

荷物を背中に抱えフランは席を立とうとする。

「ちよつと待ちなさい」

引き止めたのはパーティ。

「今更あんたが行っても『フラッグ』は成立しないでしょう？ そんな体たらくでどうするつもり？」

パーティの言うとおりだ。確かに、今のフランはいつもの冷静さが欠けている。

「しかし黙って見ていることなど、私には出来ない。父の命も掛かっているんだ！ 人数が足りないのなら傭兵でもなんでも雇うさ、幸い金には困っていない！ 誰でもいいから、とにかくどうにかする！」

言っていることがおかしい。

国の、親の命が掛かってくるゲームに、どこの誰かも分からないような輩を雇ってゲームに望むというフランの考えは、完全に己を見失っている。もし雇った相手が敵方と通じていたら？ 味方が内通していたら？ そういった疑問を排除した、愚者の思考になっている。普段のフランであれば、きっとあのような発言はしないはずだ。

他人のことは冷静になって見ていられるが、自分の事になると、冷静さを保つことは非常に難しくなる。彼女も例外ではなかったらしい。

「アンタ、それマジで言ってるわけ？ 何処の馬の骨か分からない奴らを雇って、そんなメンバー構成で、本当に勝てると思ってるの？」

叩きつけるようにパーティが叱責する。フランは子供のようなふくれっ面で、顔を真っ赤にしている。

「だって仕方ないじゃない！ 一刻の猶予もないのにそんな悠長に人材選びなんて、出来るわけじゃないじゃない！」

そして堰が切れたようにフランは反論する。いつものような固い言い回しではなく、喚き散らす子供のよう。

「だって早く行かないと、父が、私の祖国が……。もう失い続けるのはイヤなの！」

両手で顔を押さえ、零れ落ちそうな涙を必死に堪えている。手の平で隠しきれない端正な唇はぐしゃぐしゃに歪んでいて、そこから嗚咽が漏れる。

これはあの時の私だ。

どうしようもなく、すがりたくて、助けて欲しくて、ただ涙を

流していた五年前の私。

しかし今の私はあの頃のように弱くない。

きつと彼女を助けてやれる、助けられる！

アリエルはそう心に決め、フランへ歩み寄る。

「じゃあ守らないとね」

そして、うな垂れるフランの肩にポンと一つ手を乗せる。

「……三千ルークで手をうつ。食費と旅費は別途請求で」

雇用条件を口に出したのはリオ。彼女も素っ気ないが、協力の姿勢をみせる。

「少なくともアンタを裏切らない友人が三人ばかり、ここにいるわよ。あら、偶然にも皆魔闘士の資格持ちだわ。これで十分『フラッグ』で闘えるんじゃないかしら？」

止めを刺したのはパティ。

この言葉にフランは完全に破顔してしまった。我慢に我慢を重ねた臉からは大粒の涙が溢れ、嗚咽は大きな泣き声に変わった。側にいたアリエルの腰に手を回し、わんわんと泣いた。そして周囲の視線に構うことなく、彼女達に何度も感謝の言葉を口にした。

そんなフランを気の毒そうな目で見ていたカネイラだが、店の外で赤子の鳴き声がすると「失礼、どうやら連れが見えたようです」と片手をあげ、申し訳なさそうに一礼すると、代金をテーブルの上に置くと居心地悪そうにそそくさと出て行った。

アリエルは我が家の前に立っていた。蜂蜜漬け店でカネイラと別れた後、アリエルとパティはそれぞれの家に戻り、家族の説得を試みようとしていた。

パティは見た目麗しいうえに、弁も立つ。パティの家は騎士の家柄である。彼女は家から教えられた騎士道精神を逆に上手に利用し、家族の説得になんなく成功するだろう。彼女の魅力的な容姿と語り籠絡しない人はいないんじゃないかと思う。

それに比べてアリエルは口も達者でないし、人を魅了できるような仕草は知らないし、容姿もこれといって褒められるところなどない。こんな自分が果たしてソーザを説得して、フランの元に駆けつけることができるだろうか。

しかしそれでも駆けつけなければいけない。彼女があんなになつてまですがり、助けを求めてきたのだ。それに応えなくて、なにが友だろう。彼女が命を賭けるなら、自身も命を賭して手助けしよう。心の中でそう決意し、ドアを開ける。

中ではソーザがコーヒー片手に椅子に座って読書に勤しんでいた。アリエルを見やり「お帰り」と一言いうと、視線を本へと戻す。アリエルはツカツカとテーブルに向かって歩を進め、ソーザの向かいの椅子に着席する。

「どうしたんだい？」

いつもなら真っ先に自分の部屋に入っていく。アリエルの不思議な態度に、ソーザが疑問の言葉を向けてくる。アリエルはごくりと唾を呑み、勇気を振り絞って口を開く。

「兄様、お願いがあるの」

アリエルの異質な物言いにソーザは本を置き、アリエルを見据え

る。そんなソーザに怯んではいけない。虚勢であることは見抜かれているが、アリエルは胸を張って応じる。

「サン・クレツセントを貸して欲しいの」

グリップに太陽と三日月のシルエットが刻まれた拳銃。いつもきちんと手入れしてある状態から、兄が大切にしていることは一目瞭然だ。そして、アリエルが拳銃を扱うきつかけになった銃。

小さい頃にその美しいシルエットに見入れ、いつか絶対に私が使ってやると決めていた。そして今がその時なのだ、と感じる。

「お願い。私の友達が、今凄くピンチなんだよ！」

その言葉を皮切りに、蜂蜜漬け店で起きた出来事を矢継ぎ早に説明する。

トラヴァーリの情勢

反乱軍と正規軍のこと

フラッグ戦における魔闘士不足

それに皆がフランに協力することを約束したこと

まくし立てるように説明を終えると、テーブルに置いてあったソーザの飲みかけのコーヒーをぐいっとあおる。

「だからあの子達を私に貸して欲しいの！」

カップを叩きつけるようにテーブルに置きながら、アリエルはソーザに懇願する。ソーザは腕組みし、物思いにふけたように渋い表情を見せる。

「俺は反対だ。どこに大事な妹をそんな危ない場所に送り出す兄がいる？」

それを言われると、耳が痛い。

でも、私は行かなければいけない。

「友達を見捨てるなんて、出来ないよ」

「俺は見捨てるさ。世の中には救済できる人と出来ない人がいる。

世界には個人がどんなに頑張っても、報われないことの方がはるか

に多い。フラン嬢ちゃんの置かれている状況は、それにぴったり当てはまる。彼女もなんで自分から死地に赴く必要がある」

兄から出る、耳を疑う言葉。厳しいところもあったが、基本的には優しい兄。そんな兄から出る苛烈な言葉は、アリエルの体内を轟々と熱くする。

「酷い！ そんなに自分の命が大事なの？ 友達が助けを求めているのに『見捨てる』なんてよく言えたもんだわ！ 私は見捨てないよ！ 絶対にフランを見捨てない！」

体内で堪えていたものを一気に爆発させるように言い放つ。それに対し、ソーザは飄々と反論してくる。

「友達を助けようとするのは良い事だ。俺も助けてあげたいよ。でもこれは一個人で手に負えるケースじゃない。俺はわざわざアリエルが傷つきに行くのを見たくないから、こうやって忠告している。俺はアリーを失いたくない」

『失いたくない』という一言が少し嬉しくも感じたが、それを言うなら私だって。。。

「私だってフランを失いたくない！」

「じゃあ、なぜ彼女がトラヴァーリに戻るのを止めなかった？」

その言葉に反射するように、身体が硬直する。

確かにフランだけを救いたければ、彼女をトラヴァーリに行かせなければ、それで終わる話なのだ。フランを無理やりにもバーゼルに留めて、内乱が終わるのを待てば良いのだ。兄の言うことはもつともである。

「そもそも、トラヴァーリの行く末はトラヴァーリの人々が決めるべきだ。アリー達がトラヴァーリの人達を救う必要もなければ、権利だってない」

自分達の国の進路は自分達で決定するべきだ。それが最初は『反乱』だとしても、後に『革命』へと言葉を変えることだってあり得るのだから。それが時の支配者に都合良く書き換えられた歴史だったとしても。

兄の言うことはつまりそういう事だった。

「でも私はフランを見てきた……。兄様の言う通りにすればフランは助かるよ。でも」

それでもアリエルの意思は覆らなかった。

フランが助けを求めた時の、あの切ない表情。目も鼻もぐしゃぐしゃになりながら、しがみつき、恥も外聞も捨て頼ってきた。そう、彼女は兄の言う通りにすれば救えるかもしれない。

でも、でも

「でも、それじゃ彼女の心は救えないよ！ 私はフランの辛い顔が見たいんじゃないの！ 少女のように無邪気に笑っている彼女が見たいの！」

生き延びて母国がぐちゃぐちゃになっていく様子を異国の地でただ呆然と見つめる沈んだ彼女なんか、私は見たくない。

「もういいよ！ 兄様が反対しても、私はフランを助けに行くから。銃なんて代わりはあるもん！」

アリエルはそう言い捨てて、アリエルは足早に自分の部屋にむかうと、急ぎ荷造りを始める。

もう家にはいられない。あんな事を言ってしまった手前、もう戻ってはこれない。

使い慣れて角の丸くなった古臭い机も、寝心地の良かったお気に入りのベッドとも別れを告げないといけない。これから私は自立して生きていくんだ。そう決心して、寝袋や僅かばかりの生活雑貨と手銭を荷袋に詰め込む。

兄から十三歳の誕生日にもらった向日葵のヘアピンも、市場通りで一目惚れして二か月分の小遣いをはたいて買ったお気に入りの手鏡も、無造作に袋に詰める。その一つ一つにこの家で暮らしてきた大切な思い出がまつっていた。

「ごわごわになった荷袋を担ぎ、ドアを開ける。アリエルの視界は滲み、もうまともにこの家の中を見ることが出来なくなっていた。

居間には人の気配は無かった。ソーザは用事でもあってどこかへ

いってしまっただろうか。それとも阿呆な妹に愛想を尽かしてしまっただのか。

この滲んだ視界では、慣れ親しんだ我が家を記憶に残しておけないじゃない。

そう思っただけでアリエルは目元を拭う。するとキッチンのテーブルに置かれたあるものが目に飛び込んできた。何度か目を擦って確認してみたが、それは間違いなくあの拳銃だった。それぞれに太陽と三日月の美しいシルエットが刻まれた拳銃。

「なんでこれが……？」

テーブルに近寄ると、銃に挟まれた紙を見つける。そこには殴り書きのように一文が書かれていた。それを見た瞬間、アリエルの瞳からポツリとひとしずくの涙が落ちる。

『絶対に返しにもどってこいよ　兄より』

アリエルは荷袋をテーブルの上にとかりとおろし、中身をばら撒く。その中から本当に旅に必要な物だけを迅速に選択する。

ヘアピンや手鏡なんか旅の邪魔だ、必要ない。

私は友達を助けてさっさとこの家に戻ってくるのだから。

再度真っ赤な目元をゴシゴシ拭う。

「視界は良好！　準備万端。さあ行くぞ」

アリエルは丘を下る。

散らかしっぱなしのテーブルの上の雑貨は、あの優しい兄がきちんと片付けてくれるだろう。

家を出てから、アリエルは都市の外門の前でパティと合流した。

フランは本人の希望もあって、リオを連れ立ってトラヴァーリへと一足早く出立した。

「よくソーザさんを説き伏せられたわね」

十字柄の大きなバスタードソードを背中につけたパティが、案の定そう聞いてくる。彼女の聖職者のような白いコートと背中 of 得物

が不釣合いすぎる。

「説き伏せられるわけないじゃん。まあ、納得はしてくれなかったけど、許してはくれたみたい」

アリエルは太ももに巻いたホルダーを見せて、にこりと笑う。

「へえ、銃も貸してくれたのね。ホント、たまげたわ。上出来じゃない」

眉をあげ、珍しく感心した表情でパティが手放して褒める。

「でも最後まで反対されちゃったよ……。銃、絶対返すように、って書置きはあつたけど」

「ふ〜ん、じゃあ大丈夫でしょ。私達は絶対生きて、またこの場所に帰ってくるんだから。なんの問題もないわ」

この相棒の発言には、いつも勇気付けられる。

毛先に少しウェーブのかかった美しい髪と光の灯った強固な瞳は、いつ見てもとても頼りになる。本当に男じゃなくても惚れてしまいそうになる。

「パティが相棒でマジ助かったよ〜」

そう言いながら、思いつきり彼女の背中を叩く。

込めた思いは感謝と照れ臭さが半々で。

「なによ、痛いわねえ」

背中を擦りながら、睨んでくるパティにアリエルは苦笑いで「ごめんごめん」と謝罪する。

二人で外門を抜け、広大な大地へと足を踏み入れる。

都市の周辺からトラヴァーリまでは分かり易い一本道である。というのは、バーゼルとロマリエを結ぶ街道の途中にトラヴァーリがあるからだ。だから、幼い子供でも迷うことはない。街道の周辺は見通しの良い草原地帯が続いており、気候も穏やかで人の往来も頻繁にある。所々で休憩所も存在し、治安も人目の多い昼間に移動して、夜はきちんと休憩所の宿に宿泊すれば、女子供の旅でも問題ない。軽装でも十分走破可能な旅程である。

バーゼルからトラヴァーリまでは二十里ほどの距離、通常二日間

もあれば到着できるが、今はそんな余裕はない。二人は一刻も早くトラヴァーリへ向かうために、小走りで街道を駆け出した。

16 約束と決意

夕方の商業区は、午後の繁忙時に突入していた。昼間は閑散としていた通りも、今は買い物カゴを片手に、店を転々とする婦人達が多くいる。そんな彼女達の気を引こうと、店頭では丁稚の小僧達が大声で客寄せをしている。目の前の露店では若い女性が店主に川魚の値を下げようと、鼻息荒く交渉している。貫禄のある店主を相手に果敢に挑む若妻の姿に、街の平和を感じる。

そんな主婦と店主、小僧達の活気のいい声を聞きながら、ソーザは家路を急ぐ。

賑やかな商業区を抜け、麦畑の広がった畦道へ入る。

真つ赤に染まる麦畑と、臉の奥まで吹き抜けそうな風が心地いい。この静かな風景も、賑やかな街中も、いつからだろうか、悪くないと思うようになった自分がいる。

長い一歩道を暫く歩くと、畑が草むらへと変わり、小さな丘が見えてくる。その丘の上にある小さな我が家も、ここに来てようやく確認できた。

妹はもうこの都市を出発しただろうか。事態は思っていた通りヤバイ状況だった。しかし自分がいくら忠告しても、脳内が感情のみで構成されているあの妹には通用しなかった。魔闘士試験を受験する時もそうだったように。

だからこそ大切な妹を救うために自分ができることをやる必要がある。それを成す為に、俺は妹の後を追うしかない。本当は無理にでも止めたかった。しかしそれが出来ないことも知っていた、だからあの銃を妹に渡したのだ。せめて自分のいない間、彼女が妹を守ってくれることを信じて。

小屋に入ると、キッチンのテーブルに置いてあった銃は無く、代わりにアリエルの小物が散乱していた。それらをアリエルの部屋の

棚や机に置くと、ソーザは自分の部屋へと入り、クローゼットから黒のシャツと外套、タンスの中から黒のズボンをだす。

「全く、手のかかる妹だよ。誰に似たんだか……」

肩を窄め、誰もいない部屋で独り、着替えを始める。

「約束はきつちり果たすさ、そうだろ……」

さて、厄介事はさつさと片付けるか。そう思い、ソーザはやれやれと重い腰を上げることにした。

絶望とは正にこの事を言うのだろう。目の前で崩れ落ちている友人にかける、慰めの言葉をわたしは持ち合わせていなかった。仮にわたしが弟を失ってしまふと考えたら、ゾツとする。そんな事など考えたくもなかったが、実際にわたしの目の前で似たような出来事が起きている。

わたし達がトラヴァーリに到着した時、正規軍と反乱軍の武力衝突は激しさを増し、民衆は家に引きこもり、通りに人の気配は全く無かった。中にはすでに国を見限り、国外へ逃亡を図る者もいたようだ。石造りの家屋は銃弾で削れ、収穫間近だった麦が無残に焼かれ、踏み潰されていた。辺りは火と死の匂いが漂う地獄と化していた。

わたし達はそんな荒れ果てた市街を駆け抜け、フランの屋敷へと走った。

そしてフランを待っていたのは哀しくて、とても辛い現実だった。彼女の屋敷は焼かれることもなく無事だった。立派な門構えをした朱色の屋敷、一目で裕福だとわかる佇まいたたずまいに、わたしは呆然とした。しかし立派な屋敷は無事でも、彼女の父親が無事である保障はなかったらしい。家に入るなり従者がフランに告げた報告は、彼女を深い崖に突き落とした。

彼女の父は公館での職務中に突然反乱軍の襲撃を受け、逃げる暇

も無く凶弾に倒れたそう。フランが屋敷に戻った時、既に冷たくなつた父の遺体が彼女の眼前にあつた。

ベッドに寝かせられた父にしがみついた彼女は、脇目もふらず声を上げて泣いた。

わたしはこれ以上、彼女の泣き顔は見られなくなった。

フランに悟られぬよう、静かに背後のドアを開け廊下に出る。

フランの屋敷はそれなりに広くて、2階建てのこの屋敷には十数個の部屋があつた。内装も優雅なカーテンや、わたしのような者にもわかる趣のある絵や花が随所に飾られていた。リオはそんな雅な廊下を進み、階段を下りてホールへと出る。

もう無理だ。フランには悪いが、おそらく彼女の心は完全に崩壊してしまつただろう。わたしがディエゴを失つてしまつたら、きつと壊れてしまうから。だから、もうここにわたしがいる意味はないだろう。途中見た、瓦礫の山と荒らされた田畑。この国はもう終わつてしまつている。これ以上の長居は無用だ。アリー達が到着したらフランには悪いが、わたしはスーペルへ帰らせてもらう。彼女はわたしにとって大切な友人であるが、わたしは命をここで捨てるつもりは毛頭ない。

リオがホールの壁に寄りかかり、今後の身の振り方を思慮していると、玄関口から聞き覚えのある声がした。

「あの、誰かいませんかあー？」

ドアを叩く女性の声は、少し上ずつていた。

リオは玄関口に歩を進めると、扉を開く。そこには肩で息をするアリエルとパティの姿があつた。

おそらくバーゼルからここまで、ずっと走りっぱなしの状況だつたのだろう。そんな彼女達を屋敷内へ入れる。しかし、リオは彼女達に哀しい事実を告げなければいけなかつた。

「……折角来てもらったのに、無駄になつたみたい」

その台詞にアリエルは首を傾げる。

「無駄つて？」

「フランのお父さん、亡くなったの……。今フランは二階で最後のお別れを……」

「そ、そんな……」

「間に合わなかったわね」

アリエルは呆然と、パティは歯がゆさそうに親指の爪を噛む。

「で、あんたはどうするつもり？」

パティはわたしの思考が読めるのだろうか。実際に彼女は頭が切れるし、わたしの雰囲気と表情でそれなりに察したのかもしれない。

「もうこの国は終わってる……。これ以上ここに留まるのは危険。多分、フランは立ち直れない……」

彼女の質問にリオは考えていたことを簡潔に述べた。パティはその台詞にやれやれと肩をすくめる。

「へえ、あんたはフランを見捨てる訳ね」

「本人に生きようとする意思が無いだけ……。そんな人に協力するほど、私は出来た人間じゃない」

挑発的なパティの言葉に、反発するように返す。

しかし、そう言ったところで両肩に激しい衝撃を受ける。

見ると、アリエルが鬼のような形相で睨んでいるではないか。

「アンタはそれを本人に確認したの!? フランが諦めたの!？」

フランはそんな弱い人間じゃない! 勝手に自分の物差しで人を量るな!」

リオの両肩を壁にめりこませんばかりに突きつけ、アリエルが怒声を上げる。普段の彼女からは想像できないほど激昂している。しかし、わたしだって考えている。

「……わたしだって彼女が救いを求めるのなら手助けしてあげたい。でも彼女の境遇を考えれば考えるほど、それを望む事が厳しい」

フランは心の支えが亡くなったのだ。父親のいない国は、彼女にとって必要なのだろうか。守る者のいない世界で彼女の存在意義はあるのだろうか。彼女は自分の事をどう考えているのか。少なくとも、わたしは弟のいない世界に意味はないと考える。

「だあかあら〜！ それはあんたの考えでしょうが！ 私はフランがいつ私達を拒んだかって聞いてんの！」

感情のまま押し付けたリオの小さな身体が悲鳴を上げそうになる。それを見かねたパーティがアリエルの背後に立ち、羽交い絞めで御す。

「はいはい、そこまで。今は彼女も辛いでしょうから、少し時間をずらして尋ねましょ」

「その必要はないよ」

すると、階段の上からフランの声がした。少ししゃがれた声だった。なんと声を掛けていいか分からずわたしは彼女の次の言葉を待つ。

アリエルとパーティも動かない。

すると、フランはゆっくり階段を下りる。

「アリーの大声が聞こえてな。まずはすまない、急ぎ駆けつけたが、父は既に反乱軍に殺されてしまっていた……。街中を見てわかるとおり、今も正規軍と反乱軍は血みどろの醜い内戦状態にある」

臉は腫れて鼻も赤い。そう話す彼女はとても痛々しく思える。気丈に振舞っているのが、嫌というくらいわかる。そう、彼女の心はもうぼろぼろなのだ。

「しかし、まだ国は消えてはいない。私の守りたい人が守りたかったものがまだ残っている！」

そこでまた彼女の頬を涙がつたう。声は振るえ眉は険しく、必死に泣き顔を堪えている。

「私はそれを守りたい！ だからすまない！ 私を助けてくれ」

その言葉にわたしは下唇を噛む。

なんとという思い違い。フランはフランであって、わたしではないのだ。アリエルの言ったとおりだ。彼女は本当に強い人だ。大事な人を失い、心はスタスタに切り裂かれているのに……。私は絶対にこうはなれない。今までこのように友を信頼し、真直ぐに思いを遂げようとした人間をみたことが無かった。

この瞬間、リオはアリエル達に強烈な憧れを感じた。そしてリオ自身、彼女を信用していなかったのではないかという、恥じる気持ちも同じくらいに。

「……フラン、ごめんなさい。わたし……正直もう駄目だって思った」

「いいんだ。実際、挫けそうになったのは事実だから。こちらこそすまなかった」

リオの謝罪にフランも謝罪で返す。

「それで、もう大丈夫なわけ？ あんまり暗いまんまだと上手くいく事も、上手くいかなくなっちゃうわよ」

「そうそう、悲しい時は思いつきり悲しまないと後で後悔するかもよ。まああんまり時間かかっちゃうといけないけどね」

「すまない、でも大丈夫だ。これ以上、くよくよしている場合ではないし、父もそれを望まないだろう」

フランは目元を指で拭うと、二人をビツと見据える。その瞳には強い光が灯っていた。

「ならいいわ、それじゃあ詳しい話聞かせてくれる？ 来たばかりで、いろいろどうなってるのか知りたいから」

「こちとら兄様の反対を押し切つてまで来てるんだよ。『何も出来ませんでした』じゃ、合わせる顔がないよ」

三人のやり取りを傍で見ていて、リオは思う。遠慮ない会話をする彼女達が眩しくて堪らなかった。

しかし、わたしもフランの友人だ。その友人が助けを求めているなら、わたしは全力で協力しよう。もう二度と、わたしは友を量らない。そして、彼女達と対等に肩を並べて共に歩んでいきたいと思った。

「……わたしも、頑張るよ」

決意を小さく発した、リオの言葉に、フランは口元を緩ませる。

「ああ、頼むよ親友達。じゃあ二階の応接間に行こう。そこで今後のプランを考えようか」

『親友達』、フランの口から出たその言葉が、リオの心の中に、深く染み入る。その言葉は例えようもないほど嬉しく、そして重みのある言葉だった。リオはアリエルとパティの隣に並ぶと、フランの後に続いた。

案内された応接室に入ると、短髪赤毛の女性と禿頭の大男が待っていた。フランは彼らに軽く会釈すると、アリエル達に席に座るよう促した。部屋には大きな長方形のテーブルがあり、両サイドに七八人は座れる位の長椅子が設置されていた。フランは赤毛の女性の隣に腰を下ろし、アリエル達はその向かいに座る。

「まずは彼らを紹介しよう。彼女はビセンテ・ロンド。魔闘士として建国当初からこのトラヴァーリで警備を担当している」

「ロンドです。よろしくね、お嬢ちゃん達」

フランに紹介された赤毛の短髪女性はウイंकを一つ決め、気さくな物言いで自己紹介をする。見た目は二十代半ばから後半くらいだろうか、陽気な中に成熟した女性の雰囲気を感じさせる仕草に、アリエルは思わず硬直する。

「で、こちらがコーラー。土属性の魔闘士だ。傭兵として今回の戦いに参加してくれている」

「コーラーだ。よろしく頼むぞ」

こちらはロンドとは正反対に、堅苦しそうない方で禿頭を下げ、日に焼けた肌は、盛り上がった筋肉をより際立たせている。年齢は三十を間違いないく越えているとわかる、おっさん顔である。その風貌から、口調とは裏腹に暑苦しそうな印象を受ける。

「貴女達も自己紹介をお願いできるか？」

アリエルはフランの言葉に頷き、腰を上げる。

こういう事は率先して一番手を名乗るようになっている。これは自分の考えだが、自己紹介の一番手は相手の印象に残りやすいイメージがある。

「私はアリエル」コースター。友達の窮地を知って助けにきました！ よろしく！」

右手を敬礼のように高々と挙げ、宣誓するかのようになり、声を張り上げて挨拶する。

「パトリシア」バティスタです。私も微力ながら彼女の手助けを出ればと」

アリエルの子供のような挨拶とは正反対。謙虚で礼節をわきまえた言葉でパティは言う。

よくもまあ、そんな言い回しを思いつくものだと感じる。

「リオ」メツシエルダーです……。よろしく」

「彼女達は私の友人であり戦友だ。今回傭兵として、反乱軍との戦いに参加してもらおう事になった」

リオの名前だけの紹介の後にフランが補足を付け加える。

「今回はこのメンバーで『フラッグ』を闘うことになる。ロンドさん、今の状況はどうなっていますか？」

「こちらの『フラッグ』の申請に伴って、反乱軍の動きは現在鎮静化しています。おそらく反乱軍はこれを受けるつもりで『フラッグ』の準備をしている為と思われます。『フラッグ』については後数刻で魔闘士協会の認可が下りるものと思われますので、反乱軍はそれまで活動を行わず、表立って動くことはないかと」

ロンドが抑揚の無い声で、淡々と説明を続ける。

「もう一つ、裏切ったルイフェの事ですが、どうやら反乱軍側のスパイだということが発覚しました。おそらく『フラッグ』においても彼女が顔を出してくるものと思われます」

「ルイフェって？」

アリエルは、ロンドの話の中に出てきた見知らぬ人物について尋ねる。

「そうね、お嬢ちゃん方は彼女の事はわからないわよね。彼女は建国当初からの正規軍警備隊長の一人だったの。でも、この内乱のタイミングで反乱軍に寝返っちゃったの」

さっきまで丁寧だったロンドの口調が挨拶の時のような、くだけたものへと変わる。あまり堅苦しい喋り方は好きではないようだ。

「彼女は正規軍の中でも一番の魔闘士だったんだがな。それだけに、この裏切りはこちらにとって致命傷になった。彼女の裏切りによって、頭のいなくなつた警備隊は壊滅状態、反乱軍の鎮圧が一向に進まなかつたのは、これが原因といつても過言じゃない」

続けるように口を開いたのはコーラー。

「白豹」

「白豹？」

呟いたのはパティ。

そして復唱したのは、アリエル。

「ああ、よく知っているな。それは前大戦での彼女の通り名だ。疾風のごとく戦場を駆け巡る、絹の様に白く透き通つた肌をした美しい女豹。彼女を人々はそう言った」

「その大物さんが裏切つたことが、一番問題なのよ。そのせいで私達は、定員ギリギリの状態でゲームにのぞまなければいけなくなつたわけ。これが意味すること、判るわよね？ お嬢ちゃんたち」

先輩魔闘士の二人が『白豹』について簡単に解説してくれる。

要は『フラッグ』が始まれば、正規軍に闘える魔闘士が六人しかないという事だ。

負傷した味方は交代することも出来ず、ゲームを続けなければならぬし、負傷者がチームの足を引っ張ることも十分考えられる。死亡した場合は最悪だ。交代による人数の補充は望めず、数的不利がチームを苦しめる。これくらいはアリエルにも理解できた。

「それで『フラッグ』の開催ですが、ロマリエの主導の下、二日後開催予定で進行しています。先発メンバーの登録表は、明日中にトラヴァーリ魔闘士協会支部に提出との事です。以上が報告となります。又、交代メンバーの登録は特に規定はありませんので」

話し終わると Rond が軽く伸びをして肩を鳴らす。やはり格式ばつた喋り方は苦手だったようだ。 Rond はテーブルに置かれた胡桃を手にとって殻を割ると、口に放り込み、ボリボリと音を立てて食す。普通に見れば、女性が恥じらうような食べ方だったが、彼女が

やると下品には見えず、逆に堂々とした態度は秀麗で絵になる。

「まあとりあえず。今私達は出来ることなんか全くありません。ゲームが成立すれば、反乱軍側と戦うだけ。メンバー構成はフラン嬢と私に全権がゆだねられているから、この面子で出場する事に問題ないわ。なにか質問は？」

ロンドの腹を割ったような話し方に、一同は首を振る。もうゲームの成立は決まったといってもいい。そしてメンバーも、今いる面子でどうにかするしかない。アリエル達は政治的な駆け引きや、机上の論争をやりに来たわけではない。元々『フラッグ』が行われた場合に限り、助っ人のつもりで駆けつけた。ゲームが決定的な今、先ほどの説明で十分である。

しかし……これは聞いておかなければ。

ゲームの開催が決定的になり、張り詰めた緊張感の漂う中でアリエルは手を挙げる。

「あのく、『フラッグ』のルールって知ってますか……？」

アリエルは恥を忍んで、信じられない発言をぶちかます。

つい最近まで、魔闘士試験の筆記対策をアリエルに散々指導してきたパーティが、額に青筋を浮かべる。ロンドとコーラーは目を丸くさせ、リオとフランはまたかと言った感じで、苦笑している。

「あんたは……、なんで忘れてんのよ……！ このアンポンタン！」
パーティは大きな怒声と共に、アリエルの顔面へ魔闘士手帳を投げつける。

「明日一日、それ見てちゃんとルール覚えなさいよ！ いいわね！ みっちり教えるから覚悟しなさいっ……！」

顔面でそれを受け止めたアリエルは、横目でリオとフランに助けを求める。しかしその視線は見事に逸らされてしまった。

『フラッグ』におけるルール説明

一、ゲームは15分の前半戦と後半戦に分けられた六対六のチーム戦となる。又、補欠要員として追加二名を認める。補欠はゲーム中、プレイヤーが怪我もしくは死亡した場合と前半戦と後半戦の間における休憩時間（五分）の時のみ、交代を許可する。

二、ゲームを行うフィールドは審判を派遣する国家が定める事とする。尚、上記の国家は対戦する国家間とは中立であることが条件である。但し、国家間同士でなく自国内でのフラッグ戦の場合は協会の認可があれば、自国以外の国家であればよい。

三、フィールドは全体を十二分割とし一分割の広さは三十平方メートルとする。分割は縦に右サイド、中央、左サイドと三列に分割され、横に自軍一段、二段、敵軍二段、一段と四段に分割される。

四、『フラッグ』における勝敗 勝敗は敵軍（自軍）に設置された旗の破壊によって決まる事とする。旗は敵軍（自軍）の右サイド、中央、左サイドの一段に一本ずつ配置される。サイドの旗を破壊することで一ポイント取得、中央の旗を破壊することで三ポイント取得とする。このポイントが多いチームの勝利となる。又、時間内に旗が全て破壊された場合、その時点で勝者が決まりゲーム終了となる。

五、ゲームに出場するプレイヤーはアタッカー、プレイメイカー、ディフェンサーに分類され各々のポジションに最低一人はプレイヤーを配置しなければならない。

六、『アタッカー』説明 アタッカーとサイドアタッカーにさらに分別される。アタッカーはフィールドにおいて、自軍二段、敵軍一段、二段における全てのフィールドでプレイできるものとする。サイドアタッカーは右（左）サイドに配置されたアタッカーを指す。この場合プレイできる範囲は配置された右（左）サイドにおける全てのフィールドでプレイできるものとする。又、サイドアタッカーは自分の配置されたサイドフラッグの破壊に味方が成功した場合、敵軍一段中央エリアでのプレイが可能となる。

七、『プレイメイカー』説明 プレイメイカーは十二エリア全てのフィールドでプレイが許される唯一のポジションである。但し、このポジションは一人しか配置できない事とする。

八、『ディフェンサー』説明 ディフェンサーとサイドディフェンサーにさらに分別される。ディフェンサーは自軍一段、二段における全てのフィールドと中央敵軍二段フィールドでプレイできるものとする。又、敵軍のサイドフラッグの破壊に味方が成功した場合、中央エリアにおける全てのフィールドでプレイが可能となる。サイドディフェンサーは右（左）サイドに配置されたディフェンサーを指す。この場合プレイできる範囲は配置された右（左）サイドと自軍一段における全てのフィールドでプレイできるものとする。

九、指定されたフィールド以外でプレイをしたプレイヤーは警告となる。警告は二回受けた時点で、そのプレイヤーはゲームから退場となる。又、退場となったプレイヤーは交代対象にはならない。

十、ポジションの変更は休憩時間の時のみ変更可能とする。それ以外での変更は認められない。

十一、同点のまま店制限時間を迎えた場合は、五分間の休憩を挟み、サドondes戦を行うこととする。サドondes戦は時間無制限とし、どちらかのチームが、残存した旗のいずれか一つを破壊した地点で勝敗を決するものとする。

「以上が『フラッグ』の主要ルールよ。理解した？」

昨日の無知な発言から一日が経ち、パーティに付きつ切りでルール内容について受講したアリエルは放心状態となっていた。

「脳が……、脳が飽和してる……」

うわ言のように呟きながらも、魔闘士手帳を片手にルールの把握に努める。

大まかなルールは先ほどパーティの言った通り理解したが、ポジションごとの細かな規則も多くあり、これがまたややこしい。一度はきちんと記憶したはずなのに、時間が経つところも忘れてしまうものなのだろうか。そんな自分の覚えの悪さを激しく嘆く。

「あんたも大事な戦力なんだからしっかりするのよ。さっき言った箇所は空で言えること」

「やっぱそうだよね……？」

「当たり前でしょーが、もうその発言が信じられないわよ。自分の担当は勿論、他のポジションの範囲もきっちり覚えなさいよ」

パーティは目を吊り上げながら、当然の要求をしてくる。

昨日、応接間での情勢の説明後、アリエルのルール理解は後回しにして皆でポジションの適正を話し合い、各々の担当ポジションを決定した。

結論から言うと、お互いの連携力のあるパーティとアリエルがアタッカーをやることになった。そしてプレイメイカーは、メンバーの中で経験豊富なロンドがやることになり、ディフェンサーは左サイドディフェンサーにフラン、右にリオ、そして守備の要である中央

にはコーラーが担当することになった。

アリエル達の仕事は旗の破壊に徹すること。しかしアリエルの魔法と武器では、相手を牽制することくらいしか効果がない。それならば、火力のあるパーティが相手ディフェンサーを引きつける。アリエルはパーティの援護をしながらも、相手の隙を見て旗の破壊にかか

る。
『フラッグ』において、風属性は守備にも攻撃にも秀でた属性ではないので、正直に言うとな風属性の魔闘士は『フラッグ』には参加しないのが常識となっている。そんな中、風属性であるアリエルの出来ることは、牽制と旗の破壊くらいしかないだろうという事になった。

「あゝ、おつむも腕も頼りなくて申し訳ないよう……」

事の重大さもあり、余裕のない自分がとても情けなかった。が、隣にいる相方はそうは思っていないらしい。アリエルの旋毛つむじの辺りにコツンと一つ拳骨を落とすと、

「あなたさ、私の言葉聞いてた？ 私はあなたの事『大事な戦力』として頼りにしてるのよ。ホントにしつかりしないとぶつわよ」

「もつぶってんじゃん……」

「しつかりしてないからよ」

私が弱気な時、パーティはキツイ言い方ではあるが、いつだってこんな風に私を叱咤激励してくれる。小さい頃からの腐れ縁で、どんな時でもいつも隣にいてくれる。しょっちゅうおちよくられたりもするけど、基本根っこは良い女。

そんな相棒の期待に背くわけにはいかないじゃない。

アリエルは唇の両端を上げて、元気のいい明るい笑顔をパーティに返す。

私はあの頃の私じゃない。きつとこの戦いに勝利して、皆で笑おう。そう思いながら手元の手帳に目を戻す。

17 「フラッグ」 アリエルとパティ（後書き）

やっと三分の二くらいです。

どうかももう少しお付き合い願います。

コン、コン、コン。リオは部屋の扉をノックする。扉の向こうから「どうぞ」と短いが、はっきりと声が返ってきた。静かに扉を開けると、机の上に山のように積まれた書類と格闘しているフランがいた。

「おお、リオか。どうした？」

フランはリオのほうをちらりと見ると、机の上の書類を整理し始める。どうやらリオの為に、今やっている仕事を一時中断してくれるようだ。

そんなフランに、リオはいたたまれない気持ちになる。

「……………どうして、フランはそんなに気丈に振舞っていられるの？」
思っていた事が、つい口からこぼれていた。フランはその言葉を聞くと、椅子に座ったまま肩をすくめ「変か？」とリオに問う。リオは小さく頷く。

「だってお父さんが亡くなったのに、大事な人がいなくなっちゃったのに……………。私は弟が死んでしまったら生きていられない。生きていく意味が無い……………」

リオがそう言うのと、フランは寂しげな笑みを浮かべ、机の上を指で滑らかに撫でた。

「そうだな、私もそう思っていた時期が、短かったが確かにあったよ。幼い頃に母を亡くし、父一人一人の家庭だったから、余計に辛かったのかもしれない……………。この机だって父が私の為に作ってくれた、大切な思い出の机なんだ。建国したばかりで忙しい身にも関わらず、仕事の合間に仕上げてくれた手作りの机だぞ。普段は物静かで素っ気無い父だったが、時折見せてくれる優しい笑顔が、私は大好きだったよ。そんな父が身を粉にして維持してきた国を私は守

りたい。父は救うことが出来なかったけど、せめてこの国だけは救いたい」

リオは言葉が無かった。

気丈なんかじゃない。フランは父親の生きた証を消したくなかったのだ。トラヴァーリという国の建国に尽力した父親は、この国ではかなりの功労者なのだろう。しかし反乱軍によってこの国が蹂躪されてしまえば、そんな功績は相手の好きなように書き換えられてしまうだろう。歴史は勝者によって、簡単に上書きされてしまう。彼女はそんな輩から父の功績を守る為に今も頑張っている。涙を抑え、目の前の問題に顔を上げて立ち向かっている。

「……ゴメン。わたし、フランの事もう駄目だって……。見捨てようとして……。わたしの基準でフランのこと、勝手に決め付けて……。一言きちんと謝りたかった」

それだけ言うのが精一杯だった。

すると、フランはリオの側まで歩み寄ってリオの肩をがっしりと掴む。

「そんなことはない。私こそリオ達がいなければ、とうに駄目になっていたさ。貴女達がいてくれたから、私は私であることが出来たんだ。魔闘士試験の時だって、リオがいたから合格できた。『フラッグ』だってアリーやパーティがいなければ、ゲームの成立だってなかった。皆がいたから私は頑張れる。まだ浅い付き合いだろうが、私は貴女達を親友と決めた。これから先、何が起ころうとも、これはもう絶対なんだ」

力強く拳を握って宣告をするフランに、リオは感嘆した。リオは頬を緩ませる。

そして、フランをギュッと抱き寄せる。

「わたしも、フランは親友……。アリーもパーティも皆好き。わたしは皆を信じるの、もう絶対決めた」

リオはそう言って柔和な笑顔で返すと、フランは顔を赤らめてしまった。

「あ、明日は勝とうにやっ！」

「にやっ？」

フランは恥ずかしさを取り繕う為に発言した言葉を噛んでしまったようで、羞恥心に拍車がかかってしまい、完全な茹蛸状態になってしまった。しかし、リオはそんなフランに「うん」と笑いながら、はつきりと頷いた。

「じゃあ、明日使う武器を選びたいの。わたしに適性のある武器について、フランからアドバイスが欲しいの。いいかな？」

リオが故意に愛くるしい表情をしてみせると、フランは上体をフラフラさせながらも、懸命に首を縦に振った。そして動揺するフランを見て、思う。

わたしもパティ達のように多少は魅力があるのだろうか？ スーペルに帰ったら、もう少し愛想良く振舞ってみよう。まずはパン屋の旦那に試してみよう。いつも以上におまけが付けば確信とする。

こんな時に馬鹿みたいな事を考えているのは、あの能天気な親友の影響なのだろうか。リオはフランに気付かれないように声を殺しながら笑い、彼女の手を取って部屋を出る。

19 フラッグ

決戦当日、辺り一面が見渡せる荒野にアリエル達はいた。所々背の低い傘のように葉を広げた木が立っていて、その周辺には草花が転々と生えている。

『フラッグ』を行うフィールドは白線でエリア毎に仕切られている。

各チームの自軍一段目の各エリアには、上部に三角形の布をなびかせたフラッグが地面に突き立てられている。このフラッグが国の命運を左右する。

旗はぱたぱたと揺らめき、先行き不透明なこの国の状況を表しているように見えた。

「まさか、これだけの戦力とは……」

長椅子に座り、メンバー表を見たコーラーが絶句する。

「ルイフェだけじゃなくてエステシオまでいるわね……。プレイメイカーはホアン……。しかも中央のディフェンサーにはサミー・アツピアとはね。これは『イングリド』が背後にいるって話もいよいよ本当かも」

ロンドはそう言い放ち、メンバー表をフランに渡す。やや放り投げるように渡されたメンバー表を、四人は囲むようにして拝見する。「で、やっぱりその人達も有名な人？」

アリエルは遠慮がちに尋ねる。

「そうね、『白豹』のルイフェに対してエステシオは『黒豹』の異名をもっているわ。あそこに短髪で黒々とした肌をした、マツチヨな奴がいるでしょ？」

ロンドが相手ベンチにいる奇抜な黄色のズボンを穿いている黒人を指差した。

男はしなやかそうな四肢と隆々とした筋肉が、服の上からでも十

分にわかるぐらい素晴らしい体つきをしていた。

「なんかスピードもパワーも兼ね備えた、いかにも好戦的なアタッカーって感じがブンブンするわね……。ねえ、少しキモくない？」

パーティが口を引きつらせながら、率直に感想を言う。

確かに原色で染められたヘンテコな服装をした、筋肉隆々な男はアリエルの目から見ても少しキツイ。

そう感じながらもアリエルの視線は、その男の隣、ベンチで静かに座っている女性に移る。

どこか落ち着いた淑女の雰囲気醸す彼女は、粉雪のような真っ白な肌と、美しく整った顔に紅い唇がとても印象的だった。そしてその肌と同じような真っ白なシャツと、スラリとした焦げ茶のパンツが彼女の流麗なフォルムを映し出す。漆黒の黒髪は後ろで一つに纏めている。

一目で彼女があのだと『白豹』だということがわかった。

「残る二人もそれなりに実績のある魔闘士みたいだし、こっちは新米魔闘士が四人……。いよいよヤバイ展開ね」

「不平不満を言ってもしかないだろう、ロンド。今はこの面子でいかに奴らに勝利するか考えるほうが先決だ」

「はいはい、作戦は変えないわよ。アリエルとパーティはアタッカーでいくわ。多分相手はルイフェとエステシオがサイドアタッカーの3ディフェンサーで来ると思うから、あんた達はどちらかの足止めできれば撃破を目標に。ディフェンサー陣は手薄の逆サイドのバックアップをメインに踏ん張って。その間に私が状況を見てフォローするから。前半は耐えて、後半から反撃開始するよ！」

ロンドの説明は簡単に言うと、前半は敵の攻撃を凌ぎつつ、隙があれば攻撃に転じるが、隙が無い場合は亀のように旗の守りに徹する。そして相手のスタミナの無くなってくる後半、一気に勝負を掛けるというものだ。

「アリーは魔法の錬気量には気を配っておきなさいよ。アンタはペー配分無茶苦茶なんだから」

「わかってるよ、あんまり練り過ぎると駄目なんですよ」

「その言い方……。あんた未だにきちんと理解してないんじゃないの？ 念気と瞬時力と念気量！」

アリエルの返事に不安を感じたのか、パティが唐突に問いかけてくる。昨日あれだけ絞られたのに、忘れたとはとても言えない。

「ええっと、念気は吸い上げた『精』を魔法に変換する為の作業だと……。で、念気量は念気でできた魔法の総量の事……。瞬時力は念気にかかる時間の事です。ん、それと念気を行うと、念気に使った時間に比例した形で身体に疲労が蓄積されます。なので、念気を行う際は健康状態に気をつける必要があります……」

アリエルは側頭部を人差し指でグリグリ押ししながら、言葉を捻り出す。参考書に書かれた説明文を読み上げるように、抑揚のない声で続きを回答する。

「念量は人体に蓄積できる念気量の限界値を示します。この限界値を超える念気を行っても魔法は人体に蓄積することはない……。で、瞬時力と念量には個人差があり、これらの値が優秀な魔闘士ほど良い魔闘士になれる素質があります！」

最後は暗記した内容を一気にまくし立てるように言い放ち、フィニッシュする。

「……なによきちんと覚えてるじゃない。なら Rond さんの言っている意味も理解できるわよね」

「だから必要以上に念気しないで前半は相手の攻撃を受け流しつつ、様子見つてことですよ」

アリエルは唇を尖らせて回答する。

執拗に疑われるのは心外なのだ。

「まあまあ、きちんと理解できているようだし、もうその辺で勘弁してあげたらどうだ。それに君達の仕事は勝敗に関わってくる重要なポジションだ。しっかりしてもらわないと困る」

コーラーがそう言い、話を収める。

「そうね、守備陣がいくら頑張っても、点がとれないと勝ちは無い

からね。あんた達二人には頑張ってもらわないとね」

両手にパワーグローブを着けながら、ロンドが続く。彼女のパワーグローブは手の甲に重厚な鉄板が装着されており、見るからに破壊力のありそうなグローブである。

横ではリオが黙々と、ライフルの手入れを行っている。

「ライフルでいくの？」

「うん、昨日フランと武器庫に行って考えたけど、少しでも扱った経験のある武器がいいと思って……」

アリエルも銃の手入れをしつつ、リオに尋ねると彼女は微笑を浮かべる。

「いろいろと手にとってみたけど、結局これが一番落ち着くの。わたしは皆みたいに接近戦での活躍は出来そうにないから」

リオのそれはソーザに言われたことを気にしているように聞こえた。

接近戦はどうしても経験がモノをいう戦いになってしまふ。間合いや呼吸の取り方は、一朝一夕で会得できる事ではない。だからリオはそれを捨てたのだ。接近戦では勝ち目が無い。だからこそ、自分の長所である想像力と洞察力を武器に、長距離からの射撃を極めるつもりなのだろう。

「私もりオにはそれが似合ってると思うよ。私も実際、それには苦労したもんね」

お互い弾に魔力を込めながら、会話をする。ゲーム開始前に少々体力を消費するのは嫌だったが、アリエル達の武器は弾込めと魔力の注入を同時にする事は出来ないの、他の武器と違って不利な面がある。だから少しでもその不利を改善する為に、多少の不利には目を瞑り、こうやって弾に魔力の注入をしているのだ。

しかし、銃器は悪いことばかりではない。ルール上、魔力を込めた魔弾はチーム内の誰が魔力を込めてもOKとされている。アリエルもりオもお願いで、少しずつだが魔弾の弾込めをメンバーにお願いでいた。

そうこうしていると、ロマリエから来た審判団がフィールド中央に集まってくる。そろそろゲームの始まる時間のようだ。チームの代表であるロンドが呼ばれフィールド上で審判からルールの確認と説明を受けている。

「いよいよだ。アリエルは心臓の高鳴りを感じながら、ロンド達を見つめる。」

兄は今どうしているだろうか。最後に会った時は喧嘩のようになってしまって、きちんと話す事はなかった。置き手紙で兄が自分の事を大切に思ってくれていることはひしひしと伝わったが、自分は兄にまだ気持ちをぶつけきっているとはいえない。もしかしたら、自分はこのゲームで死んでしまいかもしれない。そうなったら兄は悲しんでくれるだろうか。泣いて喚いて、そして何日も塞ぎこんでしまっただろうか。自分がそんな立場になるようなことは考えたくないし、考えられない。きっと自分は弱い人間なのだろう。気高く、そして遅く生きていくフランには憧れる。

でも彼女は私じゃない。私は彼女じゃない。

「大丈夫……。わたし達は誰一人として欠けない」

そんなアリエルの気持ちを汲みとったのか、横にいたりオが肩をパンッと軽く叩いて励ます。彼女にしては珍しい拳動である。

「そうそう、どうせあんたのことだからソーザさんに言わなきゃならない事、あるんでしょ？未練のある女は男から嫌われるわよ」

エスパールかと思う程、二人に的確に思考を当てられて驚いているアリエルに、パティは深くため息をつく。

「何年あんたの親友やってると思ってたのよ」

「親友歴三日の私でも分かる……」

「うーん、私には詳しい内容までは分からなかったが……。でも何かマイナスイ思考をしていたことはわかったぞ」

口々に親友達からそう言われ、恥ずかしくなってしまう。きつと耳の辺りまで真っ赤ではないだろうか。でも恥はかき捨てた。

「私って本当に素敵な友達がいれば良かったって思うよ。帰ったら兄

様に皆の武勇伝聞かせちゃうんだから」

いつもなら絶対に言わない、浮きまくりの台詞で返す。
すると彼女達は、

「なら目一杯アピールしなきゃいけないわね」

「……頑張る」

「うむ、彼の気を引く、良い機会ではあるな」

その返しに三人は真面目に応えてくる。

ひよつとして兄は自分の想像以上に魅力的なのか……？

「……ねえ、なんで皆そんなにやる気なのさ？ 満々なさ？ そんなに兄様がいいのかよ？」

「私は昔からソーザさん一筋じゃない。知ってるでしょ？」

「ソーザは良い人……」

「彼は素晴らしい人格者じゃないか。昔のあれも良かったが、今の落ち着いた感じも素敵だよ」

こいつらはマジだ。真剣に狙っている。

「だああああ〜め！ 兄様は誰にも渡したりなんかしないよ！ 兄様に近づきたいならまずは私を通さないと駄目なんだから！」

焦ってそう叫んだアリエルを、三人はにやけた面で見やっている。パーティに至っては腹まで抱えて肩を震わせている。

アリエルはそこで三人に嵌められたと気付く。火照った顔で天を仰ぎ、アリエルはこう思うことにした。

恥はかき捨てだ、と……。

羞恥の気持ちがり落ち着いてきたところに、フィールドの四隅に小さな物見櫓が設置される。そして各々の櫓に審判が梯子を使いよじ登る。フィールド中央では主審が集合の笛を鳴らす。

そのけたたましい音に、アリエルはそろそろゲームの開始時間であることに気付く。いつの間にか周囲にはトラヴァーリ国民と見られる人々で埋め尽くされていた。

国民としてはこの一戦に自分達の生活がかかってくるのだから、注目されるのは当然といえた。が、それにしても沢山の人だからが

出来ていた。先日見た、街の閑散とした雰囲気の中で、よくもまあこれだけの人が集まったと感心すら覚える。フィールド付近は危険地帯なので立ち入り禁止になっているが、物見の高台や遠目の丘には、人がぎっしりと詰め掛けていた。中には他国の民族衣装を着た人も点々と見られる。今から始まるゲームには周辺の国々にとっても興味深いのだろう。

そんな大衆の注目する中、アリエル達は各々のポジションのフィールドに移動する。自陣二段目の中央にアリエルとパティとロンドの三人が、自軍一段の右からリオ、コーラー、フランの順番で布陣に着く。

対する相手の布陣だが自陣二段右サイドにルイフェ、同じく自陣二段左サイドにエステシオ、プレイメイカーのポジション配置自軍二段目中央にはホアン、こちらもディフェンサーは三枚、右からマイコッダグラス、サミーッアツピア、ダニエルッアウビスといった顔ぶれだ。

お互いの布陣を確認し、いよいよ主審の試合開始の合図を待つのみとなった。両陣営に緊張が走る。笛が鳴れば、旗を取り合う戦争だ。

一瞬の油断が命取りになる……。まだ動いてもいないのに、背中に汗がうつすら滲み出てきており、不快な気持ちになる。

そして試合開始の笛が高々と鳴響いた。

真つ先に動いたのは『黒豹』だった。素早く、リオのいる右サイドへと侵入する。これに反応するように Rond が加勢しにこちらのサイドへ移動してくる。どうやら右サイドはエステシオと、リオ & Rond のマッチアップになりそうだ。

相手左サイド、マイコッダグラスはまだ様子見といったところだろうが、それともわたしのサイドのフラッグの破壊は、エステシオだけで十分と思っっているのだろうか。だとすれば甘く見られている。いずれにせよサイドディフェンサーに攻撃参加の意思が無いのはわたしにとつて悪くなかった。

エステシオが手甲に魔力を込めて襲い掛かってくる。

超接近戦を得意とする武器に対して、わたしのスナイパーでは対応出来ない。距離を開けようにも、わたしの背後には国の運命を左右する旗があるのだ。容易くこの場所を明け渡すことなど、できない。しない。

ライフルの長い銃身に魔力を込めて、エステシオの打突を受けようと構えた瞬間、素早い動きで Rond が間に割って入る。Rond は両腕を交差させて、エステシオの正拳突きを受け止める。が、全ての衝撃を吸収できずに、わたしの方に吹っ飛んできた。

リオは飛来してきた Rond を、両足で踏ん張り、受け止める。

「大丈夫ですか……？」

「そう見えるなら、あなたの目は節穴って事よ。全くぼーっとしてんじゃないわよ。いちいちフォローなんて、出来る相手じゃないんだからね。私があいつを引き付けるから、あなたは援護をお願い。勿論、サイドディフェンサーの攻撃参加にも常に注意しておくこと。わかった？」

急ぎ早口で用件を話す Rond に対して、わたしは小さく頷く。彼

女の口元から赤い液体がつう、と顎へと流れる。

熟練の魔闘士が万全の体勢でガードしたのにも関わらず、この威力……。果たしてこのサイドをわたしは守りきれなのだろうか？

圧倒的戦力差に、言い知れぬ不安がリオの胸に漂った。

「さあ、こっちは早くも修羅場ね。あつちは大丈夫かしらね」

ロンドの口から出た言葉に文句の一つでも言いたくなかった。他の心配よりもまずは己の心配をするべきだ、と。二人の目の前には鋭い牙を剥いた褐色の獰猛な豹がいるのだ。余計な事を考えていれば、たちまち喉を食い破られるだろう。そう思うと、自然足が震えてくる。

ああ……、今わかった……、これは恐怖だ。

わたしはこいつに耐えられるだろうか。

どうしようもない絶望感がリオを襲った。

「パティ！左から！」

アリエルの怒号に素早く反応して、飛んできた雷の矢を弾き落とす。

アリエルは風弾をルイフェに撃ち込みながらも、相手サイドデIFエンサーの動きから目を離していないようだ。パティも矢を弾くと、身体を独楽こまのように回転させながら、ルイフェに接近し、なぎ払いを一段、二段と連続して放つ。ルイフェはそれを起用に足で受け止める。斬撃を受け止めるルイフェの足には膝下から足首にかけて、煌びやかなダイヤの紋様が刻まれたレッグガードが装着されている。

「中々やるじゃないの、お嬢ちゃんたち」

「どうも、アナタみたいな凄腕にそう言われると、悪い気分はしな

いわね」

アリエルは援護をしようと、弓を絞っていたダニエルに風弾を打ち込み、怯ませる。

流石相棒、良く見えてらっしゃる。

アリエルがいるおかげで、ルイフェとダニエルは中々攻めて来れない。彼女が目配せし、先ほどから何度も風弾や火弾で、足止めや牽制をしてくれていた。銃が二丁あるとはいえ、この二人を同時に監視しながら相手までするとは、パティからすればそれは神業に等しい。改めて彼女の才能には舌を巻く。おかげでパティにも周囲の状況が、すこしだが確認できた。

逆サイドはかなり押し込まれてはいるものの、相手左サイドディフェンサーに動きがない為、なんとか踏ん張っている様子だ。あちらは前半持たないかもしれない。

中央も凄いことになっている。

サミーとコーラーが、がっぷり四つの押し合いをしている。両中央の重要なポジションである二人が、正規軍側一段目中央で、激しいぶつかり合いを繰り返している。コーラーの獲物は七尺はありそうな巨大な鉄矛、対するサミーも自身の巨躯が丸々隠れそうな大盾を激しくぶつけてくる。二人のぶつかり合う様は見るとを圧倒していた。偉丈夫が二人、轟音を鳴らしながら何度も打ち合うのだから、観戦した市民の目は彼らに釘つけになる。

時折、サミーの背後からホアンが顔を出し、隙あらばダガーを飛ばして援護するが、それをフランがチャクラムで漏らさず落としていく。

開始から五分少々で、フィールドの各エリアでは激しい戦いが繰り広げられていた。

その激しい打ち合いの中で、パティは考える。

眼前の麗しい女性は、なぜこちらを裏切ったのか。どうして急に手の平を返したように敵対勢力へ寝返ったのか？ きっと理由があるはずだ。一番考えられたのが、金による調略。しかしロンド達の

話を聞く限り、建国当初からこの国の警護を担ってきた彼女なら、金銭的な理由とは考えにくい。

そんな考え事をしてしていると、下腹部が強烈な衝撃と痺れに襲われる。

「んあっ！」

視界が歪み、なんとも言えない声を上げて倒れそうになる。が、アリエルがパティを受け止めると、追い討ちを仕掛けようとするルイフェを、火弾で牽制してくれる。

「大丈夫！？」

「なんとかね……。少し痺れたみたい。雷属性の攻撃って喰らうとしんどいわ」

「それは、どの属性も一緒っしょ。愚痴言っな」

まだ痺れがとれず、下腹部に感覚はないがアリエルの言う通り、これ以上泣き言は言っていられない。

「はいはい、わかったわよ。じゃあ引き続き援護よろしく」

そう言い放つと、パティは再びルイフェに向かって突進する。

大振りの振り下ろしから薙ぎ払う。そして身体をもう一回転させて、再度強烈な払いを繰り出す。ルイフェは飄々と身を翻しながら剣撃を避ける。

当たらない攻撃に段々と苛立ちが募る。まるで実体の無い影を相手にしているような感じがする。だが、パティの払い終わりのタイミングで、アリエルが後方から風弾を放つたらしく、ルイフェの体を地面に固定する。

チャンス！

パティはすかさず縦一閃の振り下ろしをルイフェに見舞おうとする。しかし相手も黙ってはいない、敵陣後方から強烈な雷を纏った矢がパティを目掛け疾走する。

大丈夫、これは相棒^{アリエル}が落としてくれるっ………！

パティはそれを信じ、回避行動はとらずに剣を振りかぶる。

予想通り、アリエルが強化弾で矢を叩き落とす。完全に無防備に

なつたルイフェに剣撃を見舞う。

これはもらった！ とパーティは確信した。

しかしパーティの剣撃はルイフェに当たることなく、地面にめりこむ。

「今のは危なかったわ」

「それはどうも、私はもらったと思いましたが」

パーティは半身で避けるルイフェに、憎たらしいばかりの笑みを向ける。

正直に言えば、凄く悔しい。

しかし、この笑みは虚勢という事もなかった。なぜなら、先ほど受けた下腹部の攻撃で分かった事がある。

普通、前大戦で異名を持った大物が、自分程度の新米魔闘士を一撃で仕留められないだろうか？ それにパーティは少しだが、戦闘中に周囲を観察できる余裕まであったのだ。そう考えると、ルイフェが手を抜いていると思わざるを得ない。もし手加減したのであれば、彼女はこのゲームに乗り気ではない可能性も出てくる。そうになるとやはり彼女には何か事情がありそうだ。

「あなたは何故正規軍を裏切ったりしたのですか？」

下段払いを繰り返しながら、駄目元でルイフェに問う。

「いつまでも脆弱なこの国のあり方に疲れたのよ」

下段の剣撃をレッグガードで華麗に受けながら、ルイフェは答える。

応じた。しかも理由は明確ではない。脆弱だから裏切った？ 脆

弱だからこそルイフェはこの国の警護職に就いたのではないのか？

これは間違いなく何かある。でなければ、こんな言葉は無視する筈だ。打ち明けることが出来ないから、でもそれを分かっただけから、そんな気持ちがこの中途半端な回答に現れているような気がする。

「それは嘘じゃないのですか？ 何か理由があるのでは？」

「あつたとしても、お嬢ちゃんには関係の無いことよ」

「あなたは私利私欲で動く人間とは考えにくいです。ロンドさん達の話を少し聞いただけです。建国当初から支えてきたこの国を、こんなにもあつさり裏切れるはずがないのでは」

受け止められた剣に力を入れ押し出す。ルイフェは見事な足捌きでパティの力押しを受け流す。

「例えどんな理由があろうとも、私はこの国を裏切った。それは事実。それだけのことよ。それとも私に負けられない理由があれば、お嬢ちゃんは死んでくれるわけ？」

確かに正論だ。パティ自身、この場所にいるのは守りたいものがあるからだ。ルイフェにもやっぱり譲れない何かが存在している。それは、この一戦に勝たなければ守ることが出来ないものなのだろう。闘う理由は人それぞれ必ずある。名誉、金、愛、自尊心、例を挙げたらきりが無い。相手も自分も譲れないモノがある。それならば、相手のモノの内容など知らないほうが全然良い。聞いてしまうと、辛くなるから。言ってしまうと、それもまた辛いから。

「お互い譲れないなら、仕方がないですね」

「そういうこと、お嬢ちゃん」

この人は多分、悪い人じゃないのだろう。直感でパティはそう感じた。しかし今は敵で倒すべき相手だ。できればあまり傷つけたくはないが、仕方がない。ここからは全力で

「パティ！」

アリエルの言いたいことは直ぐにわかった。

作戦忘れたの？ とジト目で睨む相棒が背中越しても十分わかる。すぐに力押しに頼りそうになる自分の性分は、ソーザに最近注意されたばかりだった。それは魔法量の消費に繋がるので、今は極力魔法を使用せず立ち回る。

分かってるわよ。

心の中でパティは呟く。

あの黒い猛獣の攻撃は、どうやったら止められるのだろうか。

ロンドの打撃を軽くあしらい、わたしの光弾もなんなく手甲で受け止める。手数ではこちらのほうが多いはずなのに、全てが完璧にブロックされている。こちらの攻撃は効かず、対照的にエステシオの打撃はきつちりと防御しても、体の芯にまでダメージが響いてくる。両者の疲労度は一目瞭然だ。これでは作戦など、成立しようがない。

少なくともリオは初めて経験する恐怖と圧倒的戦力差に、精も根も果てようとしていた。

そんな状況に気持ちが見られる。後方 はずっと待機していた幼い容貌をした少女は、手に握りしめていた鉄の玉を右腕に装着したスリングショットにセットすると、ゴムを引いて弾く

一瞬の出来事だった。

飛ばされた玉はフラッグのどれを指すわけではなく、逆サイドへいるルイフェ目掛けて飛んでいく。

ルイフェはパティの剣撃を飛翔して巧みにかわすと、そのまま空中に飛来してきた玉を蹴り飛ばす。

玉は勢いを増し、今度はエステシオの元へ。

彼は余裕を持って、その玉をがら空きの中央フラッグへ向けて、叩きつけるように押し出す。目にも留まらぬ速さとなった玉は、あつという間に中央フラッグを押し折っていた。

その時間は正に刹那といってもよかった。

そしてリオの心に敗北という名の絶望を運んでくる。

中央フラッグの破壊

それは正規軍チームの窮地を内外の者達に見せ付けるには十分す

ぎた。

理解しなければいけない。しかし理解したくはない。

この後、わたしはどうなる？

あの童顔のサイドバツクも攻め上がってくるの？

エステシオ一人でも、これだけなのだ。もう一人加われば……、

どうなる……？

……いやだ、……嫌だ、嫌だ、嫌だ！ わたしはまだ死にたくない！

そしてフィールド内で動転したわたしを、エステシオは見逃さなかった。

いつの間にか奴はわたしの目の前にいた。涙目になりながらも、わたしの瞳は奴の右拳を追う。

エステシオは、わたしの懐へと潜り込むと、下から突き上げるようなアツパーを繰り出す。土属性によって強化された鋼鉄の拳が、わたしの顔を捉えにかかる。

全ての世界が止まったような不思議な感覚、そしてその間に襲い来る恐怖に耐え切れず、わたしは自ら視界を断つ。その瞬間でもわたしは死を受け入れようとは到底思えずに、死にたくないと思った。顔面が陥没してもおかしくないような衝撃音が伝う。

わたしは無事ではいられない。不安と恐怖で一杯の中で迫ってくる死の影に震えた。

……しかし音が響いただけで中々痛みがやってこない。なぜだろう？

おそろおそろ、閉じた瞳を開ける。目に光が差し込む、……まだ生きているのか？

目を開けたりオは尻餅をついた形でへたり込んでいた。

いつ尻餅をついたかはどうでもよかった。今は生きていることに安堵する。

しかし、わたしはわたしの更に後方に飛ばされたモノに愕然とした。そして恐怖がまたわたしを支配する。

そう、わたしは無事だった。が、彼女は無事ではなかった。後方に飛ばされたロンドは口から大量の血を吐き、ガードした両腕はあらゆる方向に曲がり、身体は全身痙攣し陸に上がった魚の如くピチピチと跳ねている。明らかに脳にダメージを受けた症状で、戦闘不能なのが一目瞭然で理解できる。

まるで落石の直撃にでもあったかのようなロンドの無残な姿を見て、競々となる。

ロンドはわたしを守る為、己の身を盾にしたのだらう、しかし念気からの魔法構築をする時間がなかったようだ。殆ど生身の状態でエステオの魔法強化された強烈な手甲による一撃を受けたロンドは、フィールド外部へと吹っ飛ばされてしまったのだ。

野営に設置された医師団が彼女を運び込む為、慌しく担架の準備を始めている。民衆からも驚愕と悲痛な叫びが彼女の状態の酷さを物語る。

わたしのせい？

そうだ、わたしのせいだ……。

……でも助かった。本当ならわたしがロンドのようになっていた。「戻れ、引くんだ！ 右サイドはもう駄目だ！ リオ、左まで引くんだ！」

そんな中、メンバーの中でいち早く指示を飛ばしたのはコーラーだった。そのコーラーの発した指示は右サイドの放棄だった。

わたしはコーラーの指示と同時に、必死で左サイドへ駆け出した。背後ではロンドが医師団に囲まれていたが、もうどうでもよかった。死にたくない、その気持ちだけが先行する。わたしは無様にフィールドを駆ける。

22 救世主

「えっ?」

アリエルはコーラーの指示に、思わず疑問の声を漏らす。まだ右サイドのフラッグは生きているのに……。

「アンタ、状況理解してるの?」

パティが険しい顔を向けてくる。視線はルイフェに固定したまま、口を開く。

「私達は中央のフラッグを失ったどころか、戦術の要であるロンドさんまで失ったのよ。その右サイドを、リオだけで防ぐなんてことは到底無理。ならばいっそのこと右サイドを放棄して、左フラッグの防衛に全力を尽くす事を、コーラーさんは選択したのよ。左フラッグの位置にサミー、エステシオ、マイコは侵入出来ないでしょ。」

こっちはまだディフェンサーが三人残っているんだし、自軍二列目では私とアンタがサイドからの侵攻を食い止めている状況よ。守備陣が注意すればいいのは、ホアンの進入とマイコって子の遠距離からのパチンコ玉だけでよくなるのよ」

「なるほどお」

パティの説明で納得する。

しかしその状況判断を咄嗟に指示したコーラーは、やはりアリエル達のチームの中で一人経験が違った。瞬時に戦況の建て直しを図る為、指示を出し最低限の損害で場を安定させようとしたのだ。

守備陣のいなくなった右サイドのフラッグに、エステシオはゆっくり歩み寄り、捻るようにしてフラッグを折る。これで四ポイントを反乱軍は得た。

コーラーは鉄矛を振るいながら、リオの自軍左一段目への撤退を確認すると、脇目も振らず自身も飛び込む。リオの撤退の為、ホアンとサミー、二人の攻撃をその身に受けたコーラーも、もはや満身

創痕の体で、既に体内に蓄えていた念気量は使い果たしているだろう。正に八方塞がりである。

傷だらけのコーラーと魔法を放出しっぱなしだったリオ、今まともに戦えるのはフラン一人という守備陣に、プレイメイカーのホアンが襲い掛かる。飛んでくるダガーを右手のチャクラムで叩き落とし、左手のチャクラムでホアンを牽制する。

こちらの消耗具合から、急な試合運びをする意図はあちらには無い様だ。アリエル達に気の抜けない展開を継続させつつ、精神と体力の限界を待つ作戦なのだろう。

フランは飛んでくるパチンコ玉とダガーから、必死に仲間とフラッグを守る。

「どうにかならないか!？」

嘆くような叫び声が、アリエルの耳に突き刺さる。

「……すまん、呼吸が荒くなって念気が上手くできん。もう少し待ってくれ!」

フランの嘆願にリオが弾込めしたライフルをホアンに向けて発射する。

しかしリオは先ほどから様子が変わった。リオから発射される弾は標準が全く合っておらず、ホアンを大きく外れ、通過する。突破された右サイドの状況を考えれば無理もないが、それでもこの状況下でパニックになつては、味方の足を引っ張るだけだ。今はまだそこまですててはいないようだが、このままでは彼女がそうなるのは時間の問題のようにも思える。こういう時、視野が広いが故に、苦しい状況が分かってしまうのは考え物だ。

しかしそんなリオの銃弾でも牽制程度には効果が期待できたようで、それだけでもフランにとっては精神的に助かるだろう。

「くそつ、このままじゃジリ貧だ。何か手立てはないのか!？」

「今は凌ぐ事だけを考える、余計なことを考えると負けるぞ!」

フランとコーラーのやり取りに、アリエルは思わずこう思ってしまった。

コーラーさん！ それは答えになっていないよ、このままじゃ絶対に負けちゃう。

「パティ、後ろ相当やばいよ……」

真横で守備部隊の為に、援護の銃をぶっ放しながら、状況をパティに説明する。

「ロンドさんがやられて、右と中央のフラッグは取られちゃったんでしょーが。今の状況は当然じゃない！」

「お嬢ちゃん達も観念してギブアップしたらどうかしら。今なら大した怪我もなく、五体満足でお家に帰れるわよ」

ルイフェがアリエルに接近すると、回し蹴りを繰り出しながら囁く。

その蹴りを受け流しながら、アリエルは虚勢を張ってみせる。

「まだまだっしょ。そっちこそ、私達を抜いてからそんな台詞は言うんだね」

「あらあら、ここが突破できなくても、彼等が中央から残る一つの旗を落としてくれるわよ。私は貴女達二人を引き付けておけばいいんですから」

「……優しいのね」

性悪な微笑みをするルイフェに、パティは彼女にとって予想外の台詞を吐いたようだ。

その言葉にルイフェの瞳が揺れた。それは確実に動揺とわかるほどに。近くにいたアリエルも目を丸くする。

「あなたほどの腕前なら援護さえあれば、私達を撃破しようと思えば出来るはずだわ。それをしないって事は、あなたは心から反乱の手助けをしてない証拠ね」

「何を言っているのかしら。私は与えられた仕事をただこなしているだけよ。それ以上の成果は上も期待していないわ」

「そうなの？ でも普通に考えて数的有利の決定的なチャンスを前に動かない人も珍しいんじゃない？ それなりに欲が出てくるのが、人ってものでしょう」

その言葉を聞いたルイフェの表情が歪む。なんとも言えない苦しそうな顔は苦痛の色が滲み出ている。

「あなたは何故闘うのかしら？　そして私にはあなたが裏切り者にはとても見えない！」

確かにパティの言う通り、緩くはないが殺傷力のない攻撃と積極性のない姿勢は、明らかにどこかおかしな雰囲気があった。

「教えてちょうだい！」

ルイフェの動揺を突き、パティはルイフェの足を剣先で弾くと、彼女の胸倉をがっしり掴む。

その瞬間、フィールドの隅々まで前半終了を告げる笛の音が、高々と鳴響いた。

するとルイフェは無言のまま、パティの腕を振り解くと、そのままベンチの方へとぼとぼと歩いていった。

「あの人、すごく悲しい顔してたね」

アリエルの言うとおり、パティの手を払った彼女の眉は下がり瞳にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「そうね」

ぶつきらぼうに言い捨てるパティを見て眉を窄める。

アリエルにも話の内容は聞こえていた。私達にも譲れない事情があるように、彼女にも譲れない何かがあるのだろう。誰かを救う為に誰かを犠牲にしなければいけない。犠牲の大小は別として、それはいつの時代でも必ずある。

まるで悪魔の微笑をした神が、外れくじを引いた人間に罰を与えているような気がする。フランとルイフェは、この時代で同時にその不幸なくじを引いてしまったのだ。しかも意地悪な神は、ここでも性質の悪い救済措置を設けるのだ。

救いの糸を一本だけ彼女達の元に垂らし、奪い合わせる勝った方が助かる事が出来ると微笑みかける

『助かるのは一人だけ』

そんな考えと現状に、胸くそ悪くなったアリエルはベンチに戻ると、直ぐに用意されていた瓶から水をすくい、一気に胃へ流し込む。水は乾いた口内と喉を潤してくれたが、嫌な感覚は流れていってくれなかった。

「最悪だ。ロンドは負傷退場、フラッグはもう左の一本だけか……」
コーラーがベンチに腰を下ろし、気落ちのする一言。しかし、この状況でポジティブな発言をしるという方が難しい。一人少なく、フラッグは残り一本。こちらが逆転するには相手のフラッグを全て壊すしかない。後半の十五分で果たしてそれが出来るだろうか、それは限りなくゼロに近い。

リオは俯いたまま動かない。極度の魔法の使用で、体力を回復させるだけで精一杯という様だ。

無理もない、彼女はアリエル達と違って、手を抜いた強者ではなく、容赦のない歴戦の猛者を相手にしていたのだから。肉体的消耗はおろか、精神的にも彼女が一番きつかったはずだ。パティも立つたまま腰に手を当て天を仰ぐ。

皆、傷だらけのボロボロで、後半戦などとても無理に思える様相だった。

「もういい。十分だ」

そんな中、口を開いたのはフランだった。

彼女の美しい桃色の髪は埃まみれになっており、顔は汗で汚れていた。

無理に笑顔を作ってアリエル達に接するフランは、とても痛々しく見える。

「こんな状況ではもう勝ち目などない。私はともかく、貴女達まで無理をして命を危険にさらす必要なんてない」

もつともな意見だ。これ以上の戦闘継続は死者が出る可能性があるし、戦況は覆らない。フランの言葉に反対の声を上げる者はいなかった。

……でも、私は、

「じゃあ、私は審判に後半戦の辞退を報告してくる」

皆を一瞥したフランは振り返って審判団のベンチへ歩を進めようとした。

しかし彼女はその足を進めずに、もう一度こちらを振り返る。

なぜなら、彼女の腰帯を私の手が掴んで離さなかったから。

そして、それを見た彼女はまた哀しそうな笑みを浮かべる。瞳は少し滲んでいる。

滲んでいるのは彼女の瞳だろうか、それとも私の瞳だろうか。

「いいんだ……。もういいんだ」

良くない。良いわけではない。

「貴女には本当に感謝している。もう十分助けてもらったさ」

フランはその手を解こうとするが、アリエルは離さない。

助けてない。救ってない。私はまだ何も出来ていない。

もう無力で孤独な自分はイヤ！

アリエルの心の内がそう叫ぶ。

「その気持ちだけで私は嬉しいよ」

そう言いながら、フランはアリエルの手を掴む。

私は嬉しくない！ 楽しくないよ！

なんで私には救えないの？

大切な友人の窮地が、笑顔を救えないの……？

「……いや」

声が嗚咽と共に僅かに漏れた。フランは困った様に笑い、無言のままアリエルの手をゆっくりと腰帯から外す。

「もう諦めるのかい？」

フランが再度振り返ったその時だった。聞き覚えのある声がベンチの更に奥、人ごみの中から聞こえたのだ。皆が一齐に声の方向へ顔を向けたあたり、空耳ではないようだ。

「せつかく応援に来たのに、無駄足だったかな？」

黒の外套に黒のシャツ、そして黒のスボン。黒一色で染められた男。

群集からゆっくりと歩いて出てきたのは、アリエルにとって一番身近で頼りになる兄だった。

ソーザは人当たりの良さそうな柔らかいいつもの笑顔をしたまま、片手をやあやあと挙げて歩み寄ってくる。

「……どうして？」

「大事な妹の心配をしない兄貴がどこにいる？」

思わずでた妹の言葉に、兄は肩をすくめる。

「それなら直ぐに駆けつけて欲しいですよ」

「遅い……」

パティとリオが口を尖らせ軽く毒気づく。しかし二人とも先ほどの沈んだ顔ではなく、表情が明るい。心底ソーザの登場には嬉しかったようだ。

「はは、そうだね。まあ俺も直ぐに駆けつけたかったのは山々だったけど、色々と調べたいことがあってね」

頭を掻きながら申し訳なさそうに言うと、コーラーに向かって軽く会釈する。

「久しぶりだな、闇の死神」

「ああ、久しぶり。妹がお世話になった、礼を言わせてもらうよ」

どうやらコーラーとは古い知り合いのようだ。二人は軽く微笑み合つと、今度はフランに話しかける。

「さてと、メンバーチェンジだ。ロンドに代わって俺が入ろう。まだゲームは終わっちゃいないさ。泣くんじゃないよ、フラン嬢ちゃん、それに妹よ」

アリエルはソーザに頭をゴシゴシと撫でられ、昔の記憶が蘇ってくる。独りでいた私を救ってくれた、あの時のように、優しく懐かしい感触。それを思い出して更に涙が溢れ、鼻がツンと痛くなる。「泣き虫は変わってないな。しかし、そろそろ時間になるし、作戦

も話さなきゃならない。いいかい？」

指先で涙を拭いながら頷く。それを見てソーザは皆に向かって作戦を話し出す。

「じゃあ少しフォーメーションをいじらせてもらおうかな。まずアタッカーだが、サイドには置かずに、コーラーとパティの二人に担当してもらおう」

コーラーとパティ、重量級の武器を持った二人による破壊力抜群の組み合わせだ。大逆転を狙うに相応しい。指名された二人は黙って頷く。

「続いてプレイメイカーだがアリー、お前にやってもらおうぞ」

「ええっ！？ わたしい？」

「ああ、視野が広くて小回りの効くアリーは、このポジションに適性があると思うよ。しっかり状況を把握してピンチの味方がいれば、援護してくれ」

驚くアリエルを他所に、意外にも周囲は納得の表情を見せる。

「視野の広いアリエルをプレイメイカーに置くことで、戦場における不利な箇所のカバーに専念させる。殺傷能力が低い銃だが、その分反動も少なく、射程もそれなりで小回りが効くから、足止め、牽制には十分だ。最後にディフェンサーだ、これは変わらずいく。コーラーの所には俺が入る」

そこで初めて異論がでる。

「サイドディフェンサーを二人おく必要はあるのですか？」

口を開いたのはフラン。

「恐らく相手はサイドアタッカーを置く布陣でくるとは思えません。エステシオもルイフェも強力なアタッカーです。それなら自陣を自由に移動できるディフェンサーを最低でも二人にしなければ駄目だと考えますが」

「ああ、私もそれについては同感」

アリエルが賛同すると、リオも同意見だとばかりにコクコクと頷く。

彼女も前半の時とは違い、顔色が戻ってきている。少し眉の上があったパーティもそれなりに疑問だったようだが、彼女は兄の信者なので、口を挟まず押し黙ったまま成り行きを見守っている。

確かに左フラッグしか残っていない状況では、サイドにアタッカーを置くフォーメーションでくることがまずないだろう。アタッカー二枚とプレイメイカー、サイドディフェンサー総出で、一気に攻め立てにくるに違いない。ならば、左エリアに侵入する前に手前のエリアで敵の侵攻を食い止める必要があるのではないか、というフルランの意見だ。右にサイドディフェンサーを置いて左サイドの攻防に参加できる位置はフラッグのあるエリアだ。これでは早めの守備参加に支障をきたす。

「確かにディフェンサーを増やしたほうが守備的にはいいのかもしれない。でもこのゲームは、勝ちにいくんだろう？」

そうソーザに聞き返されて、一同は言葉を失う。皆フラッグを守ることばかりが頭の中を回っていて、こちらがフラッグを全て破壊しなければいけないという意識が薄くなっていったのだ。

そんな呆気にとられた皆の顔をクスクスと軽く笑い飛ばしながら、ソーザは続ける。

「いいかい？ これからが本番だ」

ソーザは人差し指を立て、口元に寄せる。声のトーンを低くして続きを喋る。

「アリエルは心の中で独りごちる。」

後半は大丈夫だ。私達は絶対勝てる。まだ諦めないよ！

話を聞いたアリエルは胸を張ってフィールドに駆け出した。

後半の笛が鳴る。相手の布陣はこちらの読みどおり、エステシオとルイフェがアタッカー配置に変更となった形だ。

まずはソーザが双剣を携えて、ルイフェとマツチアップする。そしてパーティとコーラーはエステシオ&サミーの相手をする。

やや不利だが、パワー対決ならパーティたちもある程度渡り合えるだけの實力を持っている。そして、ホアンとマイコにはアリエルが監視の目を光らせて、牽制する。左サイドには右からリオが応援に駆けつけ、遠距離射撃でパーティたちをフォローしながら、念気による魔弾の注入作業に専念する。フランは自軍二段目でダニエルの動向を伺う。

よし、とりあえず作戦通りだ。

「あら、その格好……。ひょっとして死神さんかしら？」

「昔はそう呼ばれていた時もあったかな」

剣撃と足技の嵐の中で、二人は悠々と会話をする。ソーザは上段から中段へ変化してくる蹴りをあっさり見抜き、がら空きかと思われた足元へ剣を滑らせるが、ルイフェも華麗な跳躍で見事に避ける。「そろそろお遊びは止めようか」

「あら、もう少し付き合ってくれてもいいじゃない」

「いや、貴方にも大事な人が待っているんじゃないかな？ 急がないといけないよ、ね」

ソーザの一言に、ルイフェの表情が突如として強張る。そして今にもソーザを呪い殺しそうな、憎憎しい視線を投げかける。

「彼女は安全な場所で保護してあるよ。だから貴女はここで血生臭い戦闘に加担するよりも、彼女の側について、笑顔でいるほうがずっといい」

ソーザは柔らかな笑みをして続ける。

「今は俺の知り合いの家で世話になっているよ。バーゼルのギルドに、ジョージって奴が働いている。そいつに『アレックス』の名前を出すといい、案内してくれるよ」

それを聞いたルイフェの頬に一筋の涙が伝う。先ほどの鬼の形相とは違って変わり、すぎる様な安堵の表情を見せる。

「……ありがとう」

「お礼はきちんと会えてからでいいよ。それより早く会いに行つてあげなよ」

ソーザはそう言い放つと、素早くルイフェの懐に潜り強烈な中足蹴りを見舞う。ルイフェはその打撃を受けフィールド外へと吹っ飛ばすと、そのまま戦場に背を向けて走り去っていった。

さて、これで作戦の第一段階は終了した。

だが、俺にはまだ大事な仕事が残っている。さつさと片付けてまたのんびんだらりとした生活に戻るとするか。

その様子を見ていた観衆はおろか、フランやコーラー、リオも驚きの表情を隠せなかった。

『ルイフェは俺が何とかするから』

ソーザは作戦の冒頭にそんな事を言っていた。パティとアリエルは、ソーザが何とかすると言ったら、絶対に何とかするものと信じて疑わない。だから今こんなに早く数的有利な状況が作れたことも驚かない。

何よりも先ほどの二人の会話と表情を、アリエルはきっちり見聞きしていたのだから。

自慢じゃないけど、視野も広いが耳もいいのである。

オツムの調子はイマイチではあるが。

「さすが兄様」

「やっぱり有言実行の殿方は素敵よね」

アリエルとパティは眩きあう。

ルイフェがいなくなった事で、サミーは急ぎ、自軍一段目中央へと撤退する。ソーザは中央でパティ達の代わりにエステシオとのマツチアツプする。

劣勢だったパティとコーラーは一転、退いたサミーに追い討ちをかける。フランとアリエルはそれぞれダニエルとホアンの牽制を継続する。

下がったサミーは大盾に魔力を注入し盾の強化を図る。土属性は物質を硬化させることが出来る為、攻撃を受け止めるには便利な属性である。

本人も優秀な魔闘士の自覚はあるらしく、これだけ硬化してあれば、そうそう破られることはないと思っただろう。どっしりと大盾を構え、パティとコーラーの一撃を迎え撃つ体制だ。

「狙い通り、ね！」

「思いつきりいくぞ！」

二人は同時に魔力を込めた一撃を叩き込む。耳を塞ぎなくなるよくな、金属による衝突音が響き渡る。前半戦で見せたエステシオの轟音よりも凄まじい。それでも大盾は壊れない。

「もう一丁！」

「あいよ！」

二人は再度、大きく振りかぶる。その時、右側面からコーラーに向かってパチンコ玉が飛来する。あちらも黙ってみているわけではない。それをコーラーは右肩で受ける。

「ぐうっ…！」

骨の碎ける嫌な音と共に、鉄矛に添えていた右腕がだらりと垂れたが、本人は笑みを浮かべ、片腕のまま勢いよく振り落とす。パティもそれに合わせ、魔法で真っ赤に滾った大剣を振る。

サミーはもう一度わずかな時間で念気し、盾を構える。とにかくありったけの念気で魔法を盾に注入を試みている。

先ほどと同じ強烈な金属音が響く。サミーは二人の攻撃を受けきつてみせたのだ。サミーはその強烈な一撃を受けきつた事に対して、頬を少し緩めてみせた。彼はきつとパティ達の愕然とした表情を期待していたのだろうか。

しかし、彼の期待した光景は見られなかった。

艶やかな表情をした金髪の女剣士が、まるで蝶の如く目の前から軽やかに舞うように消え、代わりにサミーの左肩に飛び込んできたのは光の塊だった。強烈な光弾による一撃が盾を破壊し、サミーの左肩を貫通した。気を失いかけるサミーの脇をパティが素早く駆け、中央フラッグを叩き折る。

「ふう」

大きな息を一つ吐き、銃口を上げたリオは見事に大役を果たし、安堵の表情。この一撃の為に彼女は後半開始前から念気で魔法弾を練り上げていた。

攻撃能力の高い属性攻撃による中央突破。ソーザの作戦ががつつり嵌った形となった。ここで重要だったのは相手の気の緩みをつく事と、狙いを外さないことだった。リオがタイミングと狙いを外してしまえば、パティとコーラーの努力が水泡に帰すところだっただけに、喜びもひとしおである。

遠くの敵陣一段中央エリアではパティがサムズアップしてリオに成果の報告をしてくれる。この一撃で魔法力の尽きたリオは残る魔法弾を握り締め、アリエルの援護にかかる。

第二段階完了。時間して後半開始からまだ二分も経過していなかった。

相手が迅速な連携で中央フラッグを破壊した。

狐顔の男は、ダガーで二丁拳銃の少女の砲撃を防ぎながら、思考

する。

サミーとルイフェが戦線離脱、エステシオは死神の相手で手一杯中央を破られたことで、サイドデイフェンサーの二人の攻撃参加は最早望めないだろう。まさかこの短時間でここまで追いつめられるなんてことは、今までの経験からいっても初めてのことだった。

なんといつても前半あれだけの恐怖心を植えつけた、銀髪の少女が立ち直つてくるとは思わなかった。光属性の無効化はこちらの思惑通りに進んでいたが、あの死神の登場で全てひっくり返されてしまったようだ。

「やばいねえ、これはやばいですねえ……」

元々その日暮らしの傭兵家業だ。この国の行く末に興味があるわけでもないし、命あつての人生だ。こんなところで真面目にやっても仕方がない。あの筋肉馬鹿は強い相手と戦えればいいみたいだし、本当に羨ましい限りだと思う。

さて、自分の事だが依頼の内容通りにはいかなかったが、このゲームの前に既にお膳立ては整っていたことだし、無闇に煽ることもないだろう。

「一応顧客に誠意だけでも見せにいきますか」

そう呟くと、ホアンはアリエルのマークを外し、リオの方へと進路を変更する。

アリエルは周囲を見渡す。先ほどまで一進一退の攻防を繰り広げていたホアンはアリエルの風弾を受けながら、リオの方向へと突進していった。

コーラーは怪我の為、サミーと一緒にフィールド外へと運ばれた。しかし中央のフラッグが破壊されたことと、パティがダニエルの相手をしているので、フランがりオの援護が出来るはずだ。それに

私と彼女はもう一仕事、任されている。

アリエルは右サイドを疾風のごとく、駆け上がる。目の前にはリオと同じくらい小柄な少女が、スリングショットの紐をギリギリ引いて待ち構えている。土属性の強化玉ということは前半で分かっている、発射のタイミングを見極めて剛玉を避ける。

私は光の弾の軌道すら読みきつたのだ。只の強化玉なんか目じゃないよ。

「分かり易いんだって！」

マイコは素早い動きから、パチンコを連射して放ってくる。

アリエルは右手の銃を真横にぶつ放す。入っている弾は風弾。踏ん張りを効かせずにいると、体はその反動でふわり、と左に動く。

一つ目の玉を避け、次は左手のクレツセントを左下へ打ち込む。浮いた体は、更に右上へ浮き上がる。次にサンを、クレツセントを、交互に撃ちながら空中でマイコの攻撃をさらりとかわしていく。

不覚にも楽しいと感じた。大空へと羽ばたくような浮遊感と、自分の意思の通りに空中を散歩しているかのような開放感は、今まで感じたことが無かった。

マイコの拳動が上から手に取るように分かる。下からでは見えないうものが、上からでは良く見えた。

アリエルは空中を踊りながら、マイコの目の前まで接近すると、風弾を下方に向けて連射する。当然のことながら二人の間で土煙が騒然と巻き起こる。これが合図だ。

そしてまた地面に風弾を撃つ。その反動でアリエルはマイコの頭上に飛び上がる。そしてあるうことが、上空に上がったアリエルは逆サイドにいるフラン目掛けて引き鉄を引いた。

「フラン、頼むよっ！」

アリエルの合図を確認したフランはリオに目配せして、敵陣左サイドを滑走する。そして彼女が煙の中から上空に現れると、水の魔力を込めたチャクラムを目の前にかざす。

「フランっ！ 少し右！」

上空から見ると、リオがホアンのダガーをライフルで叩き落しながら、フランに指示を送っていた。言われたとおり、フランはチャクラムを少し右に移動させる。そしてアリエルの砲撃は一瞬の光と共にフランを直撃した。

アリエルの放った光弾はフランの水のチャクラムに反射して、左フラッグを見事貫通する。

ダニエルはパティの相手をしており、かつ逆サイドから予想外の軌道で襲来した一撃を防ぐことは不可能だった。

前半、敵に同じような作戦で中央フラッグを一瞬にして破壊されたが、今見た一撃は正にというか言葉通りの『光速』の一撃だった。これで第三段階完了した。

24 約束

「見事に出足を挫かれたぜ。流石だな死神さんよ」
「そりゃどうも」

にたにたと、不気味に唇を歪ませた黒人に、ソーザは穏和な表情を崩さず対応する。

この黒人のパワーと技術には恐れ入る。間断なく流れるような攻撃と、しなやかな足捌きでソーザを翻弄する。

「やっと、俺にもそれなりの相手がマッチアップしてくれて嬉しいぜ」

エステシオの風圧だけでも吹き飛びそうな右アッパーを、ソーザは紙一重でかわす。

「今までは手抜きだったのかい？」

「いやいや、そんな事はなかったぜ。ただ物足りなかったただけだ。

俺が少し本気を出したら、きつと前半で勝負はついてただろうよ」

確かに。この男の戦闘能力は、ここにいる全メンバーの中でも群を抜いている。対峙して分かるが、スピード、パワー、経験全てにおいて、魔闘士トップクラスの实力を感じる。『黒豹』の異名は伊達ではないことを身を持って実感させられる。もしこの男が試合開始から全力でプレーしていれば、この試合は一瞬でケリがついていただろう。

「しかし、こんな辺鄙な場所であんたみたいなビックネームとやれるなんて、俺もついてるじゃねえか。『闇の死神』と呼ばれた凄腕の魔闘士、アレックス・シエロ。てつきりどっかで野垂れ死んだかと思ってたからなあ」

ソーザはエステシオの繰り出す、ワンツールのコンビネーションブローをかわし、懐に潜ろうと試みるが、エステシオの手の戻りが早

く断念する。戻した拳の近くで歪んだ唇が歪に動く。

「なあ、なんであんな魔法を使わないんだ？ 俺の拳をさつきからずっと避けてるのは、その剣に魔力を注入してねえからなんだろ？」

エステシオの言っている事は正解だった。土属性によって強化されたエステシオの打撃を、魔法で強化していない剣で受ければ、破壊されるのは明白である。しかし自身の魔法は極力使用したくない。出来るのであれば、使用せずこの男を撃破したかったのだが……。

しかし、このままでは体力的に劣るこちらが不利になる。数的有利な現状であるが、絶対的な存在であるこの男は絶対に撃破すべきだ。できなければ、ソーザを殺した後、この男は妹達まで、確実に手をかけるだろう。

ソーザは腹を括る。

だから貴様も覚悟しろ

「じゃあ覚悟は出来ているんだろうな？ 俺の属性が何かは分かっているんだろう？ なら案内してやるよ、恐怖と絶望の世界にな」
そう言い放つと、ソーザは魔力を解放した。肩越しに黒く禍々しいオーラが、噴煙のようにたちこめる。魔力を解放したソーザはエステシオに向けて忠告する。

「今から繰り出す俺の剣撃をお前は受け止めないほうがいい。……いいか受け止めるなよ。こいつは最初で最後の警告だ」

忠告というより、命令に近い形でソーザに念を押されたエステシオは生唾を飲む。

ソーザの表情の変化にも驚いたが、それ以上に空気の変化に戸惑いを隠せなかった。目の前にいる優男の周りの空気が張り詰めて心臓を激しく圧迫する。背中に冷たい汗をかいているのがわかる。この属性は危険だ、頭の中で真つ赤なベルがけたたましく警報を鳴らしている。

「いいか受けるなよ。受けた時が貴様の最後だ……」

そんな事をいいながら、懐深くに入ってくるのだから、無茶苦茶だ。エステシオはバックステップで間合いをとろうとするが、ソー

ザの漆黒の双剣は確実にエステシオの首筋に向けて飛んでくる。それを身を捻り間一髪で避け、そのまま地面に転がり間合いをとる。

「いい勘だ。しかし俺もそんなに時間がかけられないんでね。残念だが貴様の希望通りの時間までは相手はしてられない」

ソーザは立ち上がったエステシオに双剣の先を突きつける。エステシオは久方ぶりに恐怖という感情を抱いた。

遠目でソーザの魔力解放を確認する。フランはリオの援護に戻りながら、横目でソーザの周りを覆う、黒の噴煙を心配そうに眺める。そして一心に勝負の早期決着を望む。

お願いだから、早く魔法を解除して欲しい。

これ以上、彼にあの魔法を使わせないでくれ！

多分、アリエルやパティはソーザの症状に気付いていないのだろう。これは自分、そしてミシエルさんもおそらく知っていたであろう。私は最近、その事実を知った。彼の家に宿泊したあの日、皆との会話の中で些細だが、今思えば矛盾した言葉があった。

あの日の出来事、食事中の楽しい談話と思い出話。そこでアリエルが、からかうような笑い声で指摘したソーザの欠点。

『兄様は味音痴』

果たしてそうだったのだろうか？ フランは幼少期の頃を思い起さず。ソーザはミシエルよりも頻繁に厨房に入り、皆の夕飯を作っていた記憶がある。むしろミシエルの料理が酷くて、仕方無しの部分が大きかったようだ。

味音痴ならば、その時にフランは思うはずだ。

彼の料理はまずかった、と

しかし、当時の自分はソーザの料理に違和感など感じなかった。思い出そうとしても、記憶にない。そこに夜、ソーザと話したあの内容だ。彼が話してくれた、ミシエルの話と私が幼いながらに記憶していた映像。そこから導き出される答えは一つだけだった。

『彼の属性も彼女と同じく生命を糧にして発動する』

あくまで想像だが。もしかしたら私と別れた後、味覚障害になったかもしれない。しかし、それはあまりに都合が良すぎる。やはり彼の味覚障害は魔法の使用による後遺症なのではないだろうか。では何故、彼はそのような障害を背負ってしまったのだろうか。

これも直ぐに答えは導き出された。

ミシエルがいなくなったからだ。

彼の戦闘後の負担を軽くしていたのは間違いなく彼女の治癒魔法だった。彼女がいなくなったことによつて、これまで彼女がソーザにおこなっていた、生命の回復が出来なくなったのではないだろうか。

そう考えると、それなりに辻褃は合う。ならば、彼の魔法の使用は彼自身の寿命を確実に縮めるものに間違いない。

だから

「死なないで……」

フランは苦しい胸に手を当てて、祈る。自身の予想が外れていることを。

今まで漂っていた土の匂いが消えた。

これで五感の内の一つ目嗅覚が消えた。

既に味覚は失っている。正確に言えば、二つ目だろうか。今までの無理が祟ったせいだろう。前に魔法を使用した際、使用後に味覚が戻ることはなかった。

この閻属性は本当に厄介極まりない。魔法を使用中の自分には、決して近づくなと事前にアリエル達には忠告しておいた。

使用する間、徐々に五感が削られる。今のところ味覚と嗅覚で済んでいるが、視覚や聴覚が持っていかれると正直しんどくなる。感覚を失う間隔も、昔に比べると随分短くなっている。

視界も滲んで、手にしている剣の触感も薄れてくる。そろそろ、どちらかが消えそうだ。

エステシオは以前、回避に専念して攻撃に転じる様子はない。このままではこちらの五感全てが無くなり、がむしゃらに剣を振るう状態になりかねない。

こんな時お前がいてくれたら、な。

ソーザは彼女を思い出す。

倒れこむ彼女を抱えた自分に、彼女は囁くように優しく話しかけた。彼女の柔らかな手が頬にあたる。そして、彼女はその手を滑らせるように自分の口元へ。彼女の温かさが痛いほどに伝わる。

「ねえアレックス、実はね私ってさ、妹がいるんだよ。アリエルっていつて年の離れた、まだがきんちよのさ。幼い頃の私にそっくりだから、すぐ分かるよ」

思い出す。亜麻色の美しい髪を。

「だからさ、私がいなくなつて、もしね、もし妹が独りになったら

「思い出す。心配そうに下がっている、可憐な眉を。

「支えてやってくれないかなあ、一人前になるまで、さ。本当は姉である、私の役目なんだけどさ……」

思い出す。伏し目がちで残念そうな蒼い瞳を。

「こんな有様だし」

思い出す。呆れたような、その口ぶりを。

「よろしくね。でも私は幸せだったよ。貴方に会えて、過ごせて、笑って、泣いて、呆れたり、夢中になったり……楽しかったよ……。ありがとうね、バイバイ……」

思い出す。寂しそうな、でも幸せそうな笑顔と、頬に流れる涙を。忘れない、あの時の約束を。

約束は守るさ、絶対に

そう決意し直した矢先、体躯がゆらりと柳のように揺れる。

触感が無くなった。

その一瞬の間隙についてエステシオが強力な右ストレートを発射してくる。それをソーザは受け止める。

エステシオは激しい衝突音でも響くかと思っただろうか。無音のままエステシオの拳は空を切る。というよりもこの場合、拳ではなく腕の間違いだった。

彼の肘から先の部分は丸々無くなっており、切断されたようなきれいな傷口からは吹き出るように、血が流出している。あつという間にソーザ達のいるエリアは血に塗れる。周囲を見渡し、エステシオは理解したようだ。自分の腕が斬られたのではなく消し飛ばされたことを……。剣に触れた拳は消え去り、腕はきちんと伸びきっていた。そう、剣に触れたであろうという肉体部分が、きれいさっぱり消えてしまっていたのだ。

「悪いな、もう聴覚も消えちまって、何にも聞こえねえんだ。視覚もここらへんでどうやら限界らしい。当たり所が悪いと一瞬で死ねないが勘弁してくれ」

血の吹き出る腕を抱え、もがき苦しむエステシオの返り血を盛大

に浴びたソーザは、霞みかかった視界の中、すり足でゆっくりと近寄ると、冷徹に言い放つ。悲鳴にも似た叫び声を上げていた彼は、みじん切りのように双剣に切り刻まれ、その存在をこの世から消されてしまった。

戦況を一望して、フランと対峙していたホアンはため息を一つ、
「あの筋肉馬鹿が……。これじゃあもう勝利なんてもんはありえま
せんねえ。まあいいでしょう、彼を失ったのは痛いですがそれはこ
のフラッグ戦における場合ですしね」

そう呟くと、颯爽とフィールド外へと飛び出る。意図的な指定工
リア外への逃亡は、基本退場となる。ホアンの行動は明らかに失格
のそれに該当した。

「ダニエル！ マイコ！ 茶番は終わりです。役目は果たしました
よ。撤退します」

フィールド外から、両サイドバックに叫ぶ。それを聞いた二人は
無言のまま後退し、フィールド外へと退いた。

それはあまりにも呆気なく、迅速な対応だったので二人の相手をして
いたパティとアリエルは一瞬冗談だろうと顔を見合わせている。
なににせよ、無人となった右サイドのフラッグをアリエルが叩き
折って、『フラッグ』は終了した。後半戦が始まって七分が経過し
ていた。

両軍重傷者三名、死亡者一名をだした壮絶な戦闘が終わり、アリエルと
フランは急ぎ、ソーザの元へと駆けつける。

ソーザの周囲にたちこめていた禍々しい噴煙は既になく、力無さ
そうに立ちつくすソーザを見て、フランは青ざめる。

焦点の定まっていないソーザの視線は、ぶらりと天を青仰いでい
る。フランがソーザの意識が飛んでいると理解した瞬間、ソーザは
崩れ落ちる。

「兄様？……兄様！」

その体躯を抱きとめたアリエルが、心配そうにソーザの体を揺さ

ぶる。

「……………」

しかしソーザは反応しない。まるで全身麻痺におちいったように動かずに、ただ小さくうわごとを呟く。

「私だよ！ アリエルだよ！」

「…………… ああ、約束は守ったさ」

兄妹の会話は、聞く限り成立していなかった。

「何なのさ！？ 約束って」

「ミシエルさんとの約束……………」

「えっ…………？」

苛立つアリエルの後ろで、フランはソーザの代わりに返答する。

「彼女との約束だと思う。なんで私は気付かなかったのかな……………」

こんなに似ているのに、あんなに懂れていたのに。……………どうして、私はあの時気付かなかったのかな

血の繋がっていない兄妹、同じ髪と眼の色をした二人の女性。ミシエルとアリエルは姉妹だったのではないだろうか。そして彼女は妹を彼に託したのではないだろうか。そして、彼はその言葉を律儀に守り通したのではないか。想像でしかないが、彼はきつとそういう男だ。

「……………もう、いいだろう…………？」

「何がさ？ 何にも良くないよ！」

アリエルの腕の中で、息が細くなるソーザの意識を必死で取り戻させようと、叫ぶようにアリエルは反発する。

「駄目だよ！ こんなイヤだよ！ ねえ、どうにかして……………」

アリエルは大粒の涙と鼻水を垂らして、懇願する。
誰にお願いしているのかも定かでない。

その背後でパティが救護班に向かって、ヒステリーでも起こしたかの如く、担架を要求している。

フランは呆然と立ち尽くす。

リオはロンドとコーラーを介護しながらも、遠めでアリエル達を

心配そうに見つめている。

「…ねえ、誰か……、誰か、お願い……」

アリエルが冀^{こいねが}う。

フランは力なく横たわるソーザの状態に絶望した。

その瞬間、ソーザの胸元の魔石と、アリエルの手元に置かれた二丁の銃がキラリと輝いた

意識が遠のき、体が軽い浮遊感に包まれる。

気がつくと、一面に広がる白い雲の上に立っていた。

空は極めて蒼く、風は爽やかで、とても心地よかった。

そんな雲上の中、一人ポツリと行き先の分からない一本道を歩く。

自分は何を目指していたのだろう。ふとそう思い考える。

何かが欲しいわけでもないし、今更やりたいこともない。

自分の人生は、彼女の為に費やすと決めたのだから。

そういえば、彼女は何処にいったのだろう。

辺りをキョロキョロと迷い犬のように見渡すけれど、誰もいやしなかった。

「参ったな」

独りごち、雲上に敷かれた真っ白な道を進むと、道は少しずつ上り坂になってきた。

それをさらに進む。

しばらくすると、雲の丘の上に一軒の小さな小屋が見えてきた。

この小屋……、何か、懐かしい気持ちになる。

親しみの持てる外観と、嗅ぎなれた匂い。

扉をノックする。

コン、コン、コン

「はい」

聞こえてきた女性の声に胸の奥が熱くなり、心拍数が跳ね上がる。更にノックする。

コン、コン、コン

「はい、はい」

その声に涙が溢れる。今度は眼の奥が熱くて堪らない。

コン、コン、コン

「ちょっと待ってくださいねー」

明るく、透きとおった声が返ってくる。

トタトタトタ、と可愛らしい足音を立てながら、彼女は扉をゆっくりと開き、顔を出す。

「お待たせ、よく来たね。泣き虫アレックス君」

そう言うと、彼女は彼の涙を華奢な指で拭う。

「…参ったな」

腰の辺りまでのびた長いカラムル色をした髪と、空のように蒼い眼、スラリとした純白のサマードレスを着た女性は女神のような微笑で、彼を出迎えてくれた。

「約束、守ってくれたんだ」

彼は小さく頷く。

「手にかかる妹だったよ。お前と一緒に」

「それは心外だな。私のほうがしっかりしてたよ」

彼女は唇を尖らせ、拗ねるようにそっぽを向く。

そういうところが姉妹そろって似てるんだよ、と思わず笑ってしまっ。

「で、俺は死んでしまったのかな？」

「そうね、半分正解で半分は不正解」

彼女は意地悪そうに、人差し指を彼の顔の前で小さく振る。

「私としては貴方とられるのは幸せだけど、ここにくるのはまだ少し早いみたい。しょうがないから、私の魔法で貴方を下界にワープさせてあげようか」

冗談にしかとれない言い方に、軽く肩をすぼめて、ため息をつく。

しかし彼女ならやりかねない。きつと、生前に俺の魔石が剣にこつそり細工でもしたのだろう。

その態度が気に喰わなかったらしく、彼女は頬を膨らませる。

「そんな態度だと、無事に帰してやらないよ」

「いいよ、帰らなくても」

即答する。これには彼女も参ったようだ。

こんなに素直に反応されるとは思っていなかったようで、顔中真っ赤になる。しかしそれも一瞬で、直ぐに嬉しそうに鼻筋に皺を寄せ、笑みを浮かべる。

「残念、貴方にはまだまだ私との約束を守ってもらわなくっちゃ。

手のかかる妹みたいで」

「ああ、手のかかる妹だな」

「ふふっ、全く」

二人はそう言つと、小さく笑い合つ。

「またね」

彼女は彼の背後に両手を回し、顔を彼の胸にぎゅうっと押し付ける。

「またな」

彼は彼女を抱きしめ、右手で彼女の頭を優しく撫でる。

意識は深く沈んでいく。でも懐に残った彼女の感触は絶対に忘れない。

兄が目を覚ましたのは、『フラッグ』戦から三日経ってからだ。た。

病室はソーザの戦功を称えてか、広々とした大きな個室が割り当てられた。室内には子棚が一つと小さな丸いテーブル、近くには椅子が二つ置かれていて、他に余計な装飾品や置物のない小奇麗な雰囲気。困気が漂っている。

「兄様!？」

アリエルはソーザにすがる様なポーズのまま、大きな声をあげる。ソーザはそんな大声出すなど言わんばかりに、顔をしかめながらもゆっくりと上体を起こす。

「いきなり倒れて動かなくなったので、心配しましたよ」

パティも安堵の表情でお茶を差し出す。昨晚も泣きはらしたのだろう。彼女の目元は赤く腫れていた。

パティは人前では絶対に泣き顔を見せようとしない。それは、幼い頃からずっと一緒だったアリエルは知っていた。しかし、今回はかりはそれが丸分かりだった。

そして私も。……本当に、本当に心配した。

ソーザは会釈してカップを受け取り、口元へと運ぶところで一瞬静止する。

「どうかしました?」

「いやなんでもないよ……。それで俺は何日倒れていたのかな?」

「丸三日ですよ、本当に心配したんですからね」

ソーザの反応に首を傾げたパティだが、ソーザが微笑み返し直ぐに口元にカップを運ぶ様子を見て、目尻を下げる。傍でリオも頷く。「それはすまなかった、それよりもフラン嬢ちゃんは?」

ソーザの口から出た言葉に、アリエルの肩がピクリと上がる。

「……そ、それがね。フランは今大事な会議に出席してて……」

それを聞いたソーザは、沈痛な面持ちで物思いにふける。

一体、何を言いたかったのだろうか。アリエルは怪訝そうに兄の横顔を見つめながら思う。

この優秀な兄は、きつと何か重要な情報をフランに伝えたかったに違いない。そう思うと、つい口から言葉が漏れる。

「フランに何か用なの？」

「……ああ、これは彼女にとって結構辛い話になる。まあ、おそらく彼女は近日中にそのことを知ることになるだろうし、出来れば皆のいる場所で早く報告してあげたかったんだけどな……」

兄の浮かぬ表情から、嫌な予感がひしひしと伝わってくる。

「一体どういうことですか？」

アリエルの代わりに、パティが訊ねる。

「それについては私から説明させてもらおうわ」

背後から、突然聞き覚えのない声が出た。

振り返ると、赤ん坊と花束を大切そうに抱えたルイフェが立っていた。

「やあ、どうやら無事に会えたみたいだね」

「ええ、貴方には借りができちゃったわね」

見つめ合い、笑顔で挨拶を交わす二人に仲間はずれにされたようで、アリエルは面白くない。

パティも少し表情が固くなっていることから、おそらく同じ思いなのだろう。

リオは椅子に座ったまま、彼女の存在を気にせず、カップの中のお茶を啜っている。

「ごめんなさい、別に彼を奪うつもりはないのよ。確かに魅力的だけど、私の旦那は後にも先にも一人だけなの」

「いいかしら」とリオに赤ん坊を預けると、部屋の隅に置かれた机の上の花瓶に、お見舞いの花を生ける。それがとてもこなれていて、ルイフェの大人の成熟された美貌と相まり、アリエルはついっ

い見惚れてしまう。

「ええつと、どこから話しましょうかね。まず、私がどうしてここにきたか、ということから説明しましょうか」

リオから赤ん坊を返してもらい、ルイフェは椅子に座る。赤ん坊は愚図る仕草もなく、穏やかな顔をしている。そんな我が子の頬を、ルイフェは指で優しく撫でる。

「私ね、この子が人質にとられていたの」

その言葉にアリエル達は、一斉に驚きの表情をみせる。

そして同時に納得する。パティは何故彼女が裏切ったか、執拗に聞いていた。当然、近くでそれを聞いていたアリエルも疑問に思っていた。その理由が今はつきりと分かった。

「でね、この子を助けて保護してくれたのが彼」

そういいながら、隣で寝ているソーザを指差す。

困った様に笑う二人は、傍から見ると、仲睦まじい夫婦のようだ。

「私はね、人質を取られて脅迫されたのよ。『娘の命が惜しいなら反乱軍につけ』、ってね。もう従うしか道はなかったわ。国よりも自分自身よりも大切なモノを私はなんとしても守りたかったの……」

そう話すルイフェの気持ちは痛いほど分かる。アリエルも同じように悩んだ。救済の糸と、それを掴める人の数。どちらかを守る為にもう片方を犠牲にする……。そう考えると、

「兄様は凄いな……」

そう、ソーザはどちらの犠牲も出さずに二人を救ってみせたのだ。フランは勿論のこと、ルイフェにまで救済の糸を用意し、見事皆の苦境を救ってみせてくれた。

しかし、その兄は思っていたよりも表情が暗い。変に思い、眼をパチクリとさせているとその口が開く。

「アリー、俺はお前が言っているほど上出来な人間じゃないさ。現にロンドさんは重傷を負ったし、相手のほうに限っては死者も出た。それは紛れもない事実で、どうしようもない現実なんだ。俺は俺の大切な人達を守る為に、情報を集め、奔走した。結果、ルイフェさ

んを助けることに繋がったけど、犠牲が出たことも確かだ。俺は俺の為にエステシオを殺した……。リオちゃんに少し意地悪な質問をさせてもらつよ。もし弟さんとアリー、どちらか選べと言われたら、どちらを選ぶ？」

ソーザの言葉に心臓が跳ね上がる。突然のディープな問いかけに、動揺を隠せない。しかしそれを落ち着かせてリオの答えを待つ。

そして少し間を置いて、リオの小さな口が「ディエゴ」と消え入るような声で答える。

「なら、俺とリオちゃんはお互いの大切な人を守る為に、今回のような殺し合いをしなきゃならなくなるかもしれない」

先ほどまでの高揚感は、引く波のように消え失せる。なぜ、兄はこんな胸くそ悪くなるような話をしているのだろう。

「世界はバランスよく出来ているよ。裕福な家柄の者がいれば、そのせいで借金を抱えて生きる、貧困層の人達も存在する。お金は常に一定量しかないからね。誰かが独り占めすれば、それを持たない者が絶対にでてくる。見えないものだってそうだ。幸せになる人の影で、不幸に嘆く人も少なくない。世界の人が皆幸せになるなんてことは、絶対にありえない。本当に良く出来ているよ、世の中ってやつは」

少し自嘲気味に笑いながら話すソーザに、いつもの優しい雰囲気はなく、ただ物哀しそうに見える。

「それは『全人類が幸せでありますように』って理想を願うなっってことでしょうか？」

不満げに言うパーティに、ソーザが小さく首を振る。

「いや、そうじゃないんだ。皆の幸せを想う事はとても素晴らしいことだ。是非ともそんな世の中になってくれたらいいと思うよ。でも、どこかできつと今回のように、守るものと捨て去るものの判断を下される事が、必ず来る。その時、アリー達に後悔するような決断をして欲しくないんだ」

そして、と言葉を紡ごうとした時、部屋の扉がノックされる。皆

の視線は、来訪者に釘付けになる。

来訪者は、目に一杯の涙を溜めたフランだった。

彼女は今朝早くから、会議のために役場まで足を運んでいたはずだ。彼女はゲーム終了と共に、事態の收拾と今後の政治方針の話し合いに参加してくると言っていた。ということは、会議は終わったのだろうか。そして彼女の涙はどういう意味があるのだろうか。

「やあ」

軽く手を挙げて挨拶するソーザにフランは大股で歩み寄ると、直立姿勢のまま拳を握り締めて、歯を喰いしばる。

「……なんで」

フランの発声する小さな声に一同が耳を傾ける。

「なんで私の国はこうなっちゃったんだろ……？ どうしてなの？」

ぐちゃぐちゃな泣き顔で、ソーザの胸元に拳を押し付ける。

「ごめん、俺が後もう少し早く目覚めていれば、少しは覚悟して話を聞いたのかもしれない」

「どうということなのさ？」

フランの涙の意図が、アリエルには分からない。

「今言ったことだよ。フラン嬢ちゃんは決断した。結果はあんまり良い出来じゃなかったって事さ。説明は……どうする？俺が話したほうがいいかい？」

その問いかけにフランは鼻を嚙り、涙を拭って首を振る。

しかし、彼女はとても説明できる状態には見えない。

すると、側に座っていたルイフェがフランの背中を擦りながら、「これは私が話すわ。一応、当事者でもあるし、私が真相をきちんと説明するわ。それに私はこの子の為にも、きちんと貴女達に説明する義務があるわ」

その声に反応したフランが、ルイフェを見やる。その眼から、彼女がどうしてここにいるか、理解できていないようだった。

「私はその彼に助けてもらったの。この子を人質にされていたのよ、それで貴女達を裏切ったの。貴女にも謝らないといけないわ。

……本当にごめんなさいね」

ルイフェは簡単に説明する。

「私を裏で脅して利用していたのは、法国家『ロマリエ』だったのよ」

パティの両眉が釣りあがる。

彼女が驚くのも無理は無い、確か反乱軍の背後にいた国家は『イングリド』ではなかっただろうか？　そして正規軍を支援していたのは。

「偽造^{フェイク}工作、ですか……」

アリエルが混乱する思考の中で首を捻っていると、リオが呟くように端的に答えを示す。

「そう、反乱軍を影で支援していたのは『イングリド』ではなく、本当は『ロマリエ』だったってわけ」

「それはおかしいじゃない？　だって正規軍を支援していたのも、『ロマリエ』だったじゃない。わざわざそんな内乱を起こして、メリットなんかあるの？」

すかさず、パティが口を挟む。

「それがあるのよ。奴等の考えは最低だったわ。この子がいなかったら、私が奴等を殺してやりたいくらいに」

尋常でないルイフェの発言に、アリエルは息を呑む。

「奴等の目的はトラヴァーリそのもの。この国の全ての実権を手にしたかったの。でも外見上は支援者として、友好的に振舞った形でそれを実行したかった。でも、トラヴァーリの優秀な官僚が、それをさせなかったの。中々思惑通りに事を運べない、そこで奴等は考

えた。考えた末、ある事を思いついた……」

「それが内乱……」

リオの言ったことに、ルイフェは静かに肯く。

「フランやルイフェさんには悪いかもしれないけど、大国であるロマリエがこのトラヴァーリをわざわざ占領する程のメリットが見つかからないわ」

「あ、私もパティと同じ。だってさ、トラヴァーリって、ちっちゃな国じゃん？ 特に名産があるわけでもないのに」

「そうね、確かに何にもない国ね。何も無いからこそ、ロマリエはこの国を支援してくれていたのよ」

二人の意見に、ルイフェは肯定的な台詞で受け答える。

「でもね、なんにもないこの国でも唯一の特産があるのよ」

「……鉱石ねっ！」

そこでパティが結論に達したらしい。眉尻を上げ、目を大きく見開いていた。

「ええ、その鉱石の中でもとびっきりの鉱脈が、最近見つかったの……。そして、それを見つけた人物は他国の侵略を恐れて、それを隠そうとした」

「……でも、その情報が、ロマリエに漏れた」

発言したのはリオ。彼女もそれなりに理解できてきたらしい。どうやら、話が見えていないのはアリエルだけのようだ。

「それを知ったロマリエは、トラヴァーリの吸収を画策し始めたのよ。大国ともなると、体裁もあるから、無闇に戦争はけしかけられない。でもトラヴァーリをロマリエ政権の傀儡にするにあたって、邪魔な人物が多すぎた」

「それで今回の内乱って訳ね……」

「そう正直、内乱はその人物達をまとめて始末する為のカモフラージュでしかなかったの。私もこれを知らなければ、こんな殺意どっかに捨ててるわ」

「その中にフランのお父さんもいた……」

ルイフェは哀しそうに目を伏せる。

「ええ、彼もその優秀な官僚の一人で、トラヴァーリが傀儡政権になることに、最後まで反対していたわ。一つ筋をピンと通した考えを持った、素晴らしい方だったわ。でも、それがロマリエには面白くなかったのよ。だから殺した。正直『フラッグ』なんてゲームはロマリエにとっては、どうでも良かったのよ。だって、邪魔な権力者や優秀な官僚は、もう始末してしまった後なんだから。反乱軍が勝てば、反乱軍のトップは既にロマリエの操り人形だし、後は筋書き通り、ロマリエが軍隊を派遣、鎮圧して体裁を繕って、そのままロマリエの言いなりとなる暫定政府を置けばいい。仮に正規軍が勝ったとしても、政権にロマリエの息のかかった政治家を送り込めばいいだけ。反対するような有力な政治家はもういない……。全てはロマリエの手の平の上だったのよ。でも、外にいい顔して国を乗っ取るにはやっぱり『フラッグ』が成立した方が、都合が良かったのよ。できれば、反乱軍勝利のパターンでね」

「確かにそっちの方が外面的には良い印象を残せるわね。同盟国を反乱の危機から救いました、ってね」

パティが悔しそうに相槌をうつ。

全く反吐がでるような内容だ。ロマリエの上層部の連中は、トラヴァーリの人達の事をどう思っているのだろうか？ 物や石ころと同じように扱っているのではないだろうか。こんな話を聞いていると、世の中の全てが腐っているとすら思えてくる。

「最低じゃん……」

アリエルは吐き捨てるように、独りごちる。

「そうね、最低ね。最低ついでにもう一つ。これは知らない方が幸せだったかも知れないけど、パティさんには少し関係するかもしれないし、言っておくわ」

「……？」

ルイフェに言われ、パティは首を傾げる。するとソーザが手をひるげ、ルイフェを制止する。どうやら話し手が切り替わるようだ。

ルイフェは呆れたように笑うと、口をつむぐ。

「ここからは俺が話そう。アリー、蜂蜜漬け店の話を覚えているかい？」

「う、うん」

話を振られたアリエルは肯く。あの話は兄を説得する為に、懸命に説明した。忘れるはずがない。

「おかしいと思わないか？ ロマリエは『フラッグ』を成立させたののに、正規軍側から直前になってルイフェを引き抜いた。これでは、ただでさえ魔闘士の数が少ない正規軍が『フラッグ』に参加できる可能性が、ますます低くなる」

「そういえば……」

「だろ？ でもあるタイミングでトラヴァーリの内乱を知れば、絶対に参加する魔闘士がいる事を知っていれば、どうなる。その子は正義感が強くて、父親の仕事を手伝いたくて、魔闘士試験に受ければ、きつと駆けつけて参加の意思を表明するだろう」

「それって、まさか……」

パティはそれ以上言葉が出ないでいる。手を震わせ、顔色は真っ青で愕然としている。

「自身の魔闘士試験の合否に関わらず、内乱の情報を知った嬢ちゃん、必死に魔闘士をかき集めるだろう。そうなれば、寄せ集めの烏合の集だ。結束力のない相手なら、反乱軍の勝利は容易たやすかつただろうな」

その通りだった。内乱の情報を知ったフランは我を忘れ、誰彼構わずに魔闘士を集めると言い出した。そして私たちが協力することになった。

「そして、その情報をアリー達に伝えたのは誰だった？」

胃の中が、きゅうつと痛くなる。アヒル口の肥えた男を思い出す。まさか彼がロマリエの諜報員だった？ 数年もかけて、この時の為にバーゼルで仮面をかぶり続けていたのか。

ルイフェは汚いものでも見たかのように、唇を歪ませる。

「そう、カネイラは『ロマリエ』のスパイよ。そして、私の子供を攫った張本人」

そして、冷たく嫌悪感に満ち満ちた言い方で話す。そういえばカネイラと別れる際、店の外から赤子の泣き声が聞こえた気がする。

「そ、そんな……」

じゃあ私達の努力はなんだったのか？

兄と離別する覚悟で望んだ説得も、命を張って出場したゲームも、全てはロマリエという大国に操られていただけだったのか……。

しかし、それ以上に酷い仕打ちを受けた人がいる。

父も守れず、国も救えず、ソーザの懷で涙する女性。

フランの苦労は一体なんだったのだろう。何度も傷つき泣いて、それでも立ち上がり、頼れる者達に必死ですがり、助けを求めた。でも結果は変わらなかった。

「……酷すぎるよ」

そんな思いが、言葉になる。

そして、思い出す。ソーザと話した時の兄の言葉を。

『世の中には救済できる人と出来ない人がいる』

ああ、兄はこの事を私に忠告してくれていたんだ。少なくとも、結果的に私の心は傷ついたのである。今まさにそれを実感している。こんな汚い筋書きを考えたロマリエの連中と、それに気付かなかつた私の無知、無力さに腹が立つ。

横で悔しそうに爪を噛むパティも、自分と同じ事を思っているのだろうか。本当に悔しい。

「多分フラン嬢ちゃんは今日の会議で真相を聞いたんだろう。まあ言わなくても分かるよな。だって国家代表に選ばれた男がさ、内乱が起きた時に真っ先にロマリエへの亡命を表明した政治家だったん

だから。聡明な嬢ちゃんのことだから、直ぐにおかしい事に気付いたんだろっ?」

ソーザは泣きじゃくるフランの頭を、そっと優しく触れるように撫でてやる。

「俺も救ってあげたかった。ごめんな」

ソーザに謝られたフランは小さく「いいえ」と答えた。

彼女も皆に感謝しているのだろう。言葉にならない言葉で、「ごめんなさい」と「ありがとう」をしきりに唱える。

アリエル達はそんなフランにかける言葉が見つからず、彼女が落ち着くのをただ見守った。

27 真相2（後書き）

どうも結倉です。

更新は後1回を予定しています。

次で最終回となります。

今まで読んでくださった読み手の皆様、もっ少しだけお付き合いの
ほどよろしく願います！

「すまなかった。もう大丈夫だ、少し落ち着いた」

数十分後、フランが少し落ち着きを取り戻したところで、口を開く。

しかし彼女の顔はむくんでいて目も赤い。体全体に覇気は感じられずに、弱々しく悲鳴をあげている様で、とても大丈夫とは思えない。

そうなるのも、無理はない。彼女は自分の家族と国を守りたくて闘ったのだが、結果、父は戦死し、国は他国の傀儡となり、父の理想とはかけ離れた方向へと歩み始めてしまった。

そして今、どん底で沈みきった心を必死で立て直そうとしているフランを見ると、誰もが気の毒だと思うだろう。

「そう、じゃあアンタこれからどうするの？」

しかし飛んできたのは早くも今後の話題。腕組みし、片目だけを器用にフランの方にむけ、パティが言う。

「とりあえず、三千ルークの支払い……」

無表情で報酬を要求するのはリオ。

「ええっ!？」

一人慌てるアリエルを他所に、二人は遠慮の全く無い言葉をフランに投げかける。

「ちよつと二人とも、いくらなんでもそれはないんじゃないのさ」

「あんたねえ、本人が大丈夫って言ったなら、大丈夫なんですよ？
なんか文句あんの？」

パティは非行に走った少年のように据わった目線で、アリエルを睨む。

あまりの迫力にちよつとびびる。

横ではリオが当然とばかりに、無言で顎をカクカクと揺らして煽る。まるで親分子分のような関係だ。

「で、でもさ〜」

彼女達が本当に性質の悪そうな顔をするので、やや引き気味に反応する。

しかし背後から聞こえてくる、押し殺したような笑い声に首を振る。

「いや、いいんだ。私が大丈夫と言ったのだから。ここまで素直に励まされると、な。私は良い親友を得た事を神に感謝しなければいけないな」

見ると、フランが口元を押さえながら、体を折って笑っているではないか。なにがなんだかわからないような表情をしたアリエルにソーザが小さく笑いながら「アリーはそのままでもいいと思うよ」と一言。

「そうだな、これからどうするかは、もう少し時間をかけて考えるとするよ。それに報酬は準備してあるよ。隣の部屋に人数分、きちんと用意してある」

そう言って、フランは右隣の部屋を指差す。

「それに困った時は貴女達がいるから。今、私は分かったよ。父を亡くして、独りになって、国に尽くす意味も無くなっただけ……」

ここでようやくアリエルにも分かった。

パティやリオの台詞の意味を。

パティのそれは彼女の将来を心配しての一言。

リオのそれは彼女の自棄を心配しての一言。

勿論、私だって二人と同じだ。

そして、フランはアリエルの期待通りの台詞を少女のような口調で言う。

「私にはこんなに素敵で頼りになる友達がいるから……!」

フランは三人の輪に両手を広げ、飛び込む。アリエルの背中にフランの柔らかな胸があたり、パティとリオは首を両手で絡み取られ

た。

この瞬間、私達は本当に真の親友になれたと感じた。それほどまでに私達の表情は歡喜に満ちて声に色があった。

よく言われる。結婚相手や雑談相手は選べても親友は選べない。人が一生を生きるうえで大切なものは人の絆である、と。

今、正に私は、そのかけがえのない宝物を手に入れたのだろう。そんな私達の微笑ましいやり取りを、ソーザは安堵の表情で見つめている。

隣で慎ましく微笑むルイフェも、きつとそうなのだろう。

そして彼女は椅子から立つと、彼女の小さな唇が冗談めかしたような言葉を発する。

「あら、お姉ちゃんは独りじゃないわよねえ。ねえ、イルイちゃん」

……聞き違いか？ アリエルは一瞬そう思った。

「……ええええええつ……！！」「……」

そんな円満な空気の中、四人に歩み寄っていった女性の一言に、五人は一瞬で固まった。

「お、おねえちゃん……！？」

赤く腫れて窄んでいた瞳を、限界まで大きくしたフランが復唱する。

「そう、お姉ちゃん」

ハッキリと軽やかな口調で答えるルイフェ。

「だって、私がバーゼルからわざわざ来たのは何もソーザさんに礼を言う為だけじゃないのよ。それだけなら、ソーザさんがバーゼルの戻ってきた時に伺えば良いだけのことでしょ？」

確かに言う通りである。正規軍の裏切り者であったルイフェが、リスクを犯してまで戻ってくる必要性は皆無だ。ならば隠された別の何かが存在していて当然と考えるのが普通だった。

「私だって愛した人とお別れくらいきちんとやりたかったのよ……」

少し寂しそうに情熱的な事をいうルイフェにソーザは苦笑してい

た。

それが寂しそうに見えたのはソーザにもそんな経験があるからだ。多分彼女と。

そして私も両親と。

会いたくてももう会えない。自分の気持ちで整理できず、その場で足踏みを繰り返すのだ。そしてそれは自分自身で決着をつけないと、先に進むことなど出来ないからだ。

ルイフェがその一步を短期間で踏み出そうとしたのは、イルイの存在があつた事が大きいのだろう。

「まさか、フラン嬢ちゃんのお父さんとルイフェさんがそういう仲だったとは……」

驚きを通り越して呆れたとは正にこういうことを言うのだろう。

ソーザは肩をすくめて嘆息をつきながら、逞しく艶やかな美しい婦人を見やる。

白色の肌に紅い唇が印象的な若き婦人は、小首を軽く傾げてそれに対応するので、ソーザ自身も参ったというしかない面になっていた。さすがの兄も、そこまで下調べをする時間も察知も出来なかつたようだ。

「しかし、いつの間にそんな関係に……、私は全く気付かなかつた」

「あら、でもいいことじゃないの？ 無くなつたと思つていた家族が実はいたんだし。これからはお義母さんと妹の為にもしつかりしないといけなくなつたわね」

そう言つて、呆然とするフランにパティは近づくと、背中を押しやる。「良かったね」と囁いたのはリオ。彼女達に景気よく突き飛ばされたフランは、赤ん坊の前で五指をワキワキと不規則に動かしながら、戸惑いを隠せない。

「あら、お姉ちゃん、抱いてくれるのかしら？ イルイ、お姉ちゃんですよ」

「あ、あう……」

ルイフェから赤ん坊を渡されたフランは、機械人形のようにカク

カクとしたぎこちない動作でイルイを抱く。首をきちんと固定しゆつくりと支えるように優しく。

イルイは少しの間、眼をキョロキョロとさせていたが、フランの抱き方が良いのか、それとも相性が良いのか、直ぐに瞳を閉じて眠りだした。

「おお、以外に上手じゃないか」

「うんうん」

兄妹からの世辞に、顔を真っ赤にして照れを隠せないフランは、もう完全にノックアウト状態だった。

「フランには申し訳なかつたわ。私との関係はあの人からいずれきちんと説明するつもりだったのよ。でもこんなことになって、言い出せなくて、ね」

無理もない。ルイフェはイルイを人質にとられ、一時期はフランと敵同士だったのだから。そういえば、ルイフェがいたサイドにはフランもいた。それは凶暴なエステシオに義理の娘が当たるのを防ぐ為だったのか。それにいざという時は、フランだけでも助けたかったのではないだろうか。今となっては彼女の思いが痛い程に理解できる。

「いえ、いいんです……。だってそれは仕方なかったから……」

「そうね。それにルイフェさん、物凄く手加減して闘ってくれていたよっだし」

「あら、やっぱり貴女にはばれていたみたいね、パティちゃん」

「そりゃそうですよ。私聞いたじゃないですか、『裏切り者とは思えない』って」

「あそこで本当のことを言うわけにもいかなかったから。でも実力が分からない程度に手を抜いたつもりだったんだけど……」

困った様に首を傾げながらも、視線はソーザに持っていくあたりは、アリエルやパティの稽古をつけた人物のあたりの検討が済んでいるとでも言いたいのだろう。

「コーチが良いんですよ」

肩をすばめているソーザの代わりに、アリエルが代返する。

軽い笑いが起こり、先ほどの爆弾発言による動揺が治まったところで、ソーザがベッドから身を起こし、側にあつた自分の荷の確認をする。

「さて、俺達もそろそろおいとましないと、な」

「え、もう帰るの？」

「あんた馬鹿じゃないの!? ソーザさんも仕事があるんだから、我が儘言わないの」

がっかりと肩を落とすアリエルに、小言を言うパティ。

「わたしもデイエゴが待つてるから……、それと」

リオはもじもじしながら、続きを喋る。

「わたし、今回は凄く足手まといだった。 Rondさんはわたしのせいで、今もベッドの上において、前半戦は怖くて、逃げ出したくて皆の邪魔しかできなかつた……。わたしはフランのお父さんが亡くなつた時と同じように、また無理だ、もう駄目だ、って思うばかりで、ちつとも成長していなかつた。でも休憩の時、アリーの気持ち、ソーザさんの言葉が、わたしの臆病な心を楽にしてくれた。後半にわたしがきちんと役目を果たせたのは、あなたのお陰。アリーが前と同じようにわたしに喝を入れてくれたんだよ、諦めるなつて」

「そんな、私だつて無力だつたじゃん」

そう言ってくれるのは嬉しいが、今回ばかりは自分もリオと一緒にどうすることも出来なかつた。しかし、リオの見解は少し違つたようだ。彼女は幼い容姿とは正反対の淑やかな微笑みを見せる。

「それは違う。アリーが諦めなかつたから、わたしは頑張れた。ソーザさんだつて、援軍に駆けつけた。これはあなたが諦めなかつたからだよ。そのおかげでわたしは胸を張つて弟に会える……。だからありがとう」

リオも家で帰りを待つ家族がいる。その唯一の家族である弟は、姉の魔闘士試験の合格も、破格の報酬を受け取っていることも未だ知らない。

そう言って、どこか恥ずかしそうにイソイソと荷を纏めるリオの仕草は、どこか落ち着きのないように見える。もしかして照れているのだろうか。

「いろいろと世話になった。本当に何度感謝しても、きりがないほどに」

「フランも私も貴方には返しきれないほど借りを作ってしまったわ。もし私の力が必要な時は連絡してね。協力は惜しまないわよ。連絡先はそうね……、決まり次第バーゼルのジョージさんに連絡しておくわ」

ルイフェは荷を背負ったソーザと握手を交わす。その晴れやかな表情は未亡人しておくには惜しいくらいだ。

「で、アンタはこれからどうするの？」

そう言いながら、パティはフランの胸元ですやすやと眠る赤ん坊のホッペをやさしくつつく。

「そうだな、当面はルイフェさんと一緒にいるよ。まずは色々話し合って、今後のことはそれからだな。父の仕事の残件や手続きなんかも山ほど控えているから、しばらくは遊びにいけそうにもないな。まあ私もルイフェさん同様、身の振り方が決まり次第バーゼルのギルドに連絡を入れよう」

「私も、家遠いから……。でも時間があれば遊びに行く。絶対に」

「そっかあ、じゃあ待ってるからね！ 絶対にまた家にきなよ。約束だかんね！」

その言葉に二人は深く頷く。

そして四人は身支度を整えると、それぞれの帰路へと足を向ける。ソーザ達は東へ、リオは西へ。

アリエルは残ったフランとルイフェに手を振る。

私は今回の騒動で自分の無知無力さを叩きつけられた。しかし抗おうとしない限り、無力なままだということも分かった。

これからの人生、私は絶対に諦めずに理想を追い続けよう。例え失敗に終わったとしても、それまでは全力で駆けてやる。失敗した

時は隣にいる友に助けてもらえばいいのだ。それに頼りになる兄もいる。

アリエルは両の手の平を空にかざして想う。

あの時、私の願いを叶えてくれた神様はまだいるのだろうか。

彷徨って出口の見えない孤独から、私を救ってくれた兄。

右も左も分らない私の面倒を嫌な顔をしながらも、常に心配してくれていた親友。

そして今回の件でまたかけがえのない人達が私の中に入ってきた。彼女らと出会えた事に心から感謝しよう。

その『軌跡』を作ってくれた神様に。

街道に出たところで、大きく深呼吸をする。

新鮮な野草の香りが鼻をくすぐる。心地よい日差しと爽やかな風を肌いっばいを感じる。

「ん〜っ。いい匂い！ ねえ兄様」

「うん？ …… そうだな」

ソーザは鼻を鳴らして、そう答える。

その仕草が変だったのだろうか、パーティが口元を手で隠しながら笑う。

「そんなに力んで吸い込まなくてもいいじゃないですか。確かにソ

ーザさんの大好きな春見草の香りですけど」

「いいじゃないか、好きな匂いなんだから」

ソーザは再び鼻を鳴らしながら、力ない笑顔を見せる。

「さあ帰ろうか、早くしないと日が暮れちゃうよ」

「うん！ 帰ったら梨と桃の蜂蜜漬けと子豚の丸焼きを食べるんだ」

アリエルは眼を輝かせながら、腰にぶら下げたある金貨の入った袋を叩く。今回の報酬である三千ルークは、色々あったが自分で稼いだ立派な給金だ。誰にも文句は言わせない。

「あんだ、そんな無駄遣いしていると、あっという間になくなるわよ」
「お嬢のパーティに言われたくないよ〜だ」

お金持ちには庶民の感覚はわかるまい。日頃が質素な生活なのでからこんな時くらい贅沢しても、神様は許してくれるに違いない。うん、違いない。

「まあたまには贅沢もいいんだけど、その前にアリーには魔闘士試験の試験代を返してもらわなくちゃな」

心弾ませ、軽い足取りで歩を進めるアリエルは、その一言に凍りつく。そんな凍りついたアリエルを他所にソーザは淡々と話を続ける。

「確か試験代は受かってから、働いて返済するって約束だったしね。まあ一括返済できるくらいの報酬だし、ちょうど良かったな」

軽かったはずの両足が、今は鉛のように重い……。

「でもほら、分割払いでもいいって言うってたじゃん？ それでどうにか……」

出来るだけの反撃を試みる。

そう抗うのだ！

「まあそれもそうだな……」

ソーザは少し考える素振りを見せる。

よし、これならある程度の贅沢は可能だ。希望は持てる！ 蜂蜜漬けは無理でも丸焼きくらいならば……！

「今後はアリーにも生活費を入れてもらわないといけないしな。よし最初は分割にしよう。それにもう一人前だし、お金の管理も勉強しないといけないからな。とりあえず最初は半分もらうぞ、千五百ルーク。そこから月々三百ルーク返してもらおうか」

「頭金に半分もっ！？ それに月々三百かよっ……！」

兄の口から出た返済プランに仰天する。

てつきり二年くらいかけてゆっくり返すかと思っただけに、シヨックを隠せない。

おまけに生活費も返済プランにセットされてきやがった。

「せ、生活費もですか……？」

「もちろん、もう立派に魔闘士として一人立ちしたんだから。これ

からはきつちり取り立てるよ」

「そ、そんなあゝ」

絶望に天を仰ぐアリエルの横で、腹を抱えて愉快に笑うのはパティ。
イ。

友の不幸がそんなに嬉しいのだろうか。

交渉に失敗して助けを求めたいのに、友はとうに私を見捨て、ゲラゲラと爆笑している。信頼している兄も今は敵だ。出来るだけ頑張って交渉したのだけど、今の私には味方になってくれる人は誰もいなかった。

神は私の願いを聞き入れてくれないようだ。

アリエルは観念し、肩を落として街道を進む。

彼女の気分とは逆に、空は透きとおった晴れやかな蒼だった。

END

最終話 『軌跡』（後書き）

とうとう完結となりました！

ここまで読んでくださった皆様に感謝です！

どうもありがとうございましたー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151u/>

ロウカス！

2011年9月30日03時21分発行